三重県埋蔵文化財調査報告２５２

替田遺跡（第４次）発掘調査報告

２００４（平成１６）年・３月
三重県埋蔵文化財センター

序

津市は三重県の伊勢湾沿岸のほぼ中央に位置し、人々の歴史とともに豊な文化遺産が培われてきました。このことは、様々な時代の、多数の重要な埋蔵文化財が、この地で確認されていることでもわかります。

たとえば、津市納所町の納所遺跡は弥生時代前期に農耕文化が定着していた頃の集落跡として知られています。

また、津市鳥居町鳥居古墳から出土した押出仏は７世紀のもので、その頃既に仏教がこの地方に伝わっていた証といえましょう。

さらに、現在の津市は、かつて日本三津のひとつとされる「安濃津」として、中世には交通の要衝でありました。この「安濃津」は明応の大地震によって壊滅したとされますが、近年の発掘調査でかつての繁栄が解明されつつあります。

この報告書は、国道163号国補道路特殊改良および県営ほ場整備事業（津中部地区）にともなって実施した、替田遺跡発掘調査の報告書です。

調査によって、平安時代後期の掘立柱建物や中期の井戸などの遺構が検出され、墨書土器や八花硯、転用硯なども出土しました。

ところで、埋蔵文化財が土地に根ざした文化財であるため、その保護については開発事業との調整は深刻な問題です。現在に生きる私達は、埋蔵文化財を国民共有の財産として、後世に伝えていく義務があります。一方、国民の生活の向上と安全の実現に必要なため、たとえ埋蔵文化財が包蔵された土地であっても、開発事業が避けられず、結果的に多くの遺跡が破壊されることとなります。

このため、開発に先立つ事前の発掘調査によって、いわゆる記録保存というかたちで埋蔵文化財を後世に伝え、地域の歴史の解明に少しでも役立つことができればと思っています。

今回の調査にあたりましては、地元の方々をはじめ、津市教育委員会、三重県県土整備部・農林水産商工部、津地方県民局津建設部・農林水産商工部など、関係諸機関から多くのご協力と暖かいご支援をいただきました。ここに深く感謝の意を表します。

平成１６年３月

三重県埋蔵文化財センター
所　長　　吉　水　康　夫

例　　言

1　本書は、三重県津市南河路に所在する替田（かえだ）遺跡の第４次発掘調査にかかる報告書である。

2　調査および整理の体制は以下のとおりである。

調査主体　三重県教育委員会

調査担当　三重県埋蔵文化財センター

調査第一課　第二係　主事　宮田勝功　田上　稔

発掘作業　（財）三重県農業開発公社

3　本書の執筆・編集は宮田勝功が、遺物の撮影は宮田勝功と萩原義彦が担当した。

4　本書が対象とした実調査面積は１,７２０㎡（国道163号部分１,４００㎡、県ぽ部分３２０㎡）である。

5　本書が対象とした現地調査期間は平成１１年９月１３日から平成１２年１月１３日である。

6　本書に用いた挿図の方位は、国土調査法の第Ⅳ座標系を基準とし、座標北を示している。なお、当該遺跡の磁北は６度40分、座標北から西偏している（平成７年国土地理院）。

7　本書では、下記の遺構表示略記号を用いた。

ＳＡ：柱列　ＳＢ：掘立柱建物　ＳＤ：溝　ＳＥ：井戸　ＳＫ：土坑

ＳＲ：流路　ＳＺ：その他　Ｐit：柱穴、小穴

8　用語については、次の語句を用いた。

「つき」には、杯・坏があるが、杯を使用した。

「わん」には、碗・椀・埦があるが、灰釉陶器、緑釉陶器、無釉陶器には椀を使用した。その他は碗を使用した。

9　挿図と写真図版の遺物番号は、実測図の番号と対応している。写真図版は特に断らない限り縮尺不同である。また本書に記載した遺構・遺物の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』（1997年度版）に準拠している。

10　替田遺跡の調査区および遺構番号については、すでにＡ～Ｅ地区で発掘調査が実施されているため、本報告書の調査区はＦ地区およびＧ地区とした。遺構番号については、Ｆ地区検出遺構を601から、中勢バイパスにともなう第１次・第２次調査のＡ～Ｄ地区に継続して付けることにし、また遺構番号Ｇ地区検出遺構を701からとした。

11　調査にあたっては、地元の方々をはじめ、津市教育委員会・三重県県土整備部・農林水産商工部及び三重県津地方県民局津建設部・農林水産商工部から多大な協力をいただいた。また津市教育委員会からご教示ならびにご指導を賜った。

12　本書が扱う発掘調査は、一般国道163号および県営ほ場整備（津中部地区）関連事業にともなうものである。

13　発掘調査の経費は三重県県土整備部、三重県農林水産商工部、三重県教育委員会が負担した。

14　本書で報告した記録および出土遺物は、三重県埋蔵文化財センターにおいて保管・管理している。

本文目次

Ⅰ　前言 …… 1
　1　調査の契機 …… 1
　2　調査の経過 …… 1
　3　調査の方法 …… 2
Ⅱ　位置と歴史的環境 …… 3
　1　位置と地形 …… 3
　2　歴史的環境 …… 4
Ⅲ　替田遺跡(F地区)の成果 …… 9
　1　層序 …… 9
　2　遺構 …… 9
　3　遺物 …… 21
Ⅳ　替田遺跡（G地区）の成果 …… 45
　1　層序 …… 45
　2　遺構 …… 45
　3　遺物 …… 50

挿図目次

Ｆ地区
第１図　遺跡位置図 …… 3
第２図　遺跡地形図 …… 5
第３図　調査区位置図 …… 7
第４図　遺跡付近字切図 …… 8
第５図　遺構平面図・調査区地区割図 …… 10
第６図　調査区北壁土層図 …… 11
第７図　ＳＲ601 トレンチ土層図 …… 12
第８図　ＳＢ610・613・621・622 平面図・断面図 …… 13
第９図　ＳＢ612・624、ＳＡ631 平面図・断面図 …… 14
第10図　ＳＡ633・634 平面図・断面図 …… 15
第11図　ＳＥ611 平面図・断面図・土層図 …… 16
第12図　ＳＥ627 平面図・土層図 …… 17
第13図　ＳＲ630 土器出土状況図 …… 18
第14図　ＳＫ632 遺物出土状況図 …… 18
第15図　Ｐit４土器出土状況図 …… 18
第16図　Ｐit11・12柱根出土状況図 …… 19
第17図　出土土器実測図(1) …… 21
第18図　出土土器実測図(2) …… 23
第19図　出土土器実測図(3) …… 24
第20図　出土土器実測図(4) …… 25
第21図　出土土器実測図(5) …… 26
第22図　掘立柱建物・柱列等方位図 …… 29
第23図　出土木製品実測図(1) …… 30
第24図　出土木製品実測図(2) …… 31
第25図　出土木製品実測図(3) …… 32
第26図　出土木製品実測図(4) …… 33
第27図　出土木製品実測図(5) …… 34
第28図　出土木製品実測図(6) …… 35
第29図　出土木製品実測図(7) …… 36
第30図　出土木製品実測図(8) …… 37
第31図　ＳＥ611 井戸枠模式図 …… 37

Ｇ地区
第32図　調査区地区割図 …… 45
第33図　遺構平面図 …… 46
第34図　調査区南壁土層図 …… 47
第35図　調査区西壁土層図 …… 48
第36図　SK703 平面図・遺物出土状況図・土層図 …… 49
第37図　出土土器実測図 …… 51
第38図　出土土器・石器実測図 …… 51
第39図　出土木製品実測図 …… 52

表 目 次

第１表　試掘結果一覧表 …… 7

Ｆ地区
第２表　掘立柱建物一覧表 …… 20
第３表　柱列一覧表 …… 20
第４表　出土土器観察表(1) …… 38
第５表　出土土器観察表(2) …… 39
第６表　出土土器観察表(3) …… 40
第７表　出土土器観察表(4) …… 41
第８表　出土土器観察表(5) …… 42
第９表　出土木製品観察表(1) …… 42
第10表　出土木製品観察表(2) …… 43
第11表　出土木製品観察表(3) …… 44
第12表　出土木製品観察表(4) …… 44

Ｇ地区
第13表　出土土器・石器観察表 …… 53
第14表　出土木製品観察表 …… 54

図版目次

Ｆ地区
調査風景 …… 55
図版１　調査前風景・調査後全景 …… 56
図版２　SR630・SB612・613 …… 57
図版３　SB621・SB622 …… 58
図版４　SB624・SA631 …… 59
図版５　SE611・627・SK632・SR630・遺物出土状況 …… 60
図版６　出土土器(1) …… 61
図版７　出土土器(2) …… 62
図版８　出土土器(3) …… 63
図版９　出土土器(4) …… 64
図版10　出土木製品(1) …… 65
図版11　出土木製品(2) …… 66
図版12　出土木製品(3) …… 67
図版13　出土木製品(4) …… 68

Ｇ地区
図版14　調査前風景・調査後全景 …… 69
図版15　調査後 …… 70
図版16　出土土器・出土木製品 …… 71

Ⅰ　前　　言

1　調査の契機

昨今の自動車の普及により、津市周辺の交通網は飽和状態になっている。国道163号は上野市方面から津市内への主要な幹線道路であり、一色町一色橋付近の交差点では、朝夕の通勤ラッシュ時に自動車の絶え間ない列が見られる。そのため国道163号のバイパスを南河路の南側に建設することになった。三重県埋蔵文化財センターでは、事業を計画した県土整備部道路整備課から事業照会を受けて、事業地が替田遺跡（遺跡番号201－759）および神戸遺跡（遺跡番号201－598）にかかることがわかり、試掘調査を平成11年１月に実施した。その結果、替田遺跡は7,800㎡が事業地内の遺跡範囲となった。中勢バイパスより西側では、試掘坑No.２から土坑・ピットなどの遺構を検出し、土師器壺・陶器椀などの遺物を確認している。（第３図、第１表）

このことをふまえて、県土整備部と文化財保護の協議を重ねた結果、事業地内の遺跡が滅失する部分1,400㎡について緊急発掘調査を実施することになった。また隣接する県営ほ場整備（津中部地区）関連事業部分320㎡も、合わせて調査を行った。

2　調査の経過

a　調査経過の概要

調査前の段階では、事業地内だけでは排土置場が確保できないと想定されたため、建設省管轄の中勢道路地内も借用する手筈となったが、未買収地もあり考慮した以上に土量が少なく用地内におさまった。調査にあたっては、調査区北西部で遺構検出面と遺構埋土が同色系であるため遺構検出が困難であった。また降雨のため作業に支障を来たしたが、地元の方々の温かいご支援により調査を無事に終了することができた。ここにご芳名を記して心からの御礼を申し上げます。（敬称略、順不同）

館　正志・田中正次・河合章一・池村　治・黒川勘一・本堂志げ子・内藤みつ・河合花子・前川恵子・黒川定子・森谷光子・杉田百合子・森谷みち子・矢代せつ子・芳村洋子・真弓百合子・伊藤敏子・黒川幸・伊東悦子・池村美智子・池村久寿子・池村昭子・田中正子・伊東誠子

b　調査日誌（抄）

Ｆ地区

【1999年】

10月６日　津建設部と現地協議。
10月13日　雑木伐採の作業を開始する。
10月14日　伐採作業を終了。
10月18日　調査区西側から重機にて表土掘削を開始する。
10月19日　昨日に続き重機にて表土掘削する。地区杭を設定する。
10月20日　道具搬入。ベルトコンベアーを調査区内に設定。基準杭測量。
10月21日　表土掘削を終了。包含層掘削を開始する。溝、土坑などの遺構を検出する。
10月25日　ＳＤ615・616の溝２条を検出する。
10月26日　調査区北部で流路を検出する。
10月28日　流路にトレンチを設定する。
11月２日　流路を掘削する。
11月４日　調査区南部と東部にかけて溝、土坑、ピットなどを多数検出する。
11月８日　柱穴Ｐit12の柱痕を撮影する。
11月９日　ＳＥ627を検出する。上層から陶器椀片が出土する。時期は鎌倉時代か。
11月11日　ＳＥ627の平面図を作成する。写真を撮影をする。
11月16日　ＳＥ627の東半部を掘削する。陶器椀が出土する。
11月17日　調査区の東側部分を表土掘削する。
11月19日　ＳＥ611から鉄分沈着層を検出する。柱穴Ｐit11の柱痕を写真撮影する。南からＰit４の土器を撮影する。
11月22日　ＳＫ632の出土状況図を作成する。
11月24日　ＳＥ611の平面図を作成する。
11月25日　調査区東部の残りを表土除去する。ＳＫ632の土器取り上げ、出土状況図の

補足をする。

11月26日　昨日に続き、ＳＫ632の土器を取り上げ。Ｐit４の出土状況図を作成する。

12月１日　ＳＥ611の断面図を作成する。

12月６日　流路部の畦畔を取り、全体を下げる。Ｐitなどを検出する。

12月７日　ＳＥ611の断ち割りを開始する。灰釉陶器椀が出土する。

12月８日　ＳＥ611から井戸枠と思われる縦板の並びを検出する。

12月９日　ＳＲ630の遺物出土状況の撮影を行い、図面を作成する。

12月10日　ＳＫ632の土層断面図を作成する。

12月11日　ＳＥ627の東半部を掘削する。

12月17日　ＳＥ627の掘形から手捏ね土器と曲物底板が出土する。

12月20日　掘立柱建物ＳＢ621・622の写真撮影を行う。ＳＥ627で曲物底板が出土する。下段の曲物も見つかる。掘立柱建物ＳＢ624の写真撮影を行う。

12月22日　柱列ＳＡ631および、掘立柱建物ＳＢ612・613の写真撮影を行う。

12月24日　遺構実測を実施し、遺構平面図の作成を行う。

12月28日　出土遺物を埋蔵文化財センターに搬出する。

【2001年】

１月５日　ＳＥ611の断ち割りを行う。井戸枠を取り上げ、平面図などを補足する。

１月11日　Ｐit11・12の断ち割りを実施し、断面図を作成する。ＳＥ627の断ち割りを行い、下段の曲物を取り上げる。

１月13日　発掘調査を終了する。

Ｇ地区

【2000年】

11月11日　調査区南側から表土除去を開始する。包含層から石鏃・弥生土器など出土。

11月16日　表土除去を終了。地区杭を設定。

11月22日　調査区北側で道路部分ＳＤ716から続くＳＤ715などの溝２条を検出する。

11月24日　ＳＫ703の平面図を作成する。

11月29日　南壁面の土層断面図を作成する。

12月 2日　西壁面の土層断面図を作成する。

12月 8日　ＳＫ703の底部から土師器杯と曲物側板が出土する。

12月11日　調査区南側から平板測量を行う。

12月14日　ＳＫ703の曲物側板の下からロクロ土師小皿が出土し、図面に補足する。

12月22日　全体写真撮影。

３　調査の方法

ａ　調査区の設定

今回の調査では、小地区を設定して調査を行った。調査区内を４ｍ四方の升目で区切り、西から東にアルファベットのＡ～Ｚを、北から南に数字の１～31を付けた。なお、この小地区の設定は、国土座標軸とは無関係である。

ｂ　掘削について

表土掘削については、重機を使用した。また包含層掘削については基本的に人力によったが、遺物の包含が希薄な部分については重機を使用した。

ｃ　遺構図面について

調査区の遺構平面図は、道路部分および道路部分に沿う南の排水路部分西半については１／20の実測図を作成した。また排水路部分東半および南北方向の排水路部分については平板測量により１／100で作成した。井戸・土坑については個別に１／10または１／20の実測図を作成した。土層断面図は１／20の実測図を作成している。

ｄ　遺跡の名称について

替田遺跡は、中勢バイパス建設にともなって平成８・９年の２か年にわたり第１次および第２次調査として安濃川右岸の堤防際から南側を、Ａ～Ｄ地区に分けて調査が行われている。また平成11年度のかんがい排水路事業にともなう揚水塔建設部分の調査として遺跡内、三泗川沿いに第３次調査が行われている。そのため今回の国道163号国補道路特殊改良事業および県営ほ場整備事業関連にともなう調査を第４次調査とした。

Ⅱ　位置と歴史的環境

1　位置と地形

鈴鹿山脈の錫杖ヶ岳付近に源を発する安濃川は、津市北河路町、南河路付近で、大きく北東から東に向き変え、沖積平野をさらに蛇行しながら島崎町付近で伊勢湾に注ぎ込む。替田遺跡(1)は、その安濃川が大きく屈曲する南河路集落の南西に位置する。

替田遺跡は、第２図の遺跡地形図[①]から安濃川下流域右岸の自然堤防から南側に張り出した標高6.4～6.9mの方形状の微高地に位置していることがよみとれる。この微高地とその周囲との比高差は、復元した等高線によると40cmほどである。また遺跡の規模は、東西360m、南北260mにわたるものである。替田遺跡は、中勢バイパスによる調査によって弥生時代中期の竪穴住居や平安時代の掘立柱建物などが見つかり[②]、今のところ弥生時代以降の集落遺跡と考えられている。

地形については、北を流れる安濃川をはじめ、西を流れる三泗川の河成堆積によって形成されたもの

第１図　遺跡位置図（1：50,000）〔国土地理院１：25,000　津東部・津西部〕

と考えられる。一般的に自然堤防や微高地には、居住域として集落がつくられ、その背後の後背湿地（バックマーシュー）には、生産域としての水田がつくられたと考えられる。

今回の調査区は、南河路集落の南西150mに位置し、行政上は津市南河路字又口にあたる。標高は約6.9mである。

2　歴史的環境

替田遺跡周辺の歴史を、安濃川下流域の沖積地を中心にその概要を述べることにする。

縄文時代には、安濃川左岸の松ノ木遺跡(2)で、晩期の河道と共に同じ時期の竪穴住居が確認されている。[③]また宮ノ前遺跡(3)では中期後半の土坑などが見つかっている。[④]

弥生時代になると、安濃川下流左岸の沖積地に納所遺跡(4)が前期に出現する。伊勢湾西岸への弥生文化の伝播は、一志郡三雲町の中ノ庄遺跡に始まり、安濃川下流域の拠点的集落である納所遺跡に伝播したとされる。[⑤]納所遺跡からは前期の鍬や鋤などの木製農具が多数出土しており、すでに安濃川下流域で農耕文化が定着していたことが知られる。また南の半田丘陵北裾部に位置する上村遺跡(5)では、鉄塔建設にともない弥生土器が出土し、昭和46年の鉄塔移設に際しての調査では、鎌倉時代の壇状遺構などが見つかり、複合遺跡であることが判明した。[⑥]殊に前期の弥生土器が出土して前期新段階に遡る遺跡として著名になった。また同遺跡からは市道の整備にともなう調査で、前期から中期の弥生土器や石器のほかに木製農具の鍬も出土している。[⑦]

中期の集落としては、安濃川左岸の沖積地に立地する蔵田遺跡(6)で、中期前半の掘立柱建物が見つかっている。[⑧]またこの時期の遺跡には、右岸の沖積地で、中勢道路建設に伴って調査された替田遺跡の方形の竪穴住居と共に円形の焼失家屋が確認されている。[⑨]さらにその南の弐ノ坪遺跡(7)からも焼失家屋が確認されている。[⑩]中期後半には、安濃川の沖積地から離れて北の見当山丘陵上に集落が現れる。丘陵上の長遺跡(8)やその関連の遺跡と考えられる山籠遺跡(9)では斜面に計画性をもつ200棟余の大規模な竪穴住居群が見つかっている。長遺跡では、丘陵斜面を階段状に削平し、各段は竪穴住居２～４棟を単位とする住居支群を構成している。[⑪]

後期の遺跡としては、南の半田丘陵で住宅団地の造成や近畿自動車道の建設が行われ、それにともなって調査された柳谷遺跡(10)や大ケ瀬Ｂ遺跡(11)の丘陵上の遺跡や丘陵斜面の平栄遺跡(12)では、後期前半の竪穴住居が見つかり、重複を考えると３棟～４棟を単位として構成される小集団が丘陵上に存在していたと考えられている。[⑫]また近隣には後期の方形台状墓として確認された大ヶ瀬弥生墳墓(13)がある。[⑬]さらに同じ丘陵東部の高松遺跡群(14)では、後期から古墳時代前期にかけて32棟の竪穴住居や方形周溝墓を検出した高松Ｃ遺跡がある。[⑭]その南の丘陵頂部には後期の方形台状墓として高松弥生墳墓が確認されている。[⑮]竪穴住居群は東斜面に階段状に作られ、祭祀的な性格をもつとされる大型住居の周囲に小型住居が取り巻く特徴をもっている。高松Ｃ遺跡の北西に隣接する尺目遺跡(15)では、後期前半の切り合う竪穴住居が確認されている。[⑯]これらのことから半田丘陵での弥生集落の様相が明らかにされつつある。

半田丘陵から北側に延びた支脈にあたる神戸集落南東の木の根地区には、神戸銅鐸出土地(16)がある。この地からは大正６年（1917）に磨き砂の採掘に関連して全面が銹化した流水文鐸が出土している。この神戸銅鐸は、近畿式で外縁鈕２式である。また、野田集落付近からも銅鐸が出土している。この野田銅鐸は江戸時代に出土したとされ、銅鐸は身に斜格文や綾杉文などを施す横帯文がみられる。三河や遠江地方に多い三遠式で突線鈕３式にあたる。

安濃川流域での前期古墳には、片田志袋町に所在する坂本山古墳群(17)がある。古墳群は方墳と円墳で構成される。坂本山６号墳の墳麓から出土した古式土師器から４世紀末～５世紀初め頃とされ、安濃川流域で最古の古墳群とされている。[⑰]

中期の古墳には、中流域の首長墓とされる明合古墳がある。この古墳は南北に造り出しをもった二段築成による一辺約60mの大規模な方墳である。一方、半田丘陵の東端部に所在する池の谷古墳(18)は、全長約80mの前方後円墳で下流域での首長墓とされ、中勢地方で最大級の前方後円墳である。その頂きか

らは伊勢湾を一望できる。

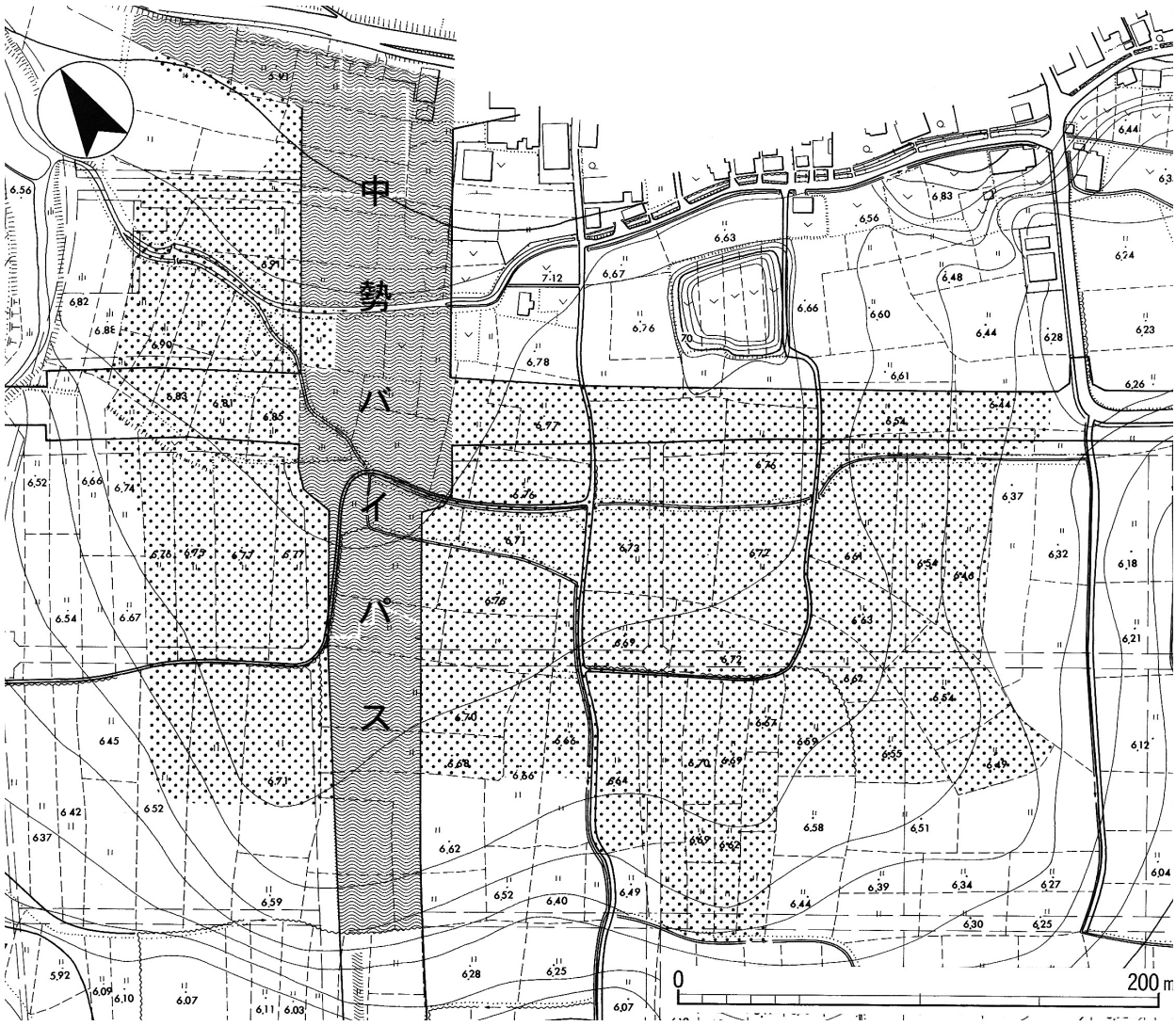
神戸集落南西の半田丘陵には、前方後円墳や群集墳が集まっている。この中で最大の規模をもつ前方後円墳の鎌切１号墳(19)は、全長50mほどで５世紀代の築造とされる。またその南西には全長29mほどの前方後円墳であるおこし古墳(20)がある。古墳からは６世紀前半の須恵器が表採されている。またその南東の丘陵には全長30mほどの前方後円墳である西垣内古墳(21)が存在する。これら前方後円墳の周辺には神戸古墳(22)をはじめ、名塚古墳群(23)、にんごう古墳群(24)などの群集墳が散在する。

集落としては、半田丘陵の新畑遺跡(24)から前期の竪穴住居が見つかり[18]、安濃川流域の沖積地では蔵田遺跡で中期の掘立柱建物が確認されている。

古代には、安濃川地域の大部分は安濃郡に属していた。安濃郡には『和名抄』によると建部・英太・長屋・跡部郷など九郷があったが、南河路や野田集落のあたりは岩田郷に属していたと推定される。

飛鳥から奈良時代の集落には、見当山丘陵南の宮ノ前遺跡で飛鳥時代の掘立柱建物が、沖積地中央の蔵田遺跡で飛鳥時代の掘立柱建物と奈良時代の掘立柱建物や井戸などが確認されている。安濃川右岸の替田遺跡では中勢道路の建設によりＡ～Ｄ地区に分けて２か年の調査が行われ、替田遺跡Ｄ－２区で奈良時代後期の井戸が確認されている[19]。

平安時代になると、安濃郡[20]は天禄４(973)年に円融天皇の寄進により神郡になる。国衙がもつような行政権や警察権などの権限も伊勢神宮の掌握するところとなる。また後期ごろには安濃郡は安東郡と安西郡の二郡に分れる。今の南河路集落付近は安東郡の西辺部にあたる。また10・11世紀には神宮の御園や御厨が拡大するが、『神鳳抄』などによると長岡御



第２図　遺跡地形図（1：3,000）

厨、野田御厨、跡部御厨などの御厨が見られる。

平安時代の集落には、安濃川左岸の自然堤防上に位置する位田遺跡(25)で、緑釉陶器や碁石が出土しており、中央と深い結びつきをもつ後期の富豪層の館跡が見つかっている。[21] また対岸の替田遺跡では、安濃川の河川にもっとも近いD地区で、後期から鎌倉時代初期の総柱建物が15棟見つかっている。[22] またB地区からもこの時代の掘立柱建物や井戸のほか、河道から石帯が出土しており特筆される。[23]

安濃川を少し上流に遡った右岸の安濃町浄土寺南遺跡では、後期の規格性をもった掘立柱建物が見つかっており、緑釉陶器や円面硯などの遺物や井戸の形態から地方官衙的な建物とされている。[24]

安濃川流域ではほ場整備事業が行われるまで、条里の名残りが確認できた。右岸の沖積地にある弐ノ坪遺跡では、条里方向に棟を揃える規格性をもった前期から中期の建物群が見つかっている。その東に位置する神戸遺跡(26)の調査では、時期は不明ながら「坪」を区画する平行する溝が見つかっている。[25] また左岸の蔵田遺跡では、末期から鎌倉時代初頭の１棟から２棟の建物に井戸がともない、条里方向に沿う溝によって区画された屋敷地が散在していることが確認されている。[26]

平安時代の官道は、東海道を関（古厩）で分岐して伊勢・志摩に向う伊勢道が通っていた。この伊勢道には三駅がみられ、その中で市村駅は、津市の殿村付近がその可能性が高いとされている。岩田川右岸の梁瀬遺跡(27)では半田丘陵の北側を通ると考えられる東西方向の道路状遺構が検出されている。[27]

中世では、安濃郡の東に位置する港湾都市である安濃津がある。安濃津は日本三津の一つにあげられ、15世紀末の明応の大地震によって壊滅的な状況となった。近年の調査から安濃津遺跡群(28)は、安濃津の想定地とされ、安濃津柳山遺跡(29)では13世紀中頃の尾張型の陶器椀の出土から、伊勢湾での海運が盛んに行われていたことを物語っている。また遺構は一時期途絶えるものの15世紀後半以降に再び集落の営みが見られ、出土した大半を占める南伊勢系土師器から伊勢神宮領の安濃津御厨との関連性も考えられる。[28]

岩田川左岸の里前遺跡(30)では、鎌倉時代中葉から後葉の多量の陶器椀が出土し、その中で尾張型が多数を占め安濃津との関連性も考えられる。[29] また墨書された陶器椀が多種類におよぶのが特徴であり、このことから岩田川を遡上して内陸への荷揚地としての可能性も考えられている。

中世の文献には、元徳元（1329)年の「安東郡専当沙汰文」がある。[30] この文献は、安東郡内の常供田の場所と納税の責任者である丁部の所在地と名前が記されている。常供田とは神宮領の一つで神郡内から優れた良田を選び、神宮での祭祀の経費にあてる籾や餅などを納税するもので、その耕作は丁部が行い、管理は神宮から派遣された安東郡の専当があたった。常供田の分布については、[31] 津市西方の納所、刑部、中跡部、渋見付近とされ、安濃川下流域の沖積地一帯に分布していたものと考えられる。

また前述した文献の中で、安濃津から伊勢神宮への運搬について次の記載がある。

一　（前略）　丁部等面々馬一疋。口付一人宛出之。御籾俵餅俵等。津湊度々員下之間。湊漕丁部請取之。御船奉積之。

この文から、常供田からの籾や餅などの税は津市西方の農村地帯から、一度、納所町の神宮寺に集荷され、そこから丁部によって丁部一人毎に馬一疋を出して、馬荷により安濃津の港に運ばれた。安濃津からは港の漕丁部により船積みされて伊勢神宮へ運搬されたことがわかる。

また、この文献には「丁部河路宮内」や「丁部河路石若四郎」の丁部の名が見え、「河路」とは現在の北河路または南河路の地名との関連性も考えられるが、詳細は不明である。

江戸時代には、南河路は慶長13（1603）年に津藩領となる。藤堂高虎が津城主になった際に、津城下を洪水から守るために安濃川右岸の南河路、一色、殿村の字界にある堤防を改修し、三泗川からの溢水を南の岩田川に流れるようにしたと言う。現在も堤防は一段低くなっており、地元の人々はこの付近をさんしと呼んでいる。三泗とは安濃川とその支流の穴倉川、南の岩田川を指すのであろう。（宮田勝功）

試掘坑 No.	遺物包含層上面の深さ	遺構上面の深さ	遺　　構	遺　　構	備　考
1	― cm	― cm	―	―	―
2	―	―	―	―	―
3	３５	４５	土坑・ピット	須恵器、土師器壺 陶器椀	
4	―	―	―	―	―
5	―	―	―	―	―

第１表　試掘結果一覧表

第３図　調査区位置図（1：2,000）

［註］

① 遺跡範囲は、平成10年度および平成11年度の県営ほ場整備事業の試掘調査による。地形図の作成にあたっては、津市教育委員会の米山弘之氏の御協力を得た。

② 池端清行、水橋公恵ほか「替田遺跡」『一般国道23号中勢道路埋蔵文化財発掘調査概報Ⅸ・Ⅹ』三重県埋蔵文化財センター 1997･1998年

③ 竹内英昭「松ノ木遺跡」『松ノ木遺跡・森山東遺跡・太田遺跡』三重県埋蔵文化財センター 1993年

④ 倉田直純ほか「宮ノ前遺跡」『大古曽遺跡・山籠遺跡・宮ノ前遺跡』三重県埋蔵文化財センター 1995年

⑤ 伊藤久嗣ほか『納所遺跡ー遺構と遺物ー』三重県教育委員会 1980年

⑥ 吉村利男『上村遺跡発掘調査報告』津市教育委員会 1972年

⑦ 津市教育委員会の御教示による。

⑧ 米山弘之・宮田勝功 『蔵田遺跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター 1999年

⑨ 前掲註②

⑩ 池端清行ほか「弐ノ坪遺跡」『一般国道23号中勢道路埋蔵文化財発掘調査概報Ⅹ』三重県埋蔵文化財センター 1998年

⑪ 池端清行『長遺跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター 2000年
　萱室康光『長遺跡発掘調査報告』津市教育委員会　1987年

⑫ ａ浅生悦生『野田遺跡群発掘調査報告』津市教育委員会 1974年
　ｂ伊藤久嗣「平栄遺跡」『近畿自動車道埋蔵文化財調査報告Ⅰ』三重県教育委員会 1973年

⑬ 伊藤久嗣「大ヶ瀬遺跡」前掲註⑪ａ

⑭ ａ萱室康光ほか「高松Ｃ遺跡発掘調査報告」『津市埋蔵文化財センター年報３』1999年
　ｂ長谷川博「高松Ｃ遺跡発掘調査中間報告」『津市民文化』３ 1976年
　ｃ三重大学古代歴史支部会「津市高松弥生遺跡について」『古代学研究』第37号 1964年

⑮ 谷本鋭次『高松弥生墳墓発掘調査報告』津市教育員会 1970年

⑯ 萱室康光『尺目遺跡発掘調査報告』津市教育委員会 1975年

⑰ 小玉道明『坂本山古墳群・坂本山中世墓群』津市教育委員会 1970年

⑱ 吉村利男『新畑遺跡発掘調査報告』津市教育委員会　1973年

⑲ 西村美幸ほか「替田遺跡（第２次）Ｄ－２地区」前掲註⑧

⑳ 安濃郡は、以後、古代の安濃郡を指すものとする。安濃郡の名は、古代、近世、明治から昭和31年まで称されていた。安濃郡は平安時代後期頃に安東・安西両郡に分立し、中世には両郡の名が見られ、近世になって幕藩体制により改変にされ、再び安濃郡になった。

㉑米山弘之『位田遺跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター 1993年

㉒水橋公恵「替田遺跡（第１次）Ｄ地区」前掲註⑧

㉓前掲註⑨

㉔中村信裕「浄土寺南遺跡」『昭和55年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』三重県教育委員会 1981年

㉕中川　明『神戸遺跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター 1999年

㉖前掲註⑧

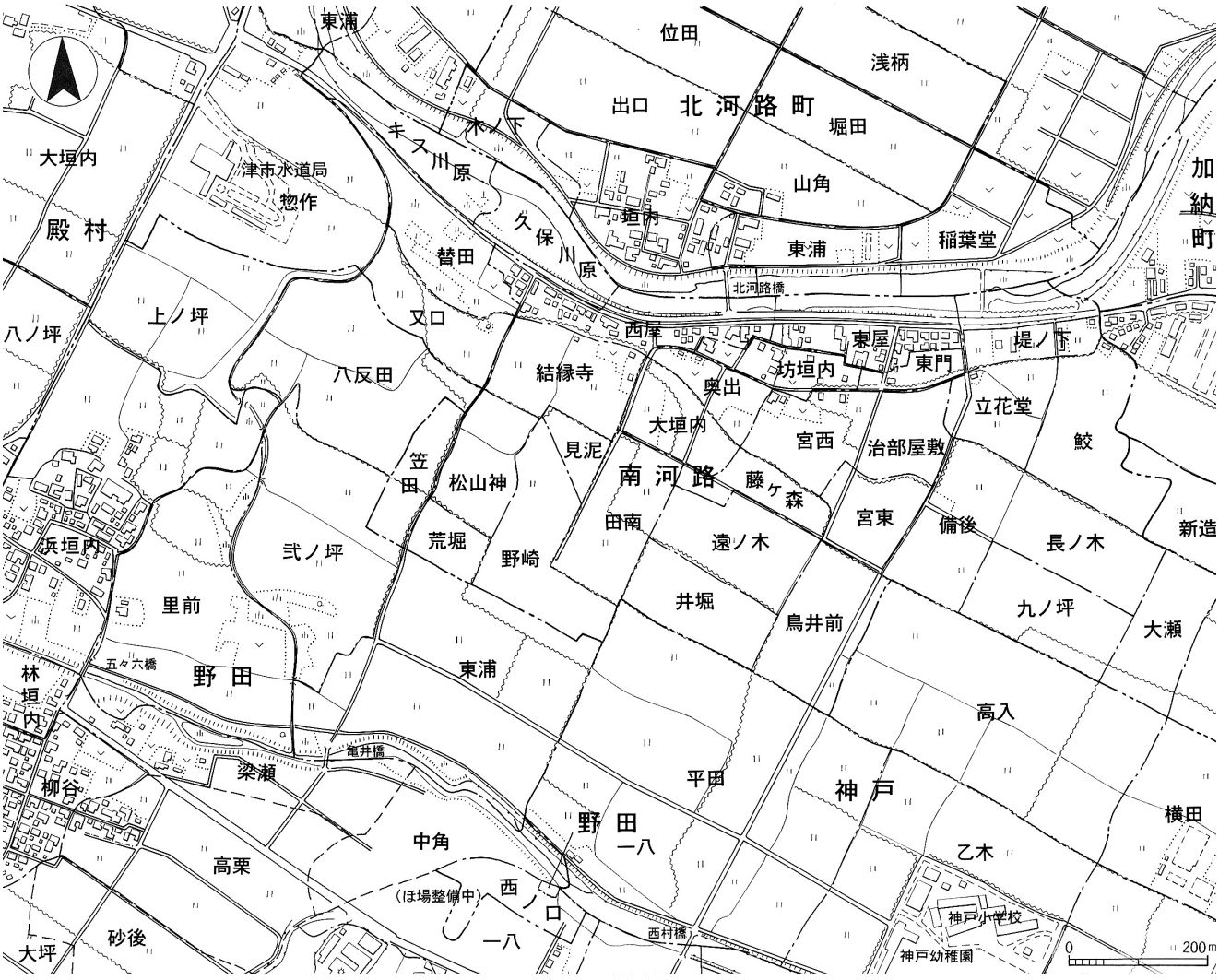
㉗村木一弥・宮田勝功「梁瀬遺跡」『一般国道23号中勢道路埋蔵文化財発掘調査概報ＸⅠ』三重県埋蔵文化財センター 1997年

㉘伊藤裕偉「Ⅶ. 総括」『安濃津』三重県埋蔵文化財センター 1999年

㉙山口格・西村美幸「里前遺跡」前掲註

㉚『群書類聚』巻五百一　雑部五十六

㉛小坂宣弘「安濃郡雑考」『ふびと』第40号 1983年



第４図　遺跡付近字切図（1：10,000）

Ⅲ　替田遺跡（Ｆ地区）の成果

１　層序

調査地の現状は、荒地および水田である。また南側には空地となっている高まりが見られた。遺物包含層は調査区西側には見られたが、東側の水田にはなく耕作土および床土の下がほぼ検出面であった。最も厚く包含層が見られたのは南側の高まりであった。包含層は第３層の褐色系および第４層の灰色系の砂質土で、飛鳥～平安時代を中心に弥生時代から鎌倉時代の遺物を含んでいた。

基本的な遺構検出面となるのは、第５層の灰色砂質土（鉄分を含む）の上面である。この層は調査区南部と東部に見られたが、調査区の北西部（ＳＲ601より北側）では、灰色砂質土（鉄分を含む）と同じレベルで褐色系の砂質土を検出した。褐色系土を掘削すると、その下は灰黄色砂であった。またトレンチを設定し、基本検出面となる灰色系が下にもぐり込んでいることがわかった（第５図）。そのため流路ＳＲ601より北は、旧河道または氾濫による堆積と考えられた。遺構は褐色系土上面で検出できると考えられたが、遺構埋土が同色系であるため検出が困難であった。これらの検出面で弥生時代中期以降の遺構を検出した。

基本的層序は、上から順に次のとおりである。

第１層：オリーブ灰色砂質土（耕作土）
第２層：橙色砂質土（床土）
第３層：褐色砂質土
第４層：灰色砂質土
第５層：灰色砂質土（鉄分を含む）

２　遺構

今回の調査で確認された遺構は、弥生時代の流路・土坑・溝、飛鳥～奈良時代の掘立柱建物・土坑・溝、平安時代の掘立柱建物・柱列・井戸・土坑・溝、鎌倉時代以降の土坑・溝などである。また調査区の南側はＧ地区と隣合わせのため、遺構が分かれるＳＥ627については、本稿で扱った。以下に主な遺構について述べる。

(1)　弥生時代の遺構

Ａ　流路

ＳＲ601（第５図）　ｅ３から14グリッドで検出した東西方向の流路である。幅は最大で約5.9m、検出面からの深さ約80cmである。流路に入れたトレンチ断面からＳＤ608が流路の第12層にあたることがわかり、ＳＤ608から出土した弥生時代中期の蓋(4)や甕などはＳＲ601のものと考えられ、流路は中期に形成されたものである。

ＳＲ630（第13図）　ｏ７・ｏ８グリッドで検出した流路である。長さ約2.0m、幅約2.0m、北西から南に弓なりに湾曲する。検出面からの深１～12cmで、南西側が浅く、湾曲する北東側にむかって次第に深く掘り込んでいる。その掘り込んだところに約50cm×約25cmの範囲に炭化物が集中していた。埋土は炭化物を含くむ灰色細砂である。流路からは、体部の上半部と下半部とが半壊した状態で出土した受口状口縁の細頸壺(1)や底部を中心にして散乱するように出土した大型の壺(2)がある。このほかに口縁部に刻み目をもつ甕などがある。これらの遺物から時期は、弥生時代中期である。

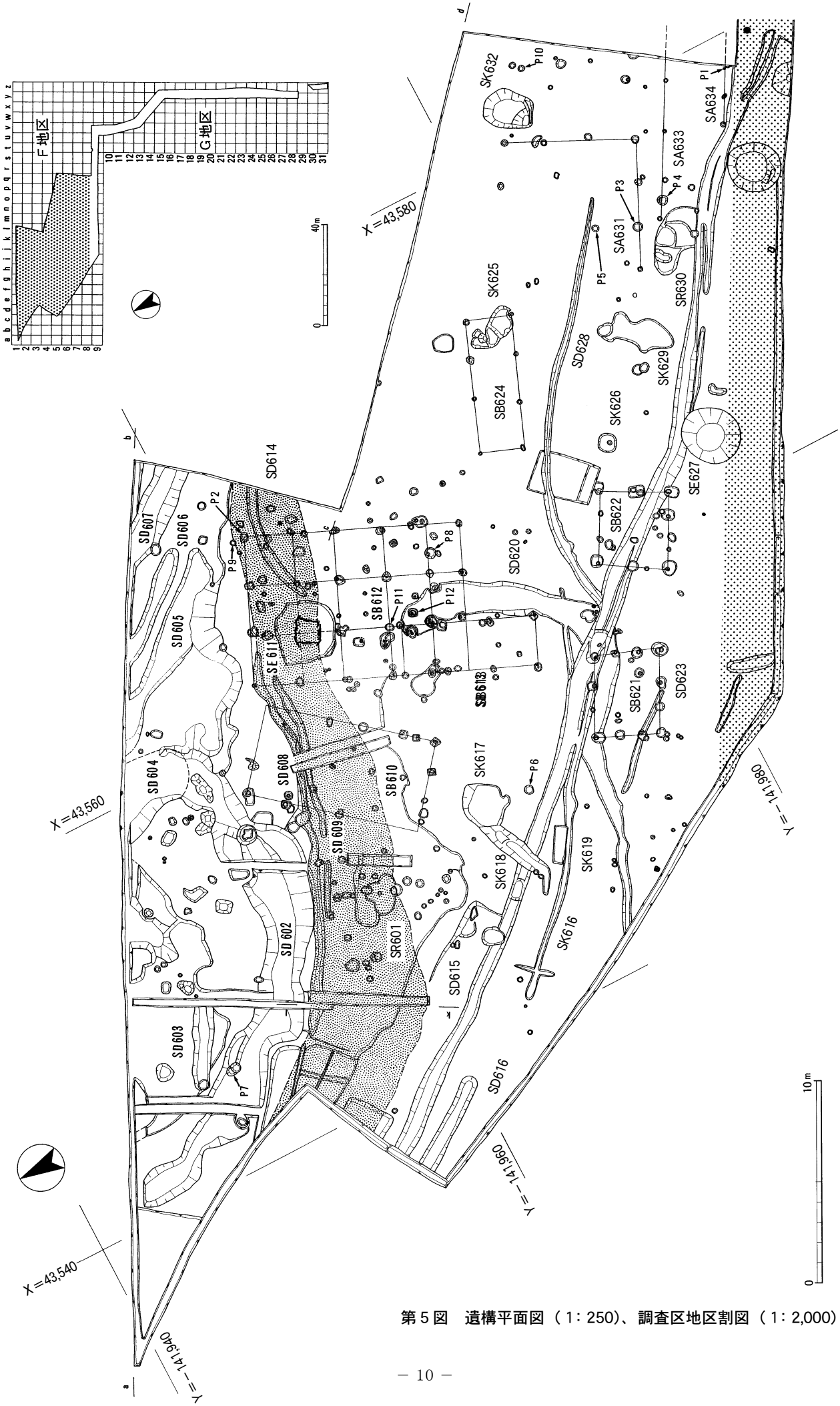
Ｂ　土坑

ＳＫ618　ｇ６からｈ５グリッドで検出した土坑である。長さ約3.8m、幅約0.9mで、南端部は西にまがる。検出面からの深さ約50cmで、埋土は紫黒色粘質土である。出土遺物には細片であるが後期の高杯(3)がある。

ＳＫ626　ｌ７・ｍ７グリッドで検出した一辺約90cmの隅が丸い方形状を呈する土坑である。検出面からの深さは約８cmと浅い。出土遺物には中期の弥生土器壺やサヌカイト片がある。これらの遺物から時期は弥生時代中期と考える。

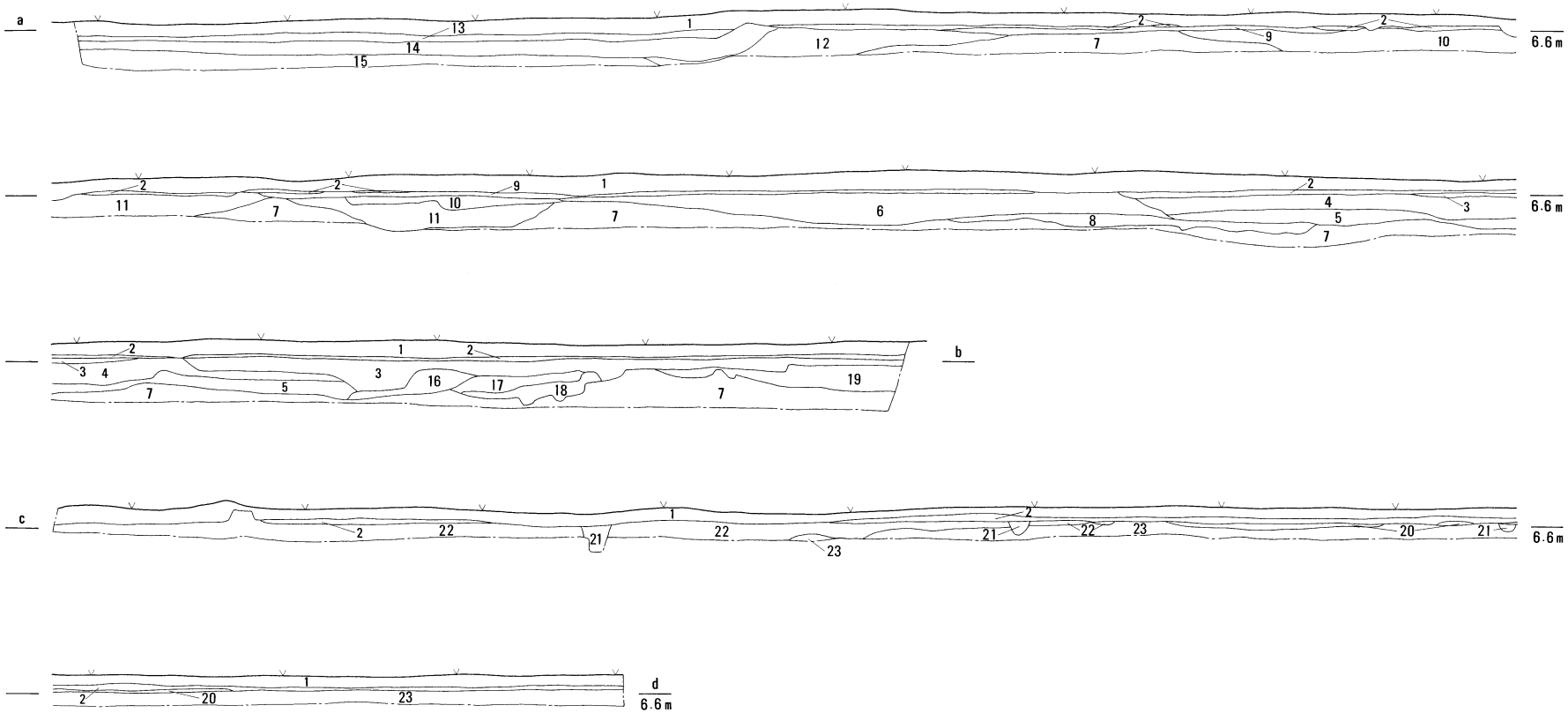
Ｃ　溝

ＳＤ608　ｅ３からｊ３グリッドで検出した東西溝である。幅約24～50cmで、検出面からの深さは６～49cmである。検出時に弥生土器が出土しており、前述したようにトレンチ土層断面から流路ＳＲ601の溝であると考えられる。出土遺物には弥生時代中期の壺蓋(4)や甕片などがある。

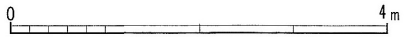


第５図　遺構平面図（1：250）、調査区地区割図（1：2,000）

第６図　調査区北壁土層図（1：80）



1　10 Y 5／2　オリーブ灰色砂質土（やや粘性あり、細砂）〔耕作土〕
2　10 Y 6／1　灰色シルト細砂（鉄分のためか橙色に変色し堅くしまる）〔床土〕
3　7.5YR4／3　褐色砂質土（僅かに粘性あり、細砂）
4　5　Y 6／1　灰色砂質土（極細砂、マンガン含む）
5　10 YR4／2　灰黄褐色砂（粗砂まじり中粒砂）〔ＳＤ604埋土〕
6　7.5YR4／2　褐色砂質土（細砂）〔ＳＤ605埋土〕
7　2.5Y 6／2　灰黄色砂（中粒砂まじり細砂）〔遺構検出層〕
8　5　Y 6／2　灰オリーブ色砂質土（極細砂）
9　5　Y 6／2　灰オリーブ色砂質土（土師器片含む）
10　2.5Y 6／3　にぶい黄色砂質土（極細砂、マンガン多く含む）〔旧床土〕
11　10 YR4／3　にぶい黄褐色砂質土（僅かに粘性あり、土師器片含む）〔ＳＤ603埋土〕
12　10 YR5／4　にぶい黄褐色砂（粗砂まじり細砂）〔ＳＤ602埋土〕
13　10 YR6／2　オリーブ灰色砂質シルト（細砂）
14　5　Y 6／2　灰オリーブ色砂質土（粘性あり、堅く締まる、細砂、マンガン多く含む）
15　10 Y 6／1　灰色砂質土（粘性あり、極細砂）
16　7.5YR4／3　褐色砂質土（粘性あり、細砂、土師器片含む）〔ＳＤ606埋土〕
17　10 YR4／2　灰黄褐色砂質土（粘性あり、中粒砂まじり細砂、土師器片含む）〔ＳＤ607埋土〕
18　2.5Y 4／2　暗灰黄色砂質シルト（細砂）
19　7.5Y 4／1　灰色砂質シルト（細砂）〔流路堆積？〕
20　2.5Y 7／3　浅黄色砂質シルト（細砂）
21　10 YR4／3　にぶい黄褐色砂質シルト（細砂）〔遺構埋土〕
22　5　Y 7／1　灰白色シルト（細砂、鉄分含む）〔遺構検出層〕
23　2.5Y 6／3　にぶい黄色砂質シルト（細砂）〔　〃　〕



ＳＤ609　　ｇ３からｊ３グリッドで検出した東西溝である。幅約30cmで、検出面からの深さは4～33cmである。出土遺物はないがＳＲ601内の溝である。

ＳＤ620　　ｊ４からｇ７グリッドで検出した南北溝である。幅約0.4～1.9mで、検出面からの深さは3～10cmで浅く、北に向かうほど幅が広くなる。埋土はＳＫ618と同じ紫黒色粘質土で、出土遺物には、細片であるが壺体部片(5)や甕底部(6)などの弥生土器がある。時期は弥生時代中期である。

Ｄ　小穴

Ｐit４（第15図）　ｐ７グリッドで検出した径約40cm、深さ約34cmの小穴である。小穴からは中期の弥生土器壺の体部片(52)がその内面を上にむけて出土した。

(2)　飛鳥から平安時代の遺構

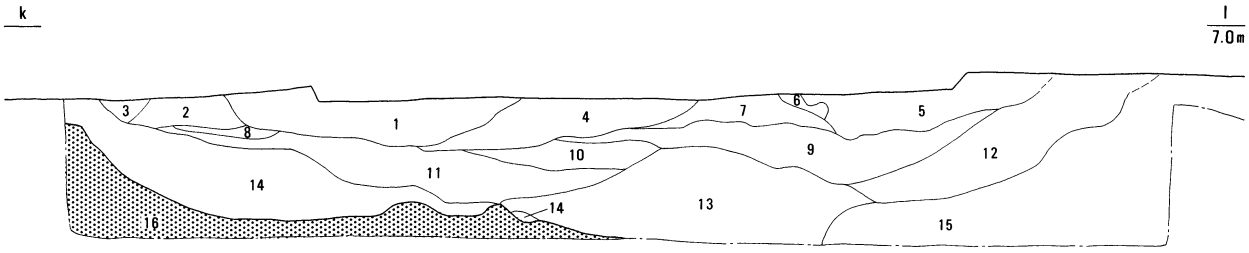
Ａ　掘立柱建物

ＳＢ612（第９図）　ｊ３から１５グリッドで検出した南面廂が付く総柱建物である。５間（桁行10.65m）×３間（梁行7.35m）の南北棟で、棟方向はＮ23°Ｅである。柱掘形は径約20～50cmの円形または方形で、柱穴には径16～20cmの柱痕跡をもつものもある。柱穴の深さは、検出面から７～26cmである。またＰit11（第16図）の柱穴で柱痕(164)を検出した。柱穴Ｐit２からは土師器小皿(10)をはじめ、黒色土器椀(11)、灰釉陶器椀(12)、白磁皿(13)のほか、ロクロ土師器皿や畿内からの搬入品と思われる「て」の字状口縁皿などがまとまって出土している。出土遺物から平安時代後期である。

ＳＢ613（第８図）　ｊ４からｊ６グリッドで検出したＳＢ612と重複する側柱建物である。３間（6.3m）×１間（2.4m）の南北棟である。棟方向はＮ23°Ｅを示す。柱掘形は径約25～45cmの方形または円形で、柱穴の深さは検出面から11～32cmである。柱穴からは土師器や須恵器の細片しか出土していないが、柱掘形や棟方向からこの時期とした。

ＳＢ621（第８図）　ｉ８からｊ７グリッドで検出した側柱建物である。３間（北桁行4.05m、南桁行4.20m）×３間（梁行3.15m）の東西棟である。棟方向はＥ28.5°～33°Ｓである。桁行は北側と南側で一致せず、梁行と桁行の柱筋とは直交しない。柱掘形は径約20～70cmの隅丸方形または楕円形で、柱穴には径16～20cmの柱痕跡をもつものもある。柱穴の深さは検出面から７～64cmである。柱穴からの出土遺物は細片のみであるが、ＳＢ621の北側の桁行柱穴は、飛鳥時代以降の溝ＳＤ615・616によって切られていた。このことからＳＤ615・616より古い建物と考えられ、飛鳥時代と想定される。

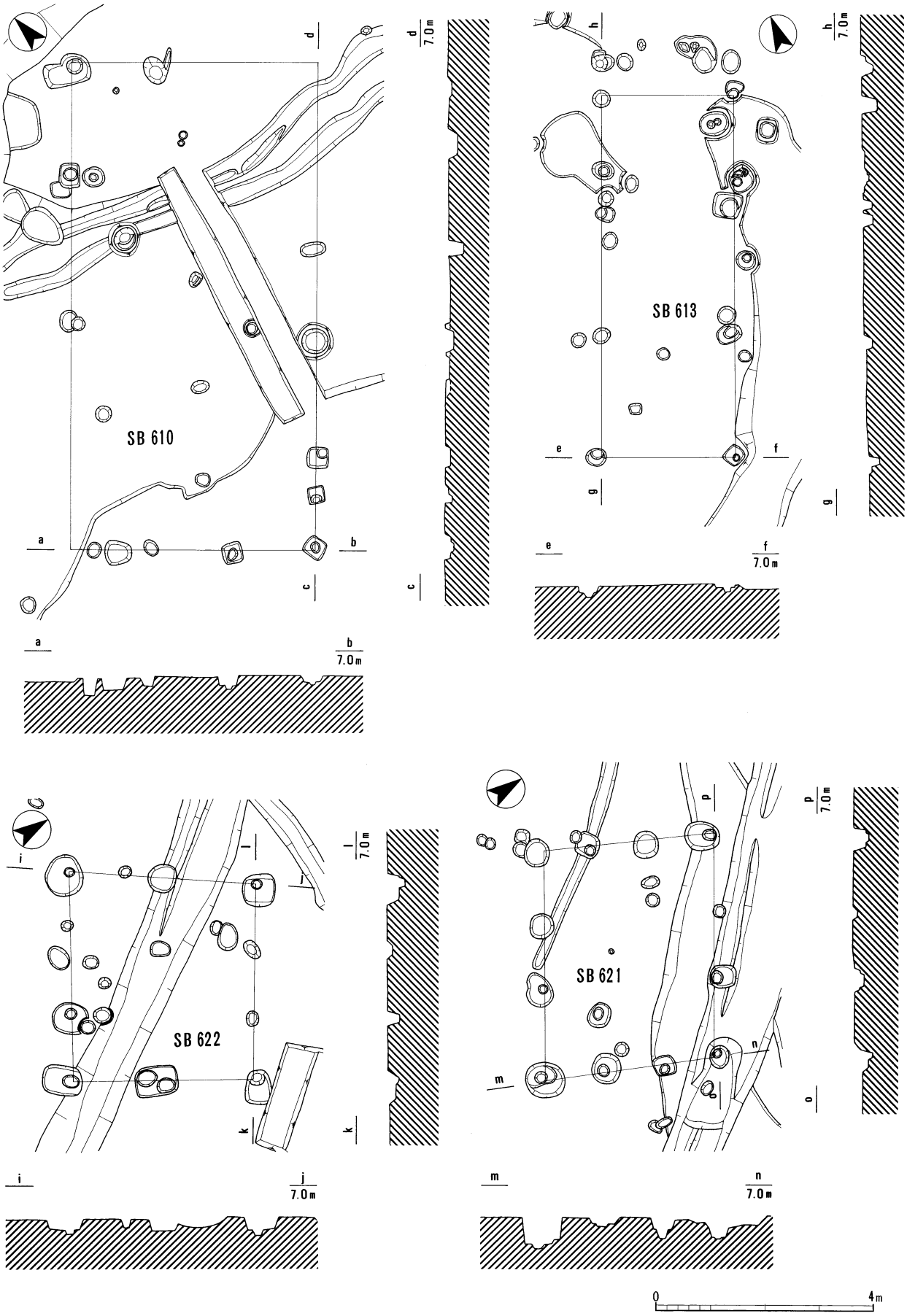
ＳＢ622（第８図）　ｋ７から１８グリッドで検出したＳＢ621の東隣りに位置する側柱建物である。３間（北桁行3.6m、南桁行3.9m）×２間（東桁行3.3m、西桁行3.4m）の東西棟である。梁間および桁間は不揃いである。棟方向はＥ28.5°Ｓである。柱掘形は径約50～75cmの隅丸長方形または楕円形で、柱穴には径18～30cmの柱痕跡をもつものもある。柱穴の深さは検出面から10～32cmである。柱穴からの出土遺物は細片のみである。柱穴の埋土はＳＢ621と同じ黒色粘質土の埋土で、ＳＢ622の東と西



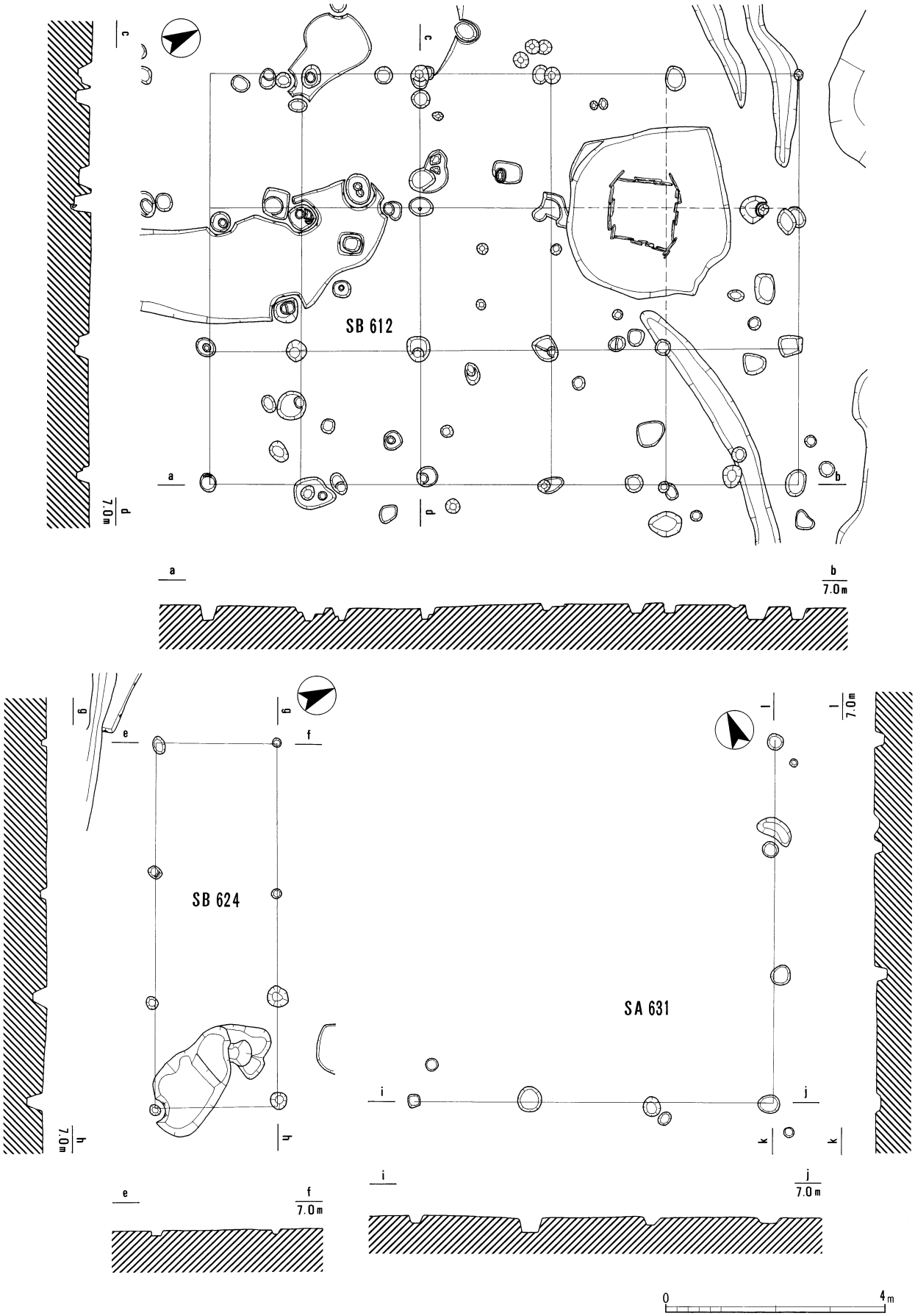
1	10 YR4／1	褐灰色砂質土（小礫含む）	9	10 YR7／1	灰白色砂質土
2	10 YR4／1	褐灰色土（小礫含む）	10	7.5YR7／1	明褐灰色砂質土
3	10 YR6／1	褐灰色土（良く締まる）	11	7.5YR6／2	灰黄褐色砂質土
4	10 YR5／1	褐灰色粗砂（やや堅い）	12	10 YR6／1	褐灰色砂質土
5	10 YR7／2	明白黄色砂質土	13	10 YR6／1	褐灰色粗砂
6	10 YR4／2	灰黄褐色土（堅い）	14	7.5Y 5／1	灰色粘土
7	10 YR7／1	灰白色細砂（安定している）	15	10 YR4／1	褐灰色粘土
8	10 YR6／1	褐灰色砂質土	16	7.5Y 4／1	灰色細砂（鉄分を含む）

0　2m

第７図　ＳＲ601トレンチ土層図（1：40）



第８図　ＳＢ610・613・621・622平面図・断面図（1：100）



第９図　ＳＢ612・624、ＳＡ631平面図・断面図（1：100）

の梁行の柱穴は、ＳＤ615・616よって切られていた。このことからＳＢ621と同時期と考える。

B　柱列

ＳＡ631（第９図）　ｐ５からｐ７・ｏ７グリッドで検出したＬ字状の柱列である。南北３間（6.6m）、東西３間（6.6m）である。方位はＮ25°Ｅを示す。柱掘形は径約20～30cmの円形で、柱穴の深さは検出面から10～28cmである。柱穴Ｐit３から出土した土師器皿（14）から平安時代後期である。

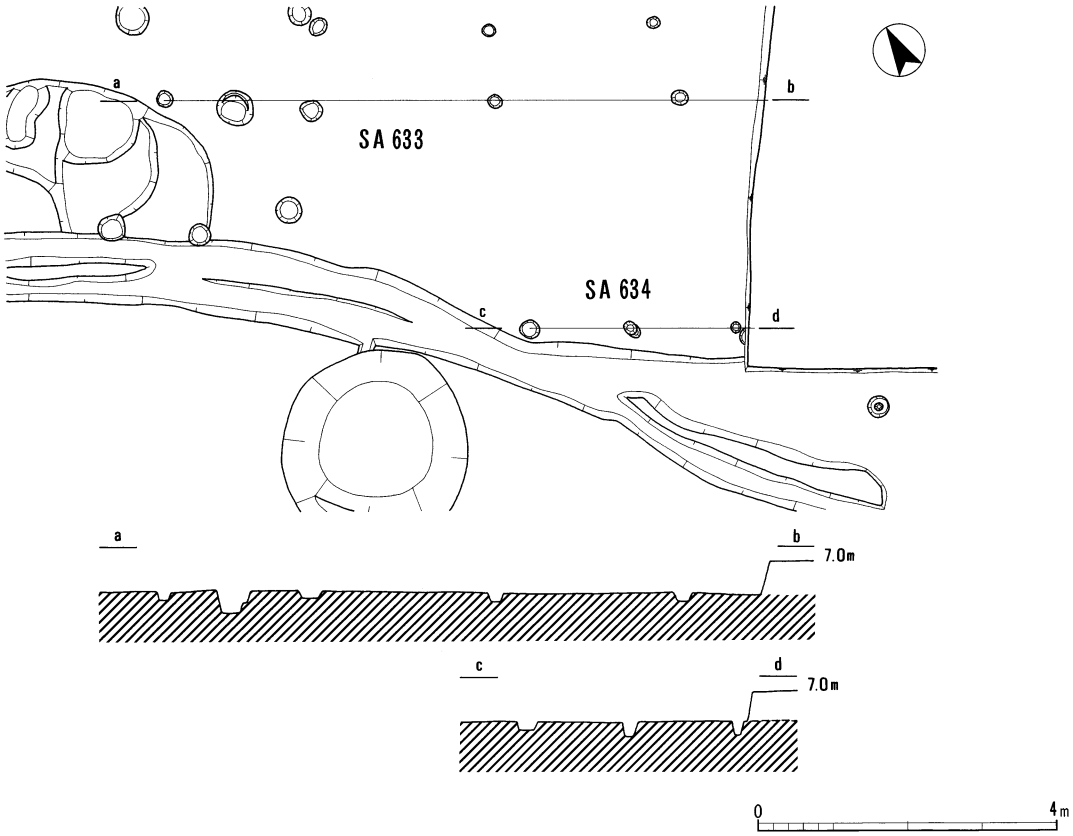
ＳＡ633（第10図）　ｏ７からｑ７グリッドにかけて検出した東西方向の柱列である。柱間は３間以上（6.45m）で、柱列の東側は調査区外になり、未掘り部分である。方位はＥ30°Ｓを示す。柱掘形は径約20cmの円形でほぼ揃っている。柱穴の深さは検出面から７～11cmである。埋土は灰色砂質土である。柱穴からの遺物はなく時期決定は困難であるが、ＳＡ634に平行しており、同じ時期と考えられる。

ＳＡ634（第10図）　ｑ８グリッドで検出した北のＳＡ633に平行する東西方向の柱列である。柱間は２間以上（2.7m）で、柱列の東側は調査区外になり、未掘り部分である。方位はＥ30°Ｓを示す。東側は調査区外である。柱掘形は径約10～20cmの円形で、柱穴の深さは検出面から約10～30cmである。埋土は灰色砂質土である。柱穴Ｐit１から須恵器杯身(7)が出土している。飛鳥時代前半である。

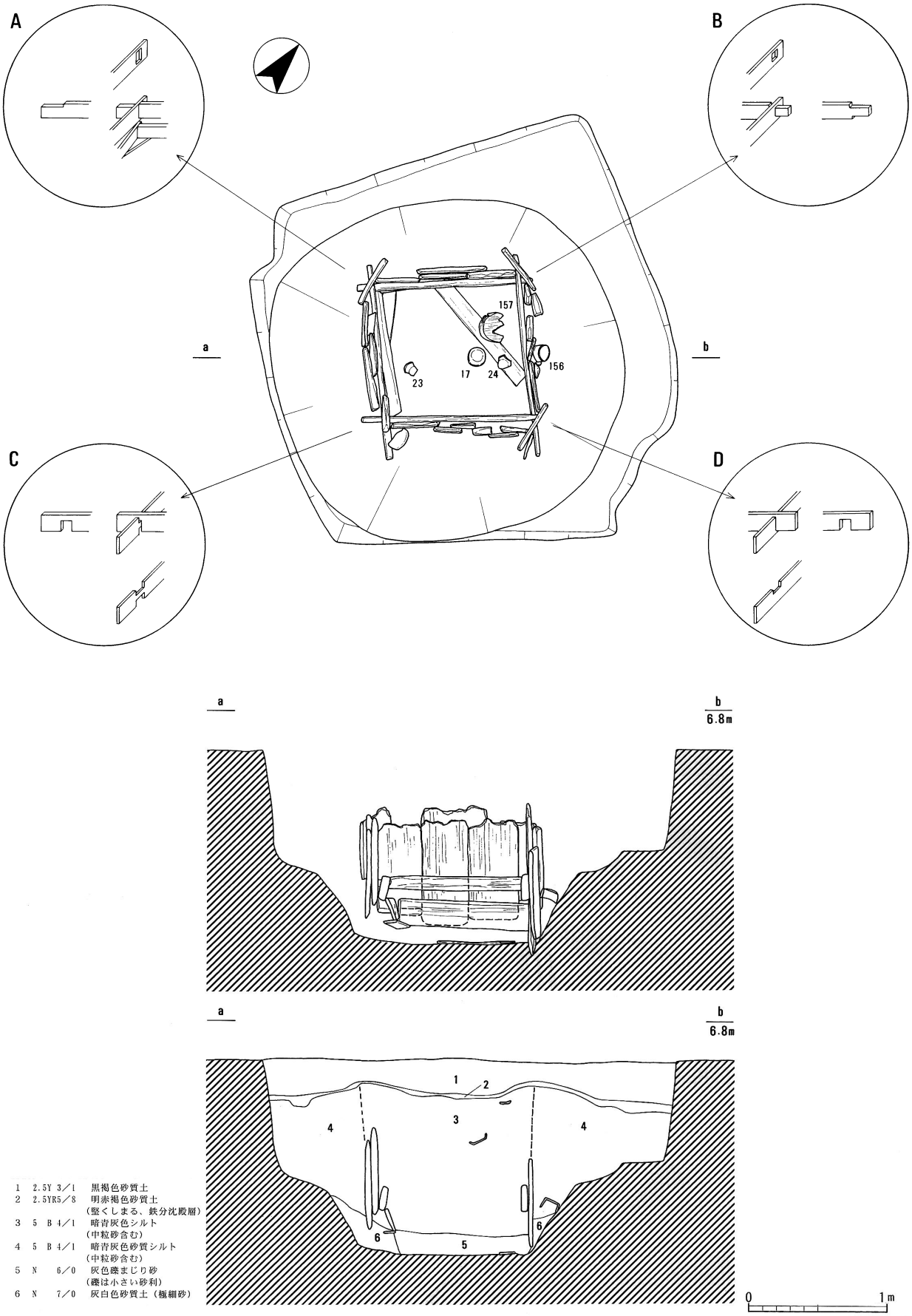
なお、ＳＡ633とＳＡ634は柱列としたが、この２つの遺構の間は、幅約3.0mで平行している。

C　井戸

ＳＥ611（第11図）　ｊ３グリッドで検出した井戸である。平面形は四角い一辺約2.6～2.9mの方形状を呈している。その中に径約2.5～2.6mの円形の掘形を穿ち、その底に木組みの井戸枠を据えていた。湧水層は検出面からの深さ約1.4mで、灰色礫混じりの砂層である。井戸枠は縦板、隅板と二段の横板で組まれており、井戸枠の底には砂利や円礫が見られた。井戸埋土の灰褐色砂質土には、多量の土器細片を含んでおり、この埋土を除去すると、検出面からの深さ約16～28cmほどで暗赤褐色砂質土の中央部がやや窪む円錐状の高まりを検出した。この層は厚さ２～４cmほどで硬くしまっていた。当初は焼土かと思われたが、周辺の壁やこの埋土中にも炭化物が見られず鉄分が沈殿した層である。またこの内部



第10図　ＳＡ633・634平面図・断面図（1：100）



1　2.5Y 3／1　黒褐色砂質土
2　2.5YR5／8　明赤褐色砂質土
（堅くしまる、鉄分沈殿層）
3　5　B 4／1　暗青灰色シルト
（中粒砂含む）
4　5　B 4／1　暗青灰色砂質シルト
（中粒砂含む）
5　N　6／0　灰色礫まじり砂
（礫は小さい砂利）
6　N　7／0　灰白色砂質土（極細砂）

第11図　ＳＥ611平面図・断面図・土層図（1：40）

は暗青灰色系シルトであった。

井戸枠の作り方は、まず上段の横板を組み合わせる。西側横板の両木口につくった出枘に南北の横板の西木口につくった角枘を組み合わせる（第11図Ａ・Ｂ）。その後、東側横板の両端の切り込みに南北の横板の東木口に入れた切り込みを組み合わせる（同図Ｃ・Ｄ）。横板を組んだ後に幅約15～50cmの縦板をその尖った部分をすべて内側にして打ち込む。次に下段の横板を組む。下段は枘や切り込みをつくらず切断したままのものを組んでいる。北側の横板は井戸枠内にはずれた状態で出土した。また南西隅の横板の下には下板が充てがわれていた。横板を組んだ後、最後に四隅の横板の上に隅板を据える。四隅から土が流れ込まないためと考えられる。

出土遺物には、井戸枠内部から底部外面に墨書をもつ土師器杯(20)、灰釉陶器椀(23)や曲物(181)などが出土した。また井戸掘形からは曲物底板(156)や底部を上にした状態で曲物(157)が出土した。この他に緑釉陶器片も出土している。井戸の時期は平安時代前期と考えられる。

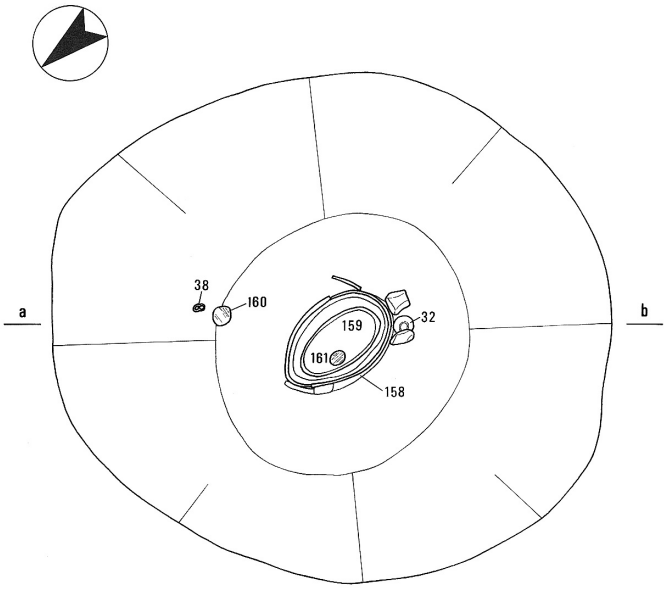
ＳＥ627（第12図）　１８からｍ８グリッドで検出した径約2.7～3.0mで、南北にやや長い楕円形を呈する素掘りの井戸である。検出面からの深さ約1.6mである。埋土はにぶい黄橙色系の層を挟んで、灰褐色系と青灰色系の上下２層に分けた。井戸中央には井筒として使用された曲物が上下２段に組まれていた。共に曲物は歪んで楕円形を呈していた。

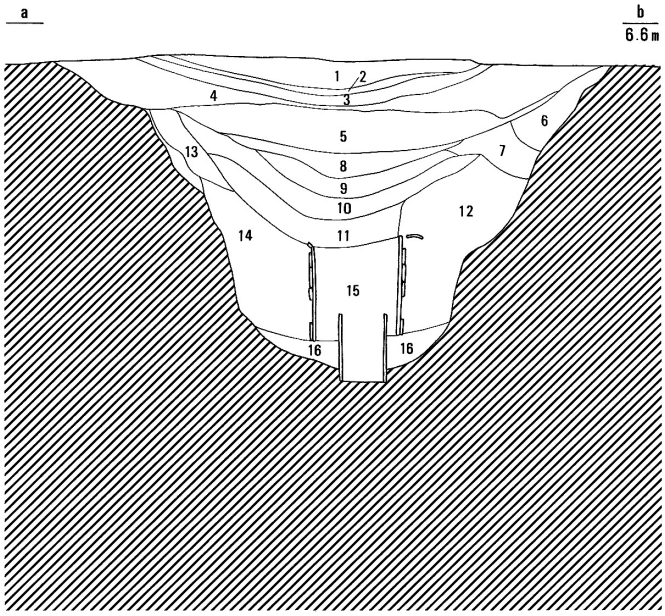
出土遺物は、ほとんどが細片であるが、埋土下層から「て」の字状口縁皿や北東壁面に張りつくように曲物底板(160)などが出土し、井戸掘形から土師器杯やロクロ土師器の台付小皿(32)、井戸枠内からは陶器椀（以後、いわゆる山茶椀のことをこのように表記する）や土師器甕などの細片をはじめ、手捏ね土器(38)や曲物底板(161)などが出土した。

土層断面から遺構面に似る黄橙色系の層が見られ、一度整地されたものと考えられる。井戸の時期は平安時代後期とされる。

Ｄ　土坑

ＳＫ619　　ｇ６・ｈ６グリッドで検出した長方形を呈する土坑である。長さ約1.9m、幅約53～65cm、検出面からの深さ13～19cmのＳＤ16に平行するよ

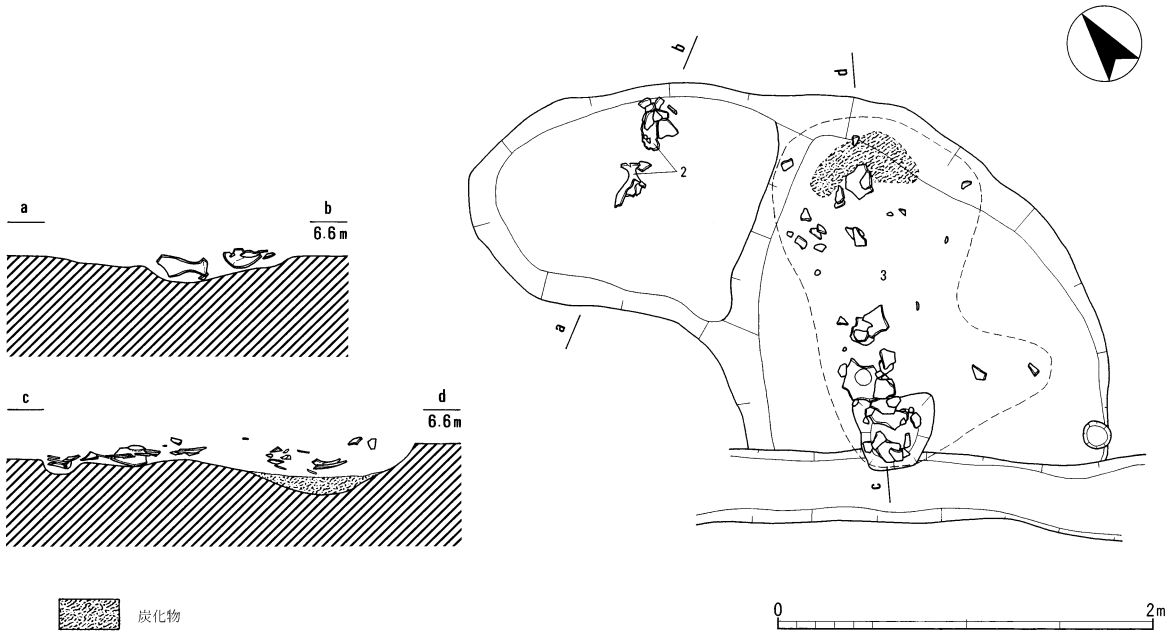




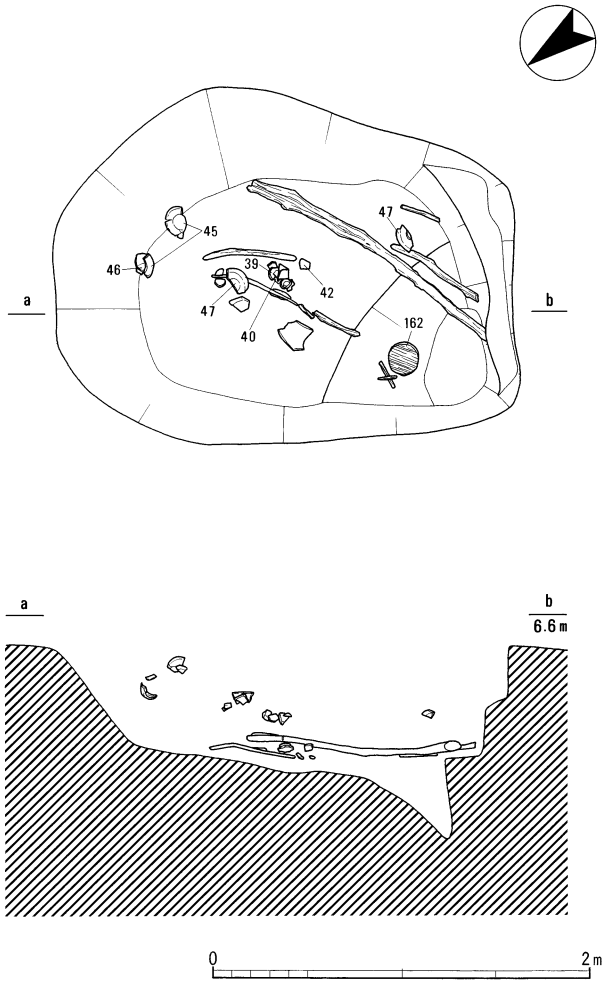
1　7.5YR4／2　灰褐色砂質シルト（マンガン含む）
2　10 YR6／1　褐灰色粘質シルト
3　10 YR7／2　にぶい黄橙色粘質土（鉄分含む）
4　10 YR5／1　褐灰色粘質土（マンガンを含む）
5　10 Y 6／1　灰色粘土（粘性が強い、鉄分含む）
6　10 YR4／1　褐灰色粘質土（マンガン・鉄分・土師器片含む）
7　10 Y 4／1　灰色粘土（細砂・鉄分含む）
8　7.5Y 4／1　灰色粘土（鉄分含む）
9　7.5Y 5／2　灰オリーブ色粘土（植物腐食、鉄分含む）
10　N　3／　暗灰色粘土（細砂含む）
11　5　B 4／1　暗青灰色粘土（やや粘性が強い、植物腐食）
12　5　B 5／1　青灰色粘質シルト（細砂多い）
13　5　B 6／1　青灰色粘質シルト（細砂多い）
14　5　B 4／1　暗青灰色粘質シルト（細砂含む）
15　5　B 4／1　暗青灰色粘質土
16　5　B 4／1　暗青灰色粘質シルト（少し細砂含む）

0　2m

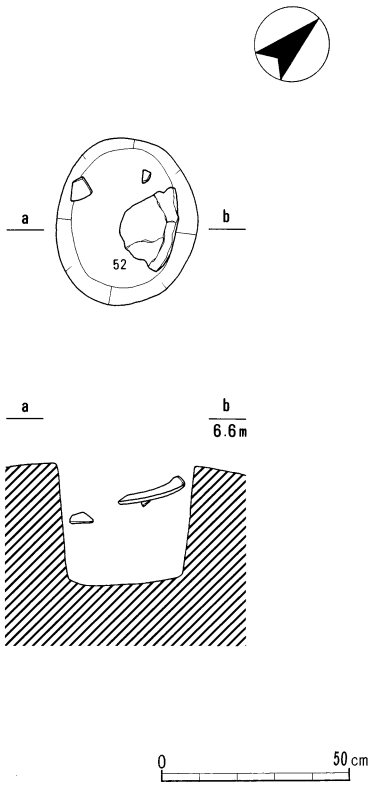
第12図　ＳＥ627平面図・土層図（1：40）



第13図　ＳＲ630土器出土状況図（1：40）



第14図　ＳＫ632遺物出土状況図（1：40）



第15図　Ｐit４土器出土状況図（1：20）

うに検出した東西に細長い土坑で、底面は平坦である。また墓坑の可能性もあるが、棺痕跡や鉄釘などは見られなかった。出土遺物には、製塩土器片や土師器杯片などがあり、時期は平安時代前期である。

ＳＫ632（第14図）　ｐ５からｑ６グリッドにかけて検出した土坑で、長さ約2.4m、幅約1.9mの北側がやや丸い長方形を呈する。検出面からの深さ48～108cmである。埋土は灰褐色系砂質土の上層と青灰色系粘土の下層に分けることができる。上層からは黒色土器椀(45)、灰釉陶器椀(46・47)などが出土し、下層から土師器小皿(39・40・42)や須恵器甕の体部片などの土器のほか、曲物底板(162)や自然木が出土した。時期は平安時代後期である。

Ｅ　溝

ＳＤ615　ｄ４からｒ９グリッドで検出した北西から南東方向にほぼ直線的に流れる東西溝である。調査区内で検出した長さは、Ｇ地区部分を含めると約64mになる。幅約35～90cm、検出面からの深さ２～18cmである。遺跡が立地する微高地を直線的に流れる。出土遺物には須恵器杯蓋(8)や高台付杯(9)、土師器高杯(71)などのほか、縄文土器(59)も出土している。遺構の時期は飛鳥時代と考えられる。

ＳＤ616　ｄ５からｔ９グリッドで検出した溝で、西側ではＳＤ615に平行して南東方向に流れ、東側でＳＤ615を切る溝である。幅約30～80cm、検出面からの深さ３～13cmである。出土遺物には須恵器杯蓋・甕片、平安時代の土師器杯・甕片などがある。時期は飛鳥時代から平安時代である。

(3)　鎌倉時代以降の遺構

Ａ　土坑

ＳＫ617　ｈ５・ｈ６グリッドで検出した土坑で、一辺約2.2～2.3mの北東部がやや出る方形状の土坑である。検出面からの深さ７～18cmである。土坑の南西部は弥生時代中期のＳＫ618を切っている。出土遺物は僅かながら陶器椀(49)などがあり、鎌倉時代以降である。

(4)　時期不明・その他の遺構

Ａ　掘立柱建物

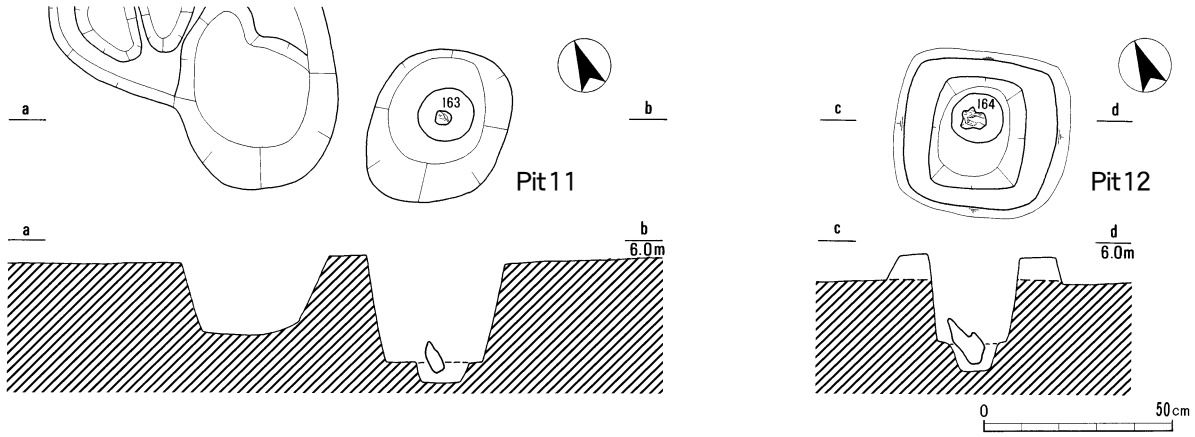
ＳＢ610（第８図）　ｈ３からｉ５グリッドで検出した南北棟の側柱建物である。桁行・梁行ともに柱穴を一部検出できなかったが、規模は４間(桁行8.85m）×３間（梁行4.5m）と推定される。棟方向はＮ39°Ｅを示す。柱掘形は径約30～50cmの方形または円形で、柱穴の深さは検出面から12～27cmである。柱穴からは土師器細片しか出土していない。

ＳＢ624（第９図）　ｌ５からｎ６グリッドにかけて検出した側柱建物である。３間（桁行6.6m）×１間（梁行2.25m）の東西棟である。建物の方位はＮ22°Ｅである。柱掘形は径約16～30cmの円形である。柱穴の深さは検出面から９～29cmである。柱穴からは土師器甕体部片しか出土していないため時期不明としたが、ＳＢ613とは規模が類似し、棟方向の振りがほぼ90°であることから、ＳＢ613と同時期の可能性が高い。

Ｂ　土坑

ＳＫ625　ｎ５・ｎ６グリッドで検出した不整形な土坑である。長さ約1.2～2.1m、検出面からの深さ21～34cmで、出土遺物には土師器や須恵器の細片などがある。

ＳＫ629　ｎ６・ｎ７グリッドで検出した不整形な土坑である。長さ約3.5m、幅約0.9～1.5m、検出面からの深さ３～４cmで浅く南北に長い。出土遺



第16図　ＳＢ612のPit11・Pit12柱根出土状況図（1：20）

物は土師器などの細片にとどまる。

C　溝

ＳＤ602　　ｃ１からｈ３グリッドで検出した流路である。幅約1.0～3.7mで、南側に大きく湾曲する。検出面からの深さ約20～50cmである。埋土は褐色粗砂である。ＳＤ604から続く溝と考えられたが出土遺物はなく、自然堆積の可能性もある。

ＳＤ603　ｄ１からｇ１グリッドで検出した溝である。調査区南側に約５mほど張り出す。落ち込みと考えられる。幅約0.5～2.5mで、検出面からの深さ７～20cmである。西側底が最も深く約35～40cmである。出土遺物には常滑産の陶器壺(50)のほか、縄文土器(60)、土師器皿(77)・甕、土錘(119)、須恵器甕や陶器椀片が出土している。

ＳＤ604　　ｈ１グリッドで検出した溝である。落ち込みと考えられる。長さ約2.5m、幅約4.6mで、検出面からの深さ20～34cmである。出土遺物は土師器細片のみである。

ＳＤ605　　ｉ１からｋ１・ｋ２グリッドにかけてＳＤ606に平行するように検出した塊状の攪乱土を埋土にする東西溝で、幅約0.7～2.0mで、検出面からの深さ18～25cmである。出土遺物には、土師器杯、陶器椀、瀬戸・美濃産すり鉢片のほか、緑釉陶器片も出土している。

ＳＤ606　　ｊ１・ｋ１グリッドで検出したブロック状の攪乱土を埋土にする東西溝で、幅約0.6～0.9mで、検出面からの深さ12～19cmである。出土遺物には土師器高杯、陶器丸碗(51)のほか、ロクロ土師器、陶器椀、近世陶器片などがある。

ＳＤ607　　ｋ１からｌ２グリッドで検出した東西溝で、ＳＤ605・606に同様にブロック状の攪乱土を埋土にする東西溝である。落ち込みとも考えられる。南側に約５mほど張り出している。長さ約2.5m、幅約4.6mで、検出面からの深さ20～34cmである。出土遺物は土師器細片のみである。

ＳＤ614　　ｋ３からｌ２グリッドで検出した北東壁際から南にまがる東西溝である。幅約0.5mで、検出面からの深さ４～７cmである。埋土は灰褐色砂質土である。出土遺物はなく時期は不明である。

ＳＤ623　　ｈ７・ｉ７グリッドで検出した東西溝である。幅約0.5mで、検出面からの深さ５～７cmである。出土遺物は土師器細片のみである。

遺構番号	規模	棟方向	柱間（m） 桁間		柱間（m） 梁間		柱掘形	柱痕跡	時代	備考
ＳＢ610	４間×３間 側柱建物	南北棟 Ｎ39°Ｅ	8.85	北から 1.95＋2.7 ＋（西） 3.45＋1.65＋2.1 ＋1.65（東）	4.5	1.5 等間	円形、楕円形 方形 径 30cm～50cm 深 12cm～27cm		時期不明	
ＳＢ612	５間×３間 総柱建物	南北棟 Ｎ23°Ｅ	10.65	北から 2.4 ＋2.1 ＋2.4 ＋2.1 ＋1.65	7.35	2.4 ＋2.55＋2.4	円形、方形 径 20cm～50cm 深 7cm～26cm	円形 16cm～20cm	平安後期	南面庇 柱根（163）
ＳＢ613	３間×１間 側柱建物	南北棟 Ｎ23°Ｅ	6.6	北から 2.1 ＋2.25＋2.25	2.4	2.4	円形、方形 径 25cm～45cm 深 11cm～32cm		平安後期	
ＳＢ621	３間×３間 側柱建物	東西棟 Ｅ28.5～33°Ｓ	4.05 4.20	西から 1.35＋1.2 ＋1.5（北） 1.35＋1.2 ＋1.65（南）	3.15	北から 1.05＋1.05＋0.9	隅丸方形、 楕円形 径 20cm～70cm 深 7cm～64cm	円形 16cm～20cm	飛鳥	桁行と梁行は直交しない。
ＳＢ622	３間×２間 側柱建物	東西棟 Ｅ28.5°Ｓ	3.6 3.9	西から 1.2 等間（北） 1.05＋1.65＋1.2（南）	3.3 3.4	北から 1.65 等間（東） 1.7 等間（西）	隅丸方形、 楕円形？ 径 50cm～75cm 深 10cm～32cm	円形 18cm～30cm	飛鳥	桁行と梁行とも不揃い。
ＳＢ624	３間×１間 側柱建物	東西棟 Ｅ22°Ｓ	6.6	西から 2.7 ＋1.95＋1.95（北） 2.4 ＋2.25＋1.95（南）	2.25	2.25	円形 径 16cm～30cm 深 9cm～29cm	－	時期不明	

第２表　掘立柱建物一覧表

遺構番号	規模	方向	柱間（m）				柱掘形	柱痕跡	時代	備考
ＳＡ631	東西　南北 ３間×３間	逆Ｌ字 Ｎ25°Ｅ	南北 6.6	北から　（南北） 2.1 ＋2.1 ＋2.4	東西 6.6	西から　（東西） 2.1 ＋2.1 ＋2.4	円形 径 20cm～30cm 深 10cm～28cm	―	平安後期	居住域を区画する柱列か。
ＳＡ633	３間以上	東西 Ｅ30°Ｓ	(6.45)	西から 1.95＋2.4 ＋2.1 ＋			円形 径 20cm～26cm 深 7cm～11cm	―	飛鳥前半	ＳＡ633とＳＡ634とは平行する。
ＳＡ634	２間以上	東西 Ｅ30°Ｓ	(2.7)	西から 1.35＋1.35＋			円形 径 12cm～24cm 深 10cm～30cm	―	飛鳥前半	

第３表　柱列一覧表

ＳＲ630　　ｋ７からｏ６グリッドで検出した東西溝である。幅約0.3ｍで、検出面からの深さ３～28cmである。出土遺物は土師器細片のみである。

３　遺物

今回の調査で遺跡から出土した遺物は、コンテナバットで約40箱になる。掲載した遺物の時代は、縄文時代から明治時代まであるが、その中でも量的に多くを占めるのは弥生時代中期と平安時代中期および後期の遺物である。量的には少ないが古墳時代や飛鳥・奈良時代もある。以下、各個の詳細については、遺物観察表を参照されたい。

（1）　縄文時代の遺物（第20図）

包含層・その他出土の土器（59・60）

深鉢(59)は、晩期の五貫森式の体部である。沈線から上部はナデを行い、下部は横位にケズリで調整する。内面は二枚貝の条痕が見られる。ＳＤ603出土で混入である。深鉢(60)は、晩期の馬見塚式の口縁部である。口縁部が外反して開き端部が肥厚する。外面には素文の突帯がめぐる。ＳＤ615出土で混入である。

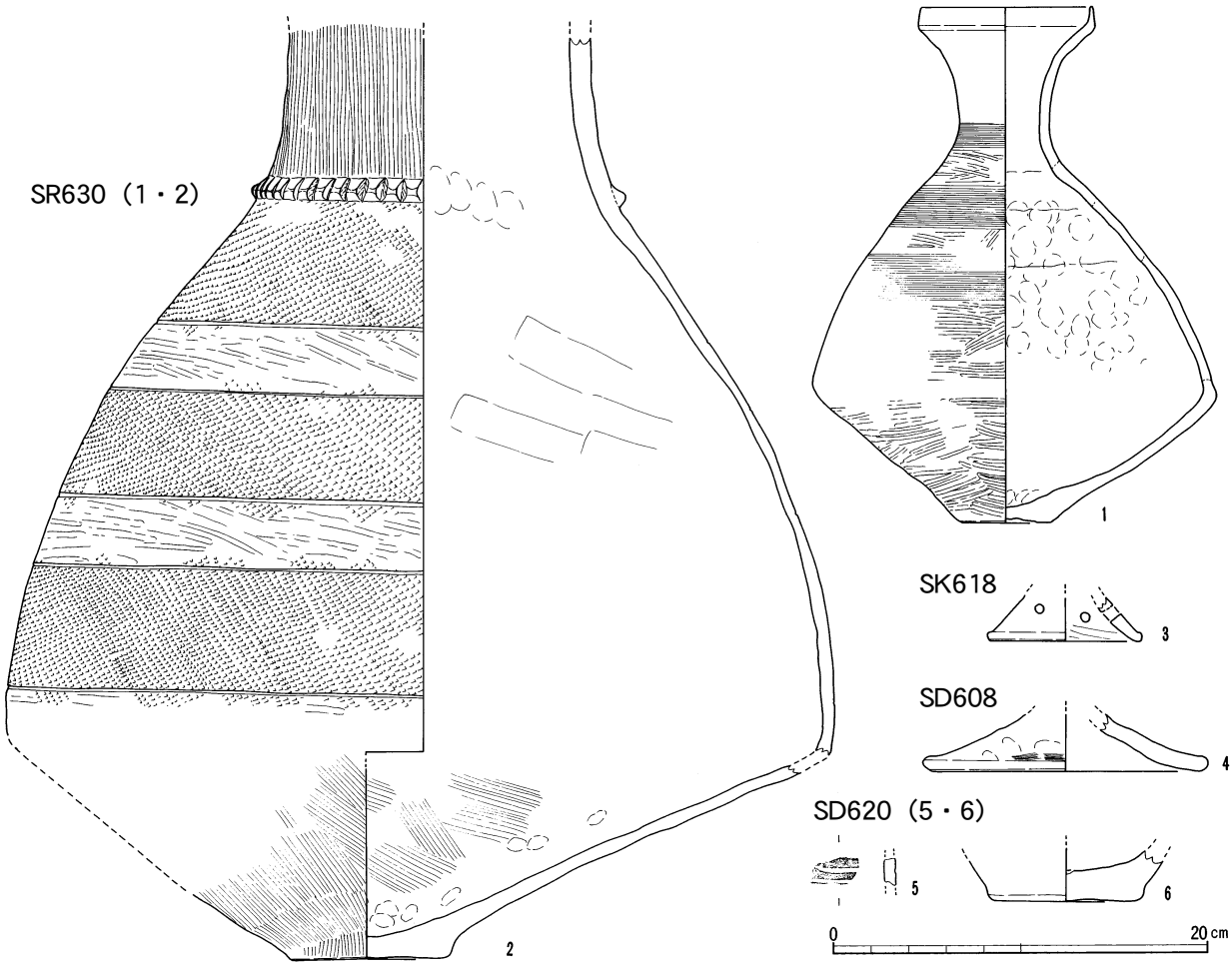
（2）　弥生時代の遺物（第17・20・19図）

ａ　ＳＲ630出土の土器（１・２）

受口状細頸壺(1)は、体部最大径が中央より下にあり、外面は磨滅が著しいものの頸部から体部下半にかけてヘラミガキの後に複帯構成の櫛描直線文を施している。また内面には成形時の粘土紐のつなぎ目痕や指頭圧痕が見られる。壺(2)は、口縁部を欠くが残存器高が50cmほどの大型壺である。体部最大径が中央より下にあり、頸部外面に粘土紐を貼り付けた後に、ヘラ状具で刻み目をいれる。体部外面には擬似縄文を施した後に沈線で区画する文様帯を施している。

ｂ　ＳＫ618出土の土器（３）

後期の高杯脚部である。脚裾端部を外にまげて丸くする。脚部には透孔が２孔見られる。また内面には粗いハケメを施している。



第17図　出土土器実測図(1)（１：４）［ＳＲ630、ＳＫ618、ＳＤ608・620］

c　ＳＤ608出土の土器(4)

壺の蓋である。体部は厚く、外面は指頭によるオサエの後にナデ、その後細かいハケで調整されている。内面には黒斑が見られる。

d　ＳＤ620出土の土器（５・６）

壺(5)は、細片であるが、外面にヘラ描き沈線が２条見られる。内面はナデ調整である。(6）は甕底部で、内外面ともナデで調整する。底径は７cm前後である。

e　小穴出土の土器（52～54）

壺(52)は、外面は磨滅が著しいが、内外面に斜位にハケメが残っている。また外面に黒斑が認められ、胎土に最大４cmほどの粗い砂粒を多く含んでいる。Ｐit４出土である。甕(53)は、緩やかに外反する口縁部をもち、口縁端部に櫛状具による刻み目を施している。外面は口縁端部は横位にハケメを施し、頸部は縦位にハケ調整した後に櫛描直線文をめぐらしている。Ｐit５出土である。(54)は器壁が薄い小型甕の底部である。外面に縦位にハケ調整が見られる。底部は完存している。Ｐit６出土である。

f　包含層・その他出土の遺物(61～70)

壺（61～65)には、外面を板状具による押圧によって段をつくる(61)がある。前期中段階であろう。(62～65)は壺の体部片である。(62)は削り出し突帯を施している。(63)は２条のヘラ描き沈線を施している。(62・63)は前期新段階のものである。(64)は櫛描直線文を沈線で区画するもの。(65)は縄文を密に施している。中期前葉である。

甕(66～70)には、口縁部をゆるく外反させる甕(66)がある。口縁部には焼成前の孔が２孔一対見られる。(67)は口縁部をく字状に屈折させる甕で、口縁端部に櫛状具による刻み目を施し、内面は横位に、外面は縦位にハケ調整する。(68)は口縁部を短く外反させる甕で、口縁端部に刻み目を施している。(69)は受口状口縁の甕で、口縁端部と口縁部下端に刻み目を施している。調整は、外面は口縁端部は横位に、頸部は縦位のハケ調整の後に櫛描直線文を施文している。(70)は甕底部で、外面を縦位にハケ調整する。

(3)　古墳時代の遺物（第19・20図）

a　小穴出土の土器　（55・56）

土師器(55・56)は、高杯である。(55)は丸い椀状の杯部がつき、脚端部は短く水平気味に開くものと考えられる。古墳時代中期の６世紀代の所産である。Ｐit７出土である。(56)は柱状の脚部で、外面は板ナデ、内面にはシボリメが見られる。Ｐit８出土である。

b　包含層・その他出土の遺物（71～75）

土師器(71～73)には、高杯の脚部(71・72)がある。(71)は脚部を外下方に開き、外面をヘラミガキする。透孔は３方向にある。元屋敷期のものである。(72)は、磨滅が著しく調整は不明である。透孔は３方向にある。台付甕(73)は、口縁部片で、弥生時代末から古墳時代に見られる「Ｓ字状口縁台付甕」の系譜上にあるもので、「宇田型甕」と呼ばれる。山城編年でＦ２類[①]に相当し、台付甕の終末段階のもので、６世紀中頃のものである。

須恵器(74・75)には、口径14cm前後の杯蓋(74)がある。天井部をロクロケズリで調整する。(75)は杯身で、口径13cm前後、底部はロクロケズリで調整する。ともに陶邑編年のＴＫ43[②]型式期に相当しよう。６世紀後半の所産である。

(4)　飛鳥から平安時代の遺物（第18・20図）

a　ＳＡ634 ・Ｐit１出土の土器(7)

推定口径9.8cmの須恵器の杯身である。立ち上がりは短く内傾する。底部はヘラ切り未調整で、扁平である。陶邑編年のＴＫ217型式期に相当する。７世紀前半の所産である。

b　ＳＤ615出土の土器(８・９)

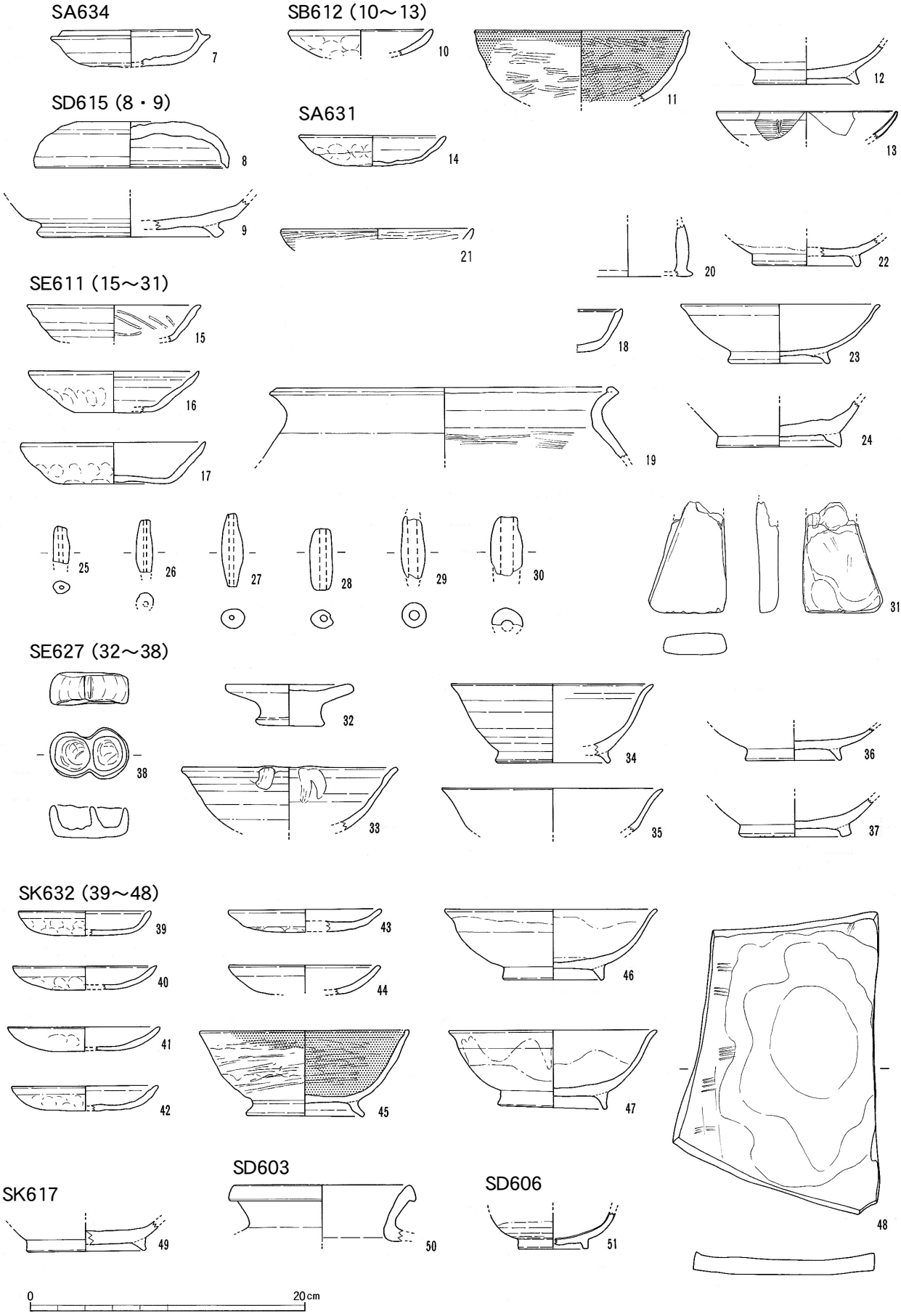
須恵器(8・9)には、口径14cm前後、天井部がヘラ切りのままの杯蓋(8)がある。陶邑編年のＴＫ209型式期に相当する。６世紀末から７世紀初め頃のものである。混入遺物であろう。台付杯(9)は、高台が杯底部外面のやや内側につき、ハの字状に外下方にのびて、端部を外上方に上げ気味におわる。７世紀後半である。

c　ＳＢ612・Ｐit２出土の土器(10～13)

(10～13)の土師器、黒色土器、灰釉陶器、白磁は、Ｐit２から出土した土器である。

土師器(10)は、口径10cm前後の小皿で、口縁部ヨコナデ、体部外面には指頭圧痕がのこる。

黒色土器(11)は、口縁部が残存しているもので、



第18図　出土土器実測図(2)（１：４）［ＳＢ612、ＳＡ631・634、ＳＥ611・627、ＳＫ617・632、ＳＤ603・606・615］

体部から高台付き椀と思われる。体部の器壁が厚く、緩やかに立ち上がる体部から口縁部を丸くおさめる。内外面は横位に幅が広いヘラミガキで調整する。内面のみを黒化するＡ類の椀である。11世紀後半頃に相当し平安時代後期にあたる。

灰釉陶器(12)は、底部に断面三角形状の高台がつく椀である。百代寺式窯併行期のものである。

白磁(13)は、小片であるが、器壁が薄く堅緻な小皿である。外面に輪花が見られる。

ｄ　ＳＡ631・Ｐit３出土の土器(14)

土師器(14)は、口径10cm前後の小皿で、口縁部の歪みは大きい。体部外面に指頭圧痕が明瞭に残り、底部はいびつである。

ｅ　ＳＥ611出土の遺物(15～31)

土師器(15～19)には、杯(15～18)がある。口縁端部が短く外反する(15)である。(16・17)は平坦な底部から真っ直ぐのびる口縁部をもち、体部外面に明瞭に指頭圧痕が見られる。(18)はやや厚い器壁をもち口縁端部内面に沈線がめぐる。内面には螺旋状暗文がのこる。体部外面には「井」の墨書が見られる。甕(19)は、口縁端部を内側に折り返して端部外面に面をもつもので､体部内面に横位にハケメが見られる。

製塩土器(20)は細片であるが、志摩式の鉢の体部片である。

黒色土器(21)は、丸みをおびた底部から口縁部が内湾気味にのびる杯である。口縁部はヨコナデ、内外面にミガキが見られる。在地産の土師器杯を黒色化したもので、非常に地域色が強い土器である。大川氏の分類の杯Ｃ類③にあたる。底部外面には墨書が見られる。「饗」の異体字ではないかと④言うことである。また外面に脂肪分が付着している。時期は９世紀後半頃のものである。

灰釉陶器(22～24)には、椀(22・23)がある。(22)は断面三角形状の高台をもち、体部内外面に灰釉を漬け掛けする。(23)は薄手の体部から口縁部を外反させる。灰釉の範囲は剥離が著しいため不明である。長頸瓶(24)は、底部に外端部で立つ高台がつく。体部外面に透明な灰釉が見られる。

土製品(25～30)は、すべて土師質の土錘である。(25・26)は直径1.2cmのやや小振りの土錘で、(27)は最大径1.6cm、中央部が膨らみ端部がすぼまるものである。(28・29)は最大径1.6cmほど、断面が方形に近い土錘である。(30)は最大径2.3cm、断面は方形に近いが中央が膨らむものである。

石製品(31)は、粘板岩製の砥石である。擦り面はよく使用され凹面状になっている。

ｆ　ＳＥ627出土の遺物(32～38)

土師器(32)は、ロクロ成形による台付小皿で、口径９cm前後、底径４cm前後のほぼ完形品である。底部には回転糸切り痕が見られる。

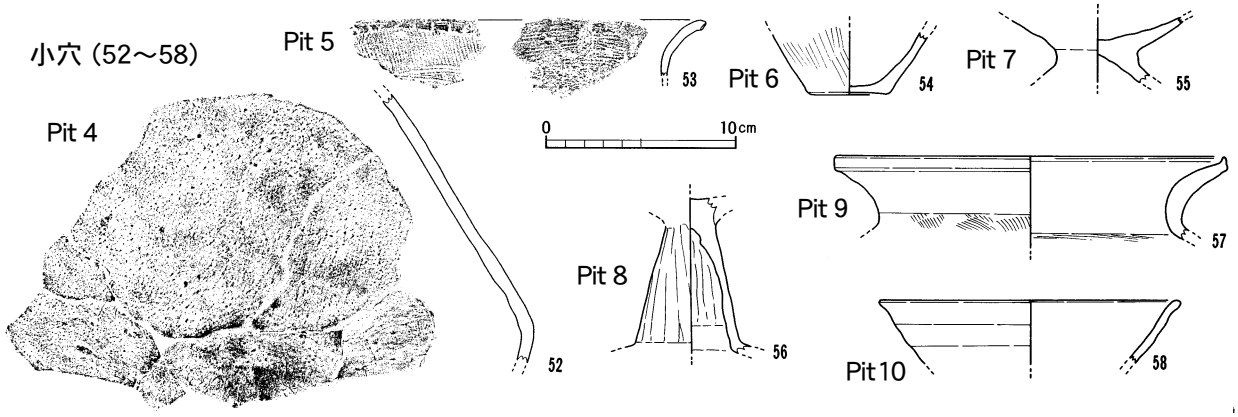
陶器(33～37)は、すべて椀である。口縁部には指頭による輪花を施す(33)をはじめ、口径に対して器高が高い深椀の形態を示す(34)などがある。これらは、藤澤編年の３型式から４型式⑤のもので、11世紀後半から12世紀初頭頃のものである。

土製品(38)は、２つの壺部をもつミニチュア土器で、外面を丁寧にナデて仕上げる。墨壺と思われる。

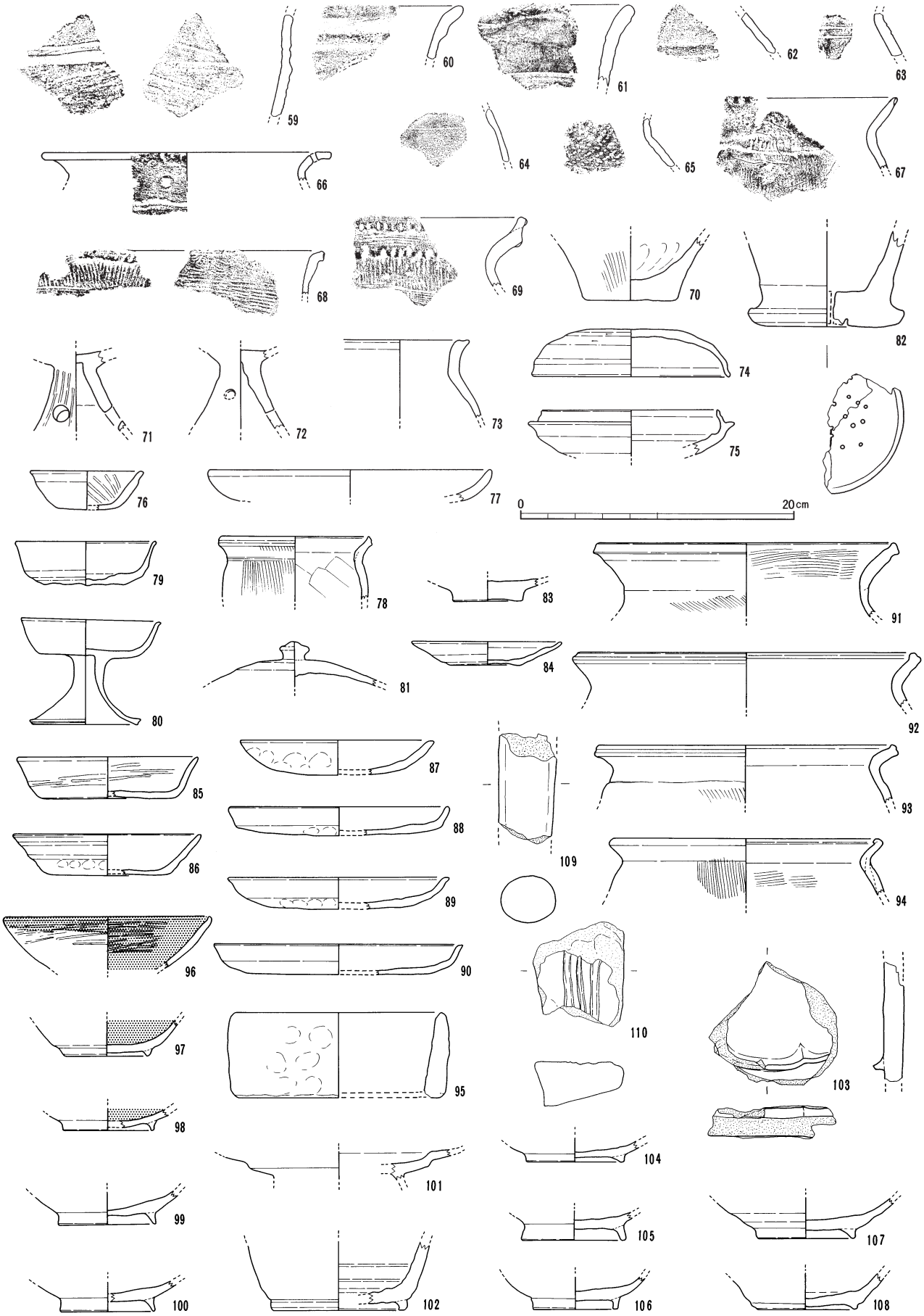
ｇ　ＳＫ632出土の遺物(39～48)

土師器(39～44)は、口径11cm前後、器高1.7cm前後の法量の似かよった小皿である。口縁部ヨコナデで、底部外面に指頭圧痕が明瞭に残る。

黒色土器(45)は、口縁部の内面に沈線をもち、内



第19図　出土土器実測図(3)（１：４）［小穴］



第20図　出土土器実測図(4)（１：４）［包含層・その他］①

外面を細かなミガキで調整する椀で、丸みをもった深い体部に、外方に開く腰高の高台を貼り付ける。内面のみを黒化するＡ類の椀である。11世紀後半頃に比定されよう。

灰釉陶器(46・47)には、口縁部を一部欠くがほぼ完形の椀(46)がある。胎土は陶器椀に似ている。口縁部に灰釉を漬け掛けする。百代寺窯式期のもので、11世紀後半頃である。(47)は深い体部をもつ椀で、体部内外面には漬け掛けされた灰釉が見られる。胎土が灰黄色で、東濃系の椀である。包含層出土の小片と接合した。

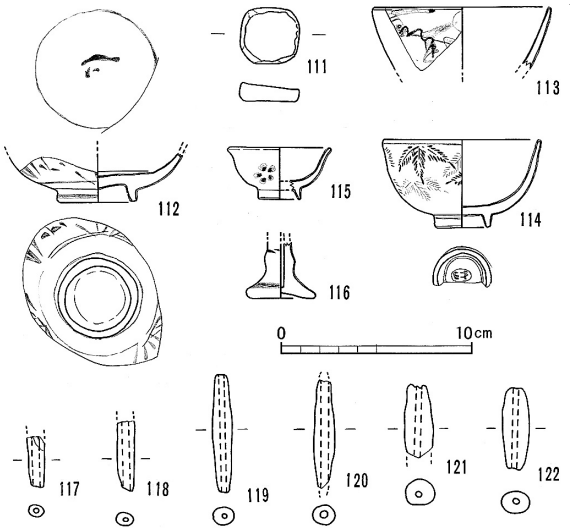
転用硯(48)は、須恵器甕の体部内面を硯面として利用したもので、硯面全体に墨痕が見られる。中央部のやや右上を中心にして楕円形状の使用痕が認められる。

ｈ　小穴出土の土器(57)

土師器(57)は、口縁端部を上方につまみ上げて口縁部外面に面をもつ甕である。体部外面は斜位に、内面は横位にハケメを施す。Ｐit９出土である。

ｉ　包含層・その他出土の土器(76～104)

飛鳥から奈良時代の土師器(76～78)には、口径８cm前後、色調はにぶい黄橙色ないし橙色を呈する飛鳥時代の杯(76)がある。内面にヘラミガキを施す。皿(77)は、器壁が厚く内湾して立ち上がり口縁端部を丸くおさめる。甕(78)は、口径11cm前後の小型甕で、口縁端部を外上方につまみ上げる。体部外面は縦位にハケ調整し、内面は斜位に板状具で削



第21図　出土土器実測図(5)（１：４）
［包含層・その他］②

る。また、飛鳥から奈良時代の須恵器(79～82)には、口径10cm前後で、底部はヘラ切りのままの杯(79)がある。口縁部に歪みがある。高杯(80)は、口径10cm前後、脚部は緩やかに外下方にのび、脚部の裾端部外面がヨコナデにより凹状になっている。蓋(81)は、天井部をロクロケズリした後に宝珠つまみをナデで貼り付ける。鉢(82)は、いわゆるすり鉢型土器と呼ばれるもので、やや丸みおびた逆台形状の台部から、体部が外上方にのびる。底部外面には多くの小孔が見られる。

平安時代の土師器(83～96)には、ロクロ成形による小皿(83・84)がある。(83)は底部が柱状の台部をもつ台付小皿である。底部径５cm前後である。(84)は口径11cm前後で、体部が外上方にのびて、ヨコナデにより口縁部内面が窪む。ともに底部外面に回転糸切り痕をのこす。

杯(85～87)には、平らな底部から外上方に立ち上がり、口縁部が緩やかに外反する(85)、平らな底部から外上方に直線的に立ち上がる(86)、丸い底部から緩やかに外上方に立ち上がり、口縁端部が外に向く(87)がある。皿(88～90)には、平らな底部から稜をもって立ち上がり口縁端部を丸くおさめる(88)がある。(89)は平らな底部から緩やかに立ち上がり、口縁端部が外方にとがり気味におわらせる。(90)は平らな底部から稜をもって立ち上がり、口縁端部上面に面をもつ。甕(91～94)は、口縁部の強いヨコナデにより端部の内外面が窪むもの(91)、口縁部を内上方に肥厚させて端部を丸くおさめ、端部外面が窪むもの(92・93)、内側に折り返して肥厚させるもの(94)がある。

製塩土器(95)は、志摩式の鉢である。口径15cm前後、体部外面に指頭圧痕をとどめる。

黒色土器(96～98)には、口縁部内面に沈線もち、体部内外面をヘラミガキする杯(96)がある。内面のみを黒化する黒色土器Ａ類である。大川氏の分類の杯Ａ[⑥]である。椀(97・98)は、底部のみである。(97)は断面三角形の低い高台を、(98)は腰高の高台を、貼り付ける。

灰釉陶器(99～103)には、椀(99・100)がある。(99・100)の高台は外下方にのび、(101)は段皿の体部細片である。長頸瓶(102)は断面方形の高台をもつ。

硯(103)は、八花硯の硯面部片である。陶硯の分類によると形象硯[⑦]に属する。外縁に花弁状の刳りこみがあり、形が花弁状を呈していることから八花硯と呼ばれる。時期は９世紀頃であろう。

緑釉陶器(104)は、椀の底部片で、胎土は土師質である。濃い緑釉が内外面に掛かる。近江産で10世紀代である。

(5) 鎌倉時代以降の遺物（第18・20・21図）

ａ　ＳＫ617出土の土器(49)

陶器椀の底部である。底部糸切りの後に逆台形状の高台を貼り付ける。藤澤編年の５型式で12世紀後葉から13世紀初頭頃であろう。

ｂ　ＳＤ603出土の土器(50)

口縁部を折り返す常滑産の陶器壺である。口縁部から体部外面にかけて自然釉が見られる。

ｃ　ＳＤ606出土の土器(51)

施釉陶器の丸椀で、体部内外面に錆釉が見られる。高台は削り出しである。時期は大窯期である。

ｄ　小穴出土の土器(58)

陶器椀の口縁部片である。体部が直線的にのび口縁端部が外反する。藤澤編年の５型式に相当する。12世紀後葉から13世紀初頭に比定されよう。Ｐit10出土である。

ｅ　包含層出土の遺物(105～145)

陶器(105～108)は、すべて椀である。体部が丸みをおびて断面三角形の高い高台がつく(105・106)、体部が丸みをおびて断面三角形であるが低い高台をもつ(107)や体部が直線的で断面が逆台形状を呈する低い高台をもつ(108)がある。前者は藤澤編年の３型式から４型式に、後者は藤澤編年の５型式から６型式に相当しよう。

施釉陶器(111)は、内面に鉄釉が見られる。天目茶碗の体部を加工した円形加工陶磁製品である。

磁器(112～116)は、(112)は焼成が不良のため染付の発色が良くない。瀬戸産であろうか。(113) は、肥前の波佐見焼の染付碗である。いわゆる「くらわんか手」の碗で、外面は呉須で描かれている。(114)は型紙刷りの碗である。(115)は端反碗で、コバルト釉によって染め付ける。(116)は仏飯具で、外面に錆釉が見られる。

(112・113)は18世紀末から19世紀にかけての江戸時代後期頃、(114～116)は19世紀後半から20世紀初頭の明治時代である[⑧]。

土製品(109、117～122)には、土製支脚の脚部と思われる断面径約４cmの棒状の(109)がある。また(117～122)は、すべて土師質の土錘である。(117・118)は直径0.9cmのもの、(119・120)は最大径1.1cmの細長い形のもの、(121・122)は最大径1.5cm前後で中央がやや膨れるものがある。

砥石(110)は、表面に３条の使用痕跡がある。古墳時代の管玉を研磨したものとも考えられる。

(6) 木製品（第25～33図）

木製品の大半は、ＳＥ611から出土した井戸部材である。井戸部材の中には転用材も使用されている。またＳＥ627やＳＫ632などからも曲物が出土している。この他に小穴から出土した柱根がある。

ａ　ＳＥ611出土の木製品（123・～154）

井戸枠の部材と掘形から出土した曲物がある。

〔１〕井戸枠

井戸枠の部材は、四辺に打ち込まれた縦板、二段の横板、四隅の隅板からなる。

縦板（123～142)は、横板の周囲に一部二重に打ち込まれた。枚数としては西側に４枚、南側に４枚、東側に６枚、北側に６枚である。幅は不揃いで、縦板の上部は全て腐食している。木取りは板目または追柾目である。縦板の大半は、下端部の両面または片面を手斧により斜めに尖らせる。横板に沿わせて縦板を打ち込むためと考えられる。また一部であるが、(126)のように切断したままのもの、(141)のように杭状に尖らせたものもある。また両面の調整は基本的に手斧によるハツリである。また(134・140)には、切り込みが見られ転用材と考えられる。現存長は、西側で50～75cm前後、南側で60～80cm前後、東側で45～80cm前後、北側で43～120 cm前後である。

隅板(143～146)は、井戸枠の四隅に据えられ砂の流れ込みを押えていたと考えられる。縦板と同様に隅板の上部も腐食している。隅板には、下端部を切断したままのもの(146)、下端部の両面を斜めに削り端部を尖らせる(143)、片面のみを削る(144)などがある。(143・144)には手斧によるハツリ痕が見られる。木取りは板目または追柾目である。現存長は43

～51cm前後、幅24～38cm前後、厚さ4.2～4.5cmである。

横板(147～154)は、上段に組まれていた横板(147～150)と下段の横板(151～154)がある。上段の横板は、西側の横板(147)の両木口に出枘を、南側と北側の(148・150)には西木口に枘と東木口の上下の側面に、それぞれ切り込みを入れている。ただし下側面に入れた切り込みは、ともに浅い。また東側の横板(149)には両木口の下側面に切り込みを入れている。木取りは板目または追柾目である。

また下段の横板(151～154)は、木口に枘や切り込みは見られない。おそらく刀子のようなもので切り、その後折ったものと思われる。長さには112cm前後と115cm前後のものがある。幅15～18cm前後、厚さ1.6～2.2cmである。(153)は井戸底から、(154)は西側と南側の横板の下から出土した板材である。(154)の端部に約1.5cmの方形の孔がある。この４枚の横板は、同じ材を使用している。木取りは板目または追柾目である。

〔２〕曲物

曲物（155～157)には、井戸の掘形から出土した曲物の底板（155)がある。(156）は北側の掘形でうつ伏せの状態で出土したものである。径16cm前後、ほぼ完形である。(157)は、井戸枠内で出土したもので、径20cm前後、表面には黒漆が塗られている。残存は２／３ほどである。

b　ＳＥ627出土の木製品（158～161）

出土木製品には、井筒として使用されていた曲物をはじめ、掘形や井筒内から出土した曲物の底板がある。

曲物(158～161)には、２段に組まれていた曲物の側板(158・159)がある。上段の(158)は、本体は径53～55cm前後、高さ44cmで、本体の周囲には箍が４帯めぐり、本体と箍の間には、ほぼ本体を四分した均等方向にヘギ板４枚が挟まっていた。下段の(159)は、径41～53cmほどで上段より一回り小さい。本体には２帯の箍がめぐる。下部には22か所に径0.9～1.2cmの小孔が穿たれている。この小孔は湧水を曲物内に引き入れ、曲物内部の砂礫により水をろ過するためと考える。(160・161)は曲物の底板である。(160)は径約14cm。木釘の痕跡が３か所に認められ、うち１か所に木釘が残る。木取りは柾目である。(161)は径12～13cm前後。木釘の痕跡が５か所に認められ、木取りは追柾目である。

c　ＳＫ632出土の木製品(162)

曲物(162)は、径約15cmほどの底板で、３か所に木釘の痕跡が認められる。木取りは柾目である。

d　小穴出土の木製品(163・164)

柱根(163・164)は、ともに腐食が著しい。(163)はＳＢ11の柱根。木取りは柾目、材質はサワラである。Ｐit11出土である。(164)は木取りは芯材、材質はカヤである。Ｐit12出土である。

４　小結

今回の調査で、飛鳥時代から平安時代の集落が存在したことが確認された。以下に若干の考察をしてまとめとする。

遺構について

建物は、掘立柱建物６棟を検出した。ＳＢ621・622の２棟は、柱穴からの出土遺物は細片しかないが、本文でも記したように建物の柱穴と北を流れるＳＤ615・616の切り合い関係から、２棟の建物の方が先行すると考えられ、飛鳥時代と想定される。またＳＡ633・634は柱間が不揃いで柱穴が小さい。その間は幅３ｍで平行しており､通路の可能性がある。

平安時代のＳＢ612・613の２棟は、ＳＢ612の出土遺物から後期の建物である。ともに棟方向はＮ23°Ｅである。ＳＢ612は４間×３間に南庇をもつ建物で、その南西隅で重複して位置する３間×１間のＳＢ613は、①ＳＢ612と桁行の柱筋を揃えること、②柱穴の大きさや形態がＳＢ612と同じこと、からあまり隔たりをもたない時期に建て替えたものと思われる。また、これらの建物に伴う遺構は、調査区東の柱列ＳＡ631と土坑ＳＫ632がある。ＳＡ631の方位はＮ25°Ｅで、ＳＢ612・613と２°ほど方位が振れるが、出土遺物から同時期であり、ＳＢ612・613を含めた屋敷地の南東を区画したものと考えられる。

条里との関係では、安濃川南岸に広がる沖積地一帯には、条里の名残りとされる畦畔が見られた。検出した平安時代後期の建物２棟と柱列は、安濃川流域の条里方向であるＮ－約30°－Ｅとは、少し西に

振れている。また飛鳥時代と考えるＳＢ621・622はＥ28.5～33°Ｓ、ＳＡ633・634がともにＥ30°Ｓ、時期不明のＳＢ610 はＮ39°Ｅ、ＳＢ624はＥ22°Ｓである（第22図）。調査区南の飛鳥時代のＳＢ621・622およびＳＡ633・634を除き平安時代の建物等は、条里に関連づけるのは難しいと考えられる。また飛鳥時代の建物等の方向に見出せるとすると、この時代まで遡る可能性があることを示している。地形的には調査区が安濃川の自然堤防上に立地しており、河川から離れた沖積地やその微高地に立地する条里に関係する遺構が見つかった神戸遺跡[9]や弐ノ坪遺跡[10]と異にするのであろう。

墨書土器について

ＳＥ611から出土した墨書土器(21)は、在地で生産された土師器杯を黒色処理した土器と考えられ、畿内を中心に出土する都城的な黒色土器ではなく、地域的な色彩が濃い土器である[11]。

また底部に書かれた墨書は、欠損する部分があるが「饗」と言うことである。この文字には来客者（客人）に酒宴を設けて持て成しをする意味がある。この文字は、津市大里窪田町の大垣内遺跡[12]から出土している。大垣内遺跡の土器は、墨書された文字ではなく、土師器杯の内面にヘラで線刻されたものである（写真、下）。また内面には意図的にか穿孔がみられる。土器の年代は当遺跡出土の土器と同じと考えられる。底部に墨書された土器は、刻書された土器よりも消費地で使用された意味合いが強いと考えられ、このことから当地で持て成しを行い、饗宴を行った際に祭祀的行為、または儀礼的行為に使われたことが窺われる。

遺跡からは、須恵器を転用した硯や八花硯をはじめ、灰釉陶器や僅かではあるが緑釉陶器も出土しており、平安時代に有識者が居たと考えられる。今後、更なる発掘調査の成果が期待される。　（宮田勝功）

［註］

① 山田猛「４結語」『山城遺跡・北瀬古遺跡』三重県埋蔵文化財センター 1994　また宇田型甕については『鍋と甕－そのデザイン－』　第４回東海考古学フォーラム 1996　による。

② 田辺昭三『須恵器大成』角川書店 1981

③ 大川勝宏「斎宮の黒色土器」『斎宮歴史博物館研究　紀要二』斎宮歴史博物館 1993

④ 斎宮歴史博物館の榎村寛之氏の御教示による。また平安時代の黒色土器に墨書された土器は珍しいと言うことである。

⑤ 陶器椀については、以下の文献による。

・藤澤良裕「瀬戸古窯址群１」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要Ⅰ』瀬戸市歴史民俗資料館　1982

・藤澤良裕「山茶椀の現状と課題」『研究紀要』３ 1994

⑥ 註③に同じ。

⑦ 「陶硯関係文献　目録」『埋蔵文化財ニュース41』奈良文化財研究所埋蔵文化財センター　1983

⑧ 磁器については本堂弘之氏の御教示による。

⑨ 中川明『神戸遺跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター 1999

⑩ 池端清行ほか「弐ノ坪遺跡」『一般国道23号中勢道　掘調査概報Ｘ』三重県埋蔵文化財センター 1998

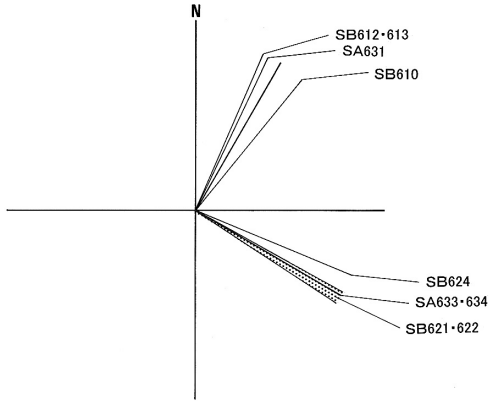
⑪ 斎宮歴史博物館の榎村寛之氏の御教示による。

⑫ 刻書土器については、服部芳人氏の御教示並びに御協力を得た。また、以下の文献を参考にした。

・「大垣内遺跡」『三重県埋蔵文化財センター年報５』 1994

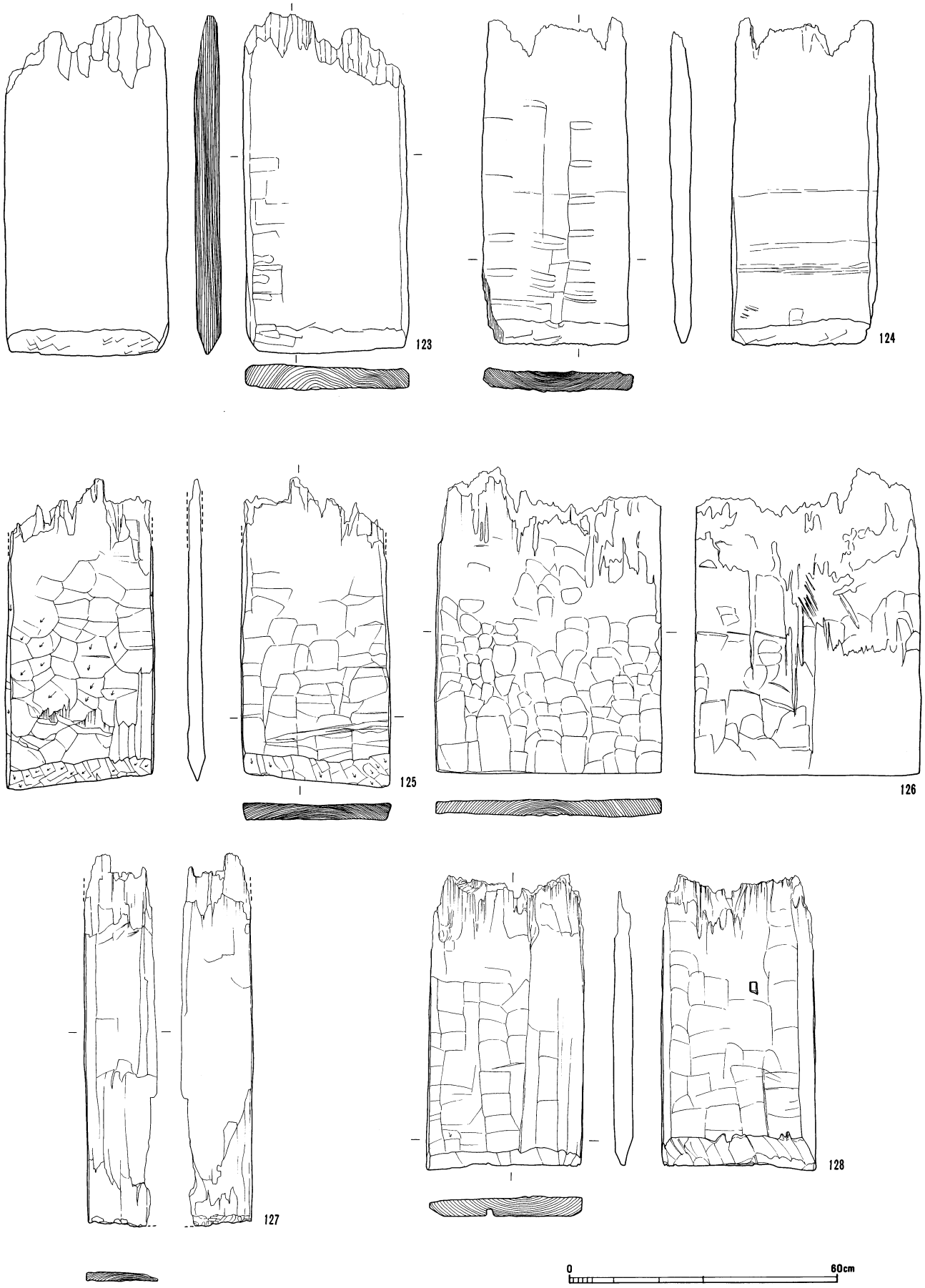
・『第３回三重県埋蔵文化財発掘調査速報展 '93発掘三重』三重県埋蔵文化財センター 1994

・『企画展　眠りから目覚めた文字たち　－斎宮跡の墨書土器－』斎宮歴史博物館 1997

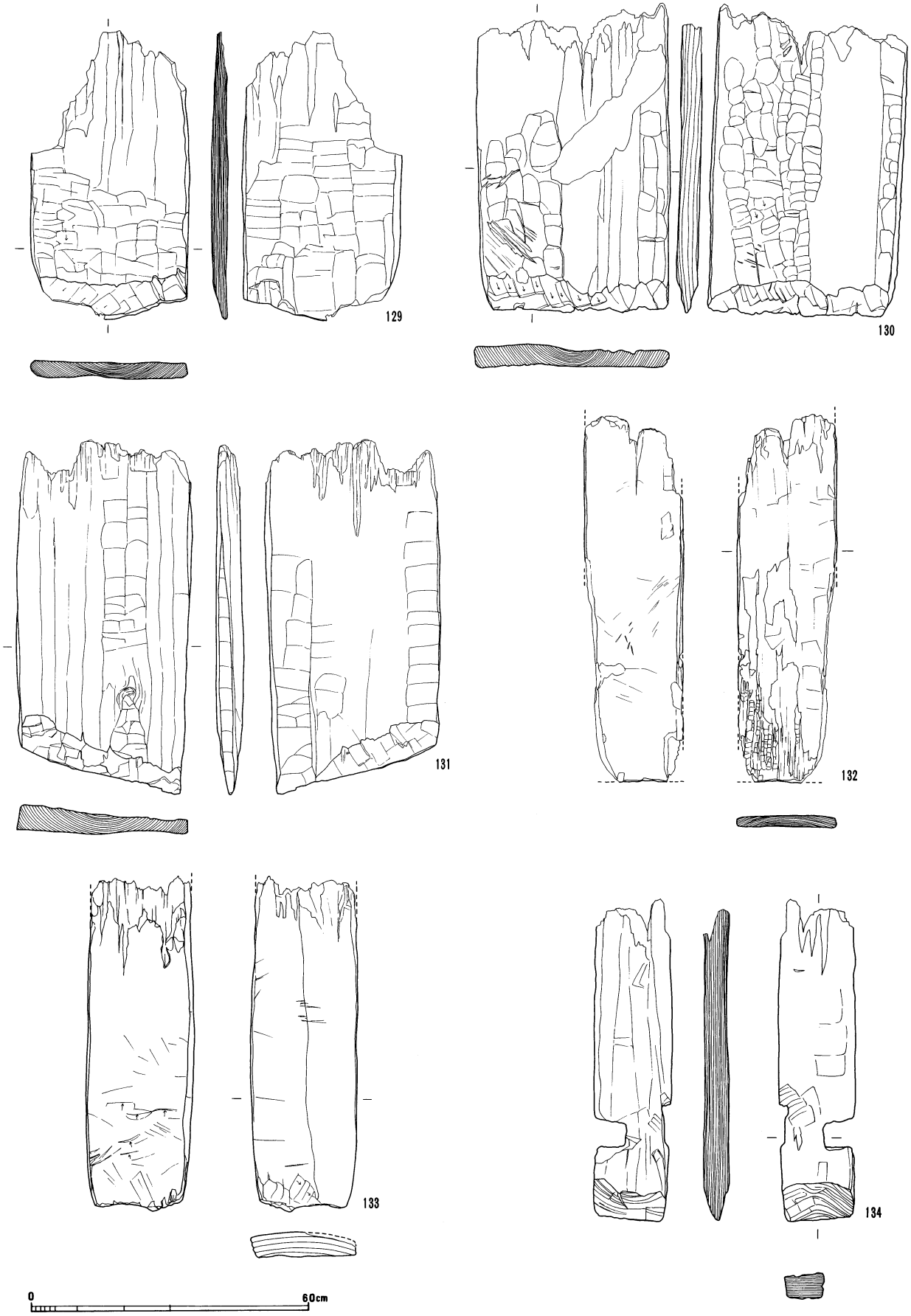


第22図　掘立柱建物・柱列等方位図

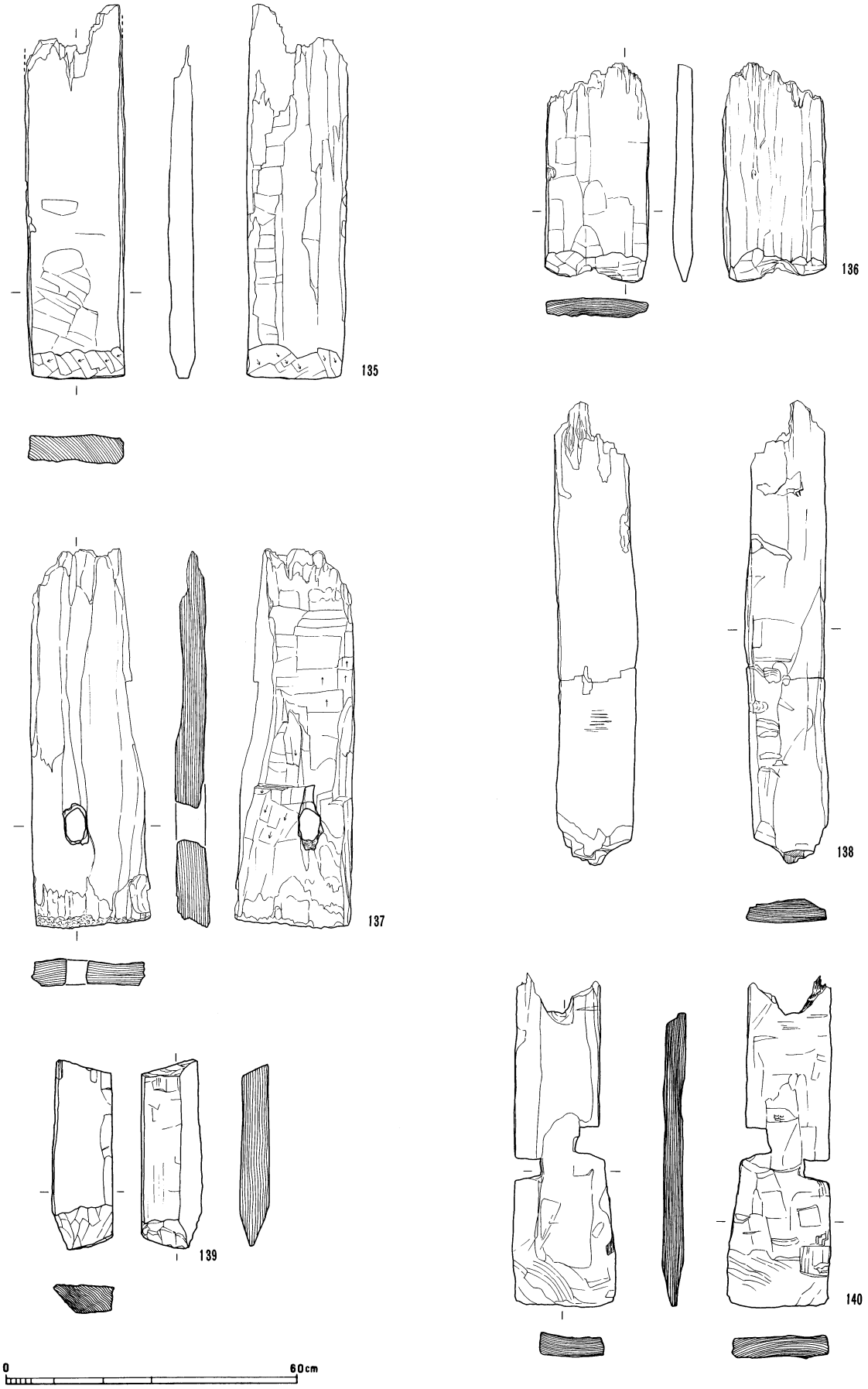
大垣内遺跡出土の刻書土器「饗」



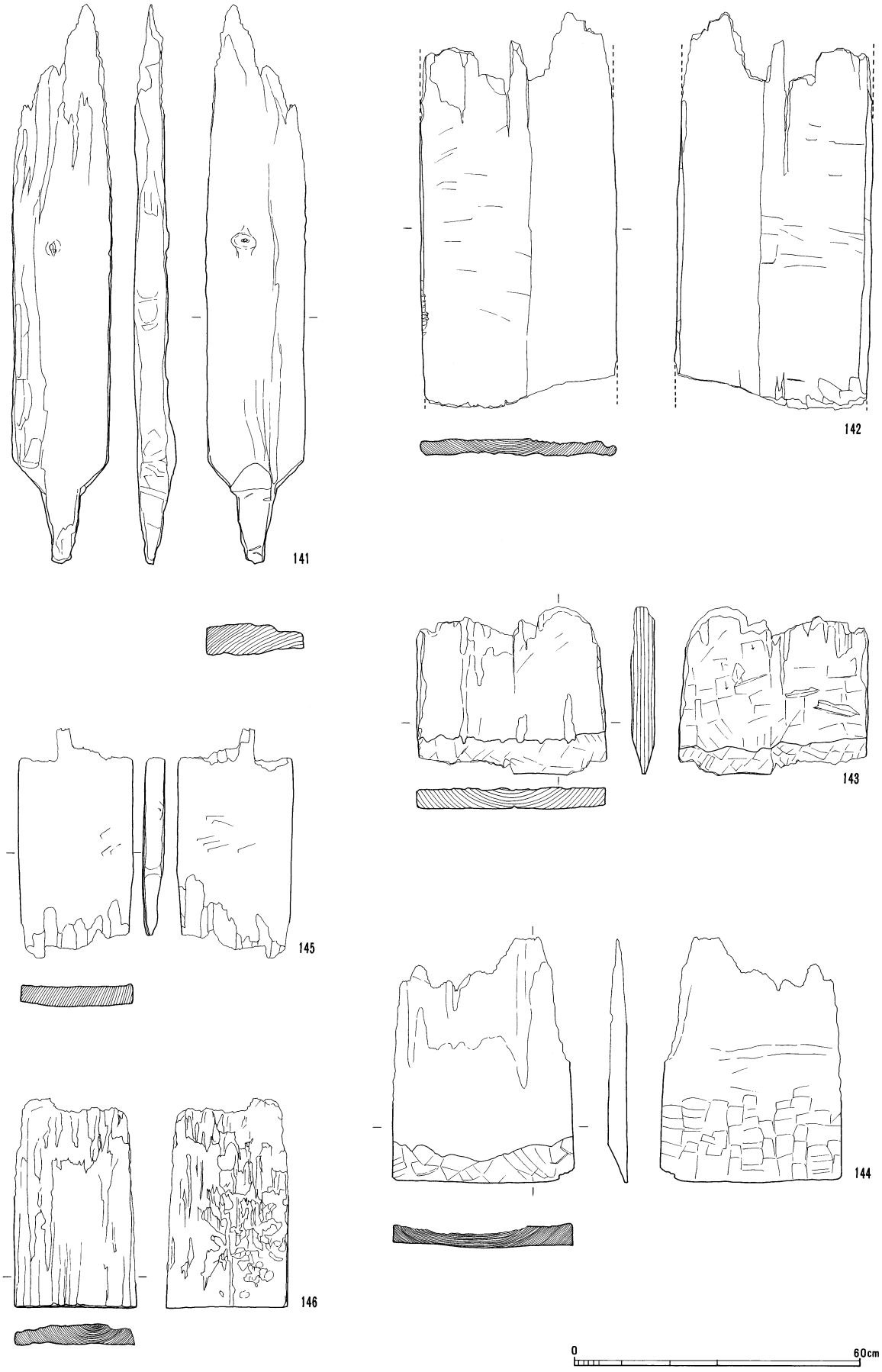
第23図　出土木製品実測図(1)（1：12）［ＳＥ611井戸枠材西側縦板・南側縦板］



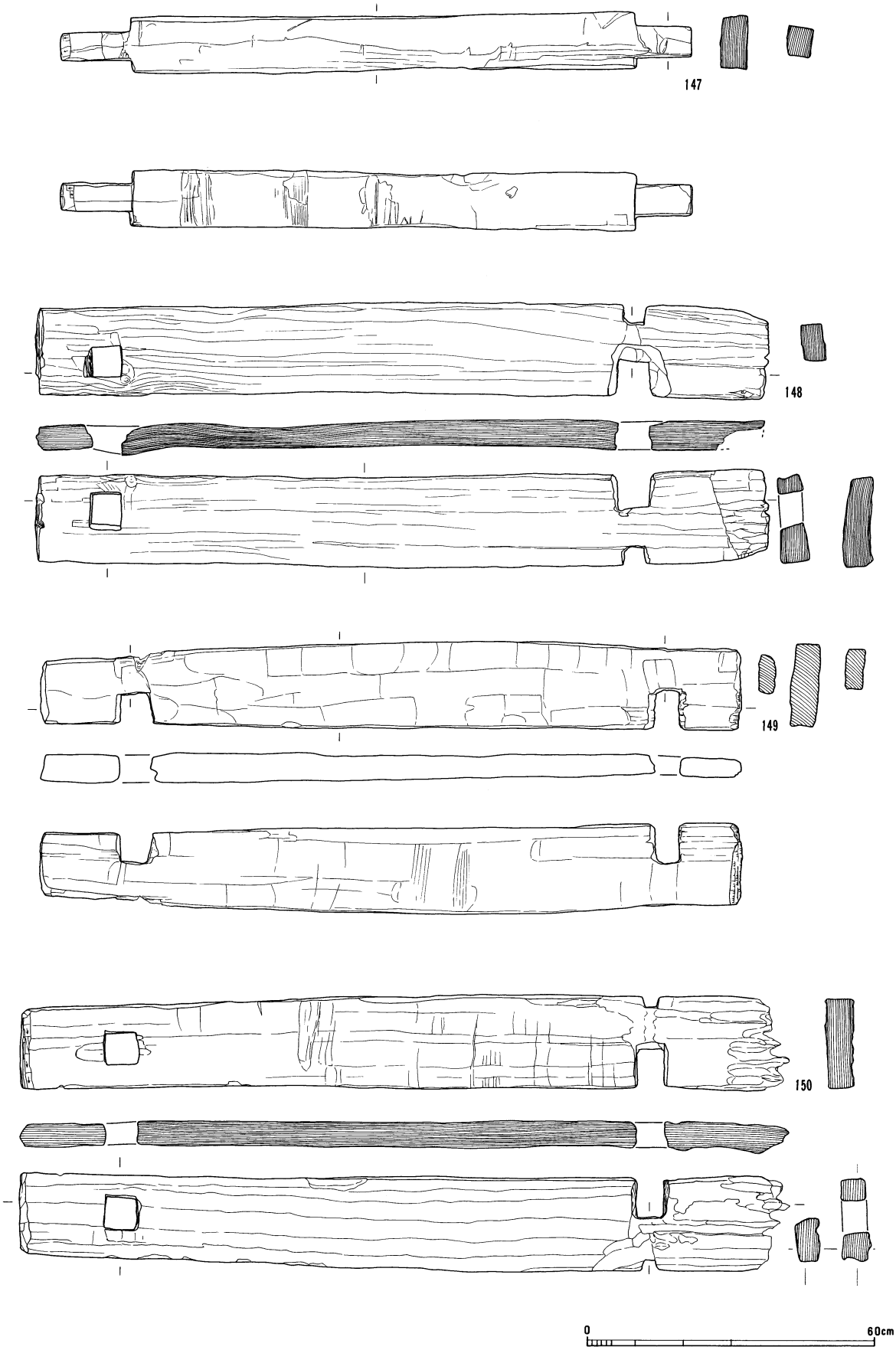
第24図　出土木製品実測図(2)（1：12）［ＳＥ611井戸枠材南側縦板・東側縦板］



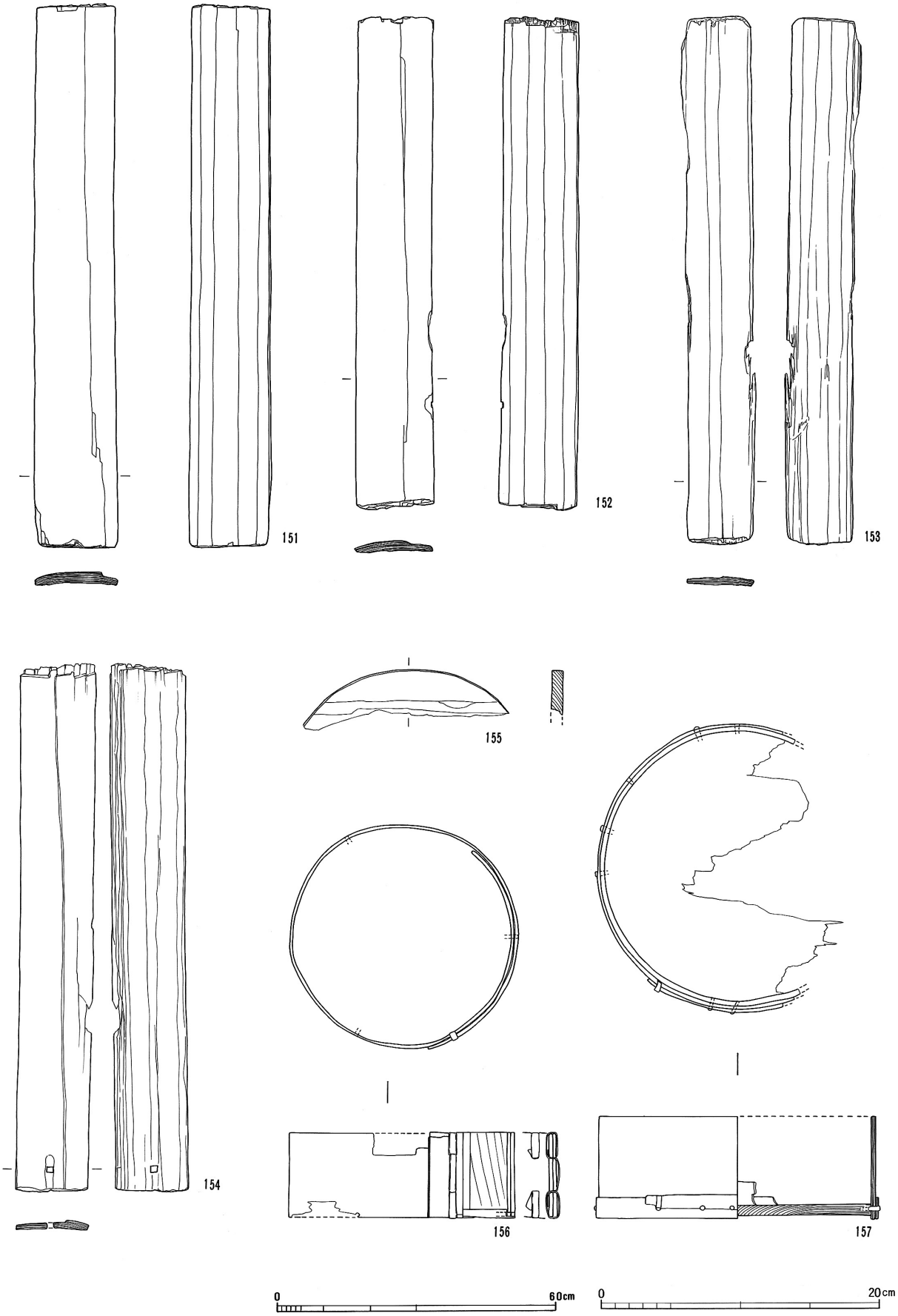
第25図　出土木製品実測図(3)（1：12）［ＳＥ611井戸枠材東側縦板・北側縦板］



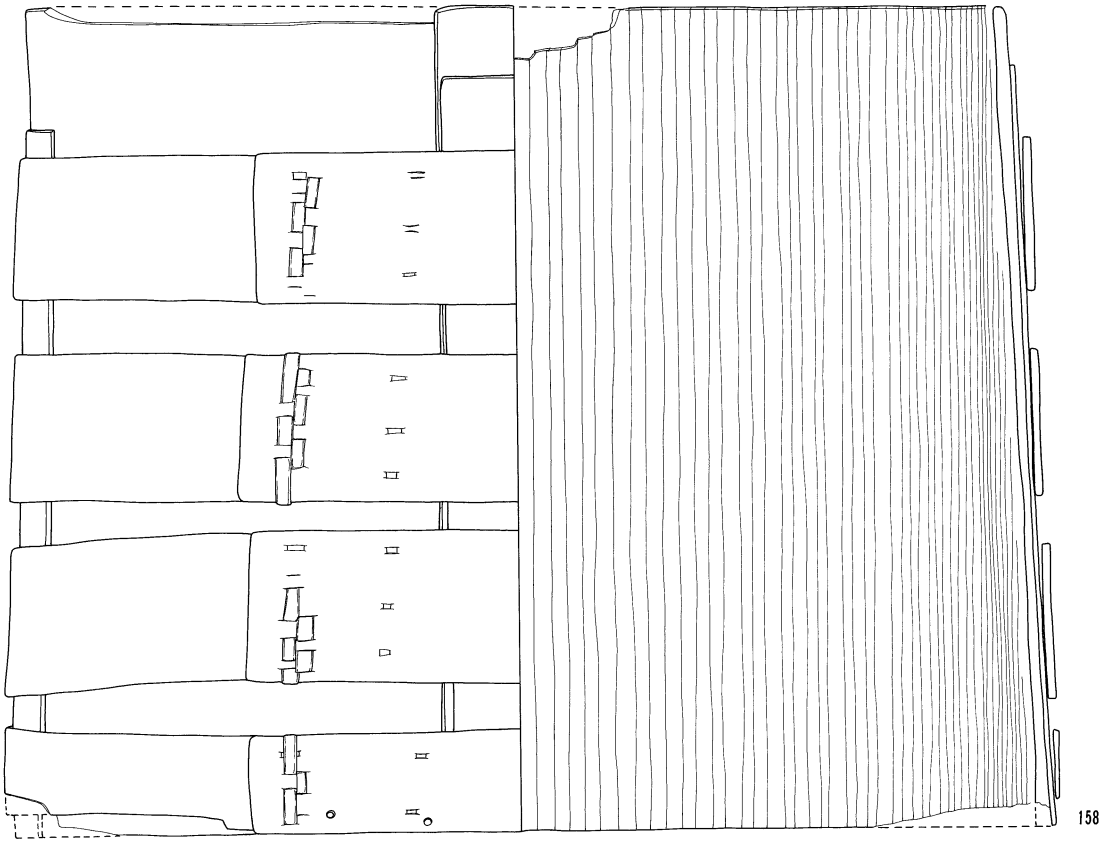
第26図　出土木製品実測図(4)（1：12）［ＳＥ611井戸枠材北側縦板・隅板］

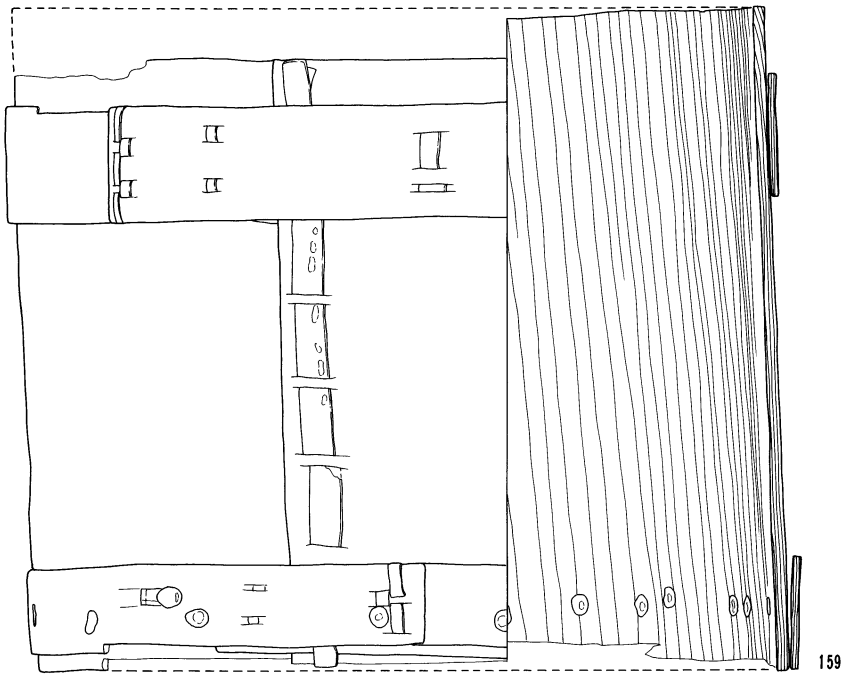


第27図　出土木製品実測図(5)（1：12）［ＳＥ611井戸枠材横板］

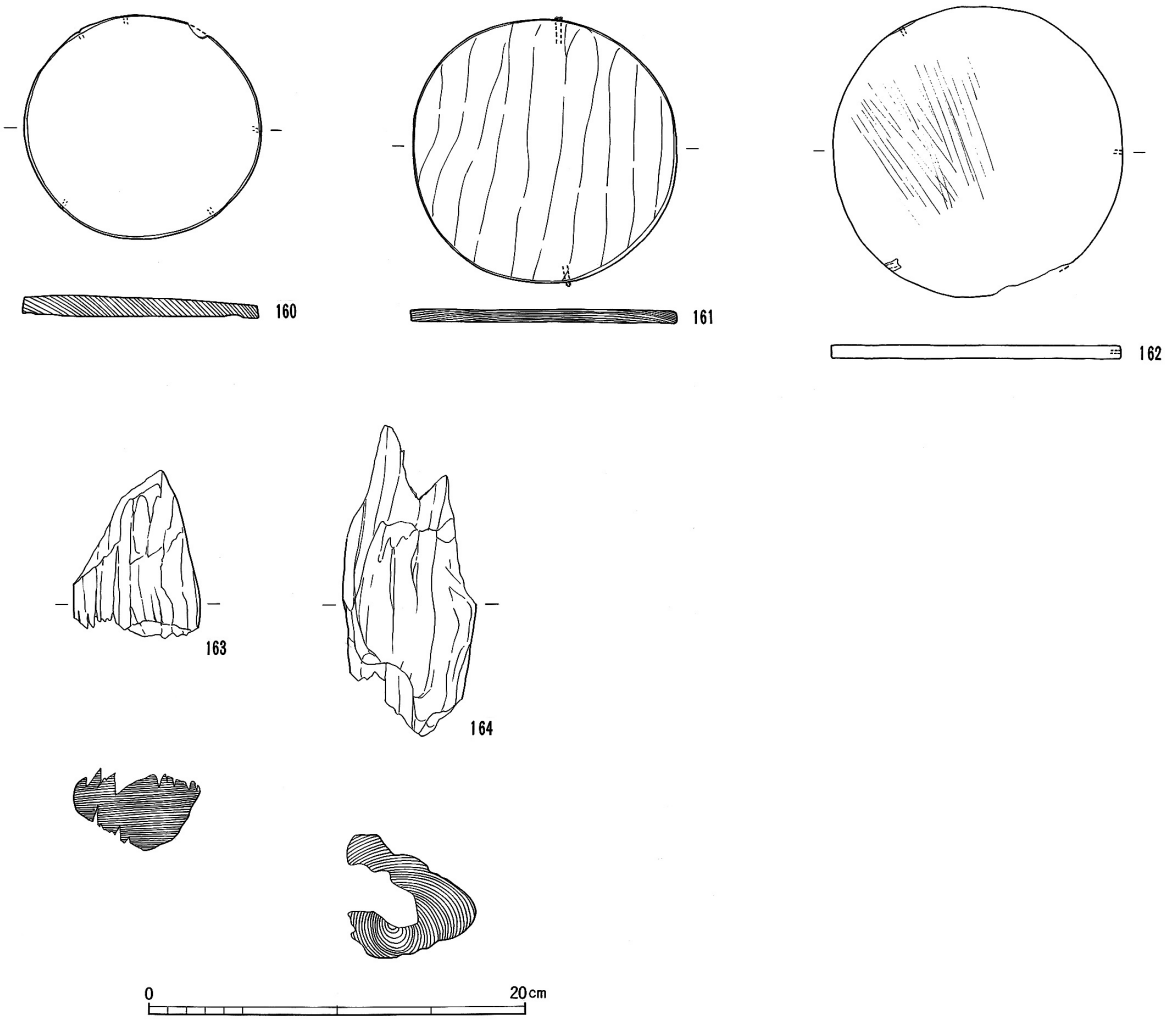


第28図　出土木製品実測図(6)（1：12、155～157は1：4）［ＳＥ611井戸枠材横板・曲物］

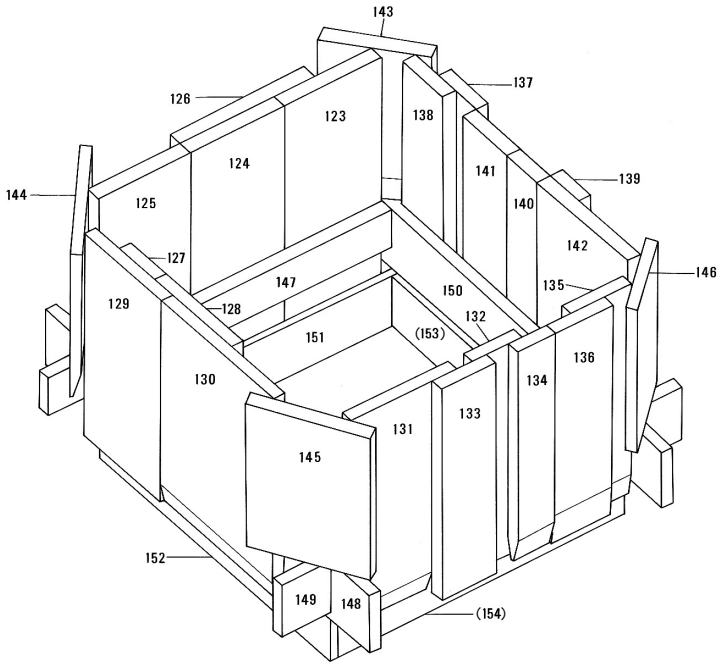




第29図　出土木製品実測図(7)（１：４）［ＳＥ627曲物　158は上段、159は下段］



第30図　出土木製品実測図(8)（１：４）［ＳＥ627、ＳＫ632、小穴］



第31図　ＳＥ611井戸枠模式図

報告番号	登録番号	出土位置遺構	器種	計測値（cm）			成形・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
				口径	器高	底径						
1	029 -01	o 7 S R632	弥生土器 壺	8.9	27.3	4.6	外面ミガキ　櫛描直線文５帯 内面粘土紐痕　オサエ	粗 ～6 mm	並	にぶい黄橙　10Y R 7/4 灰　N 4/0	ほぼ 完形	磨滅
2	032 -01	o 7 S R632	弥生土器 壺		最大径 43.6	7.3	外面ハケメ　縄文施文のち沈線で区画３帯　突帯に刻目	やや密 ～2 mm	並	にぶい黄褐　10Y R 5/3 にぶい褐　2.5 Y R 5/4	体部～ 底部	
3	011 -04	h 5 S K618	弥生土器 高杯			(7.9)	外面ナデ、透孔 内面ナデ、ハケメ	やや密 1 ～2 mm	並	にぶい黄橙　10Y R7/2 灰白　2.5 Y 8/2	脚部片 1/8 残	
4	011 -03	g 3 S D608	弥生土器 蓋	(14.0)			口縁部ヨコナデ　外面オサエ、ナデ、ハケメ　内面ハケメ	やや粗 1 ～2 mm	並	にぶい黄褐　10Y R 7/2 灰白　10Y R 8/2	口縁部 1/8 残	内面に黒斑
5	013 -03	h 7 S D620	弥生土器 壺				外面ヘラ状工具による沈線 内面ナデ	粗 1 ～2 mm	並	灰白　10Y R 8/2 灰白　2.5 Y 8/2	頸部片？	
6	011 -05	k 6 S D620	弥生土器 甕			(7.4)	内外面ナデ	粗 2 ～3 mm	並	にぶい橙　7.5 Y R 7/3 明赤褐　2.5 Y R 5/6	底部片 1/3 残	
7	015 -03	q 8 S A634 P i t 1	須恵器 杯身	(9.8)	(2.7)		ロクロナデ　底部未調整	やや密 ～1 mm	良	灰白　N 7/0	1/9 残	
8	012 -04	o 8 S D615	須恵器 杯蓋	(13.9)	(3.3)		ロクロナデ　天井部外面ヘラ切り未調整	やや粗 1 ～2 mm	並	灰白　N 7/0	1/6 残	
9	012 -01	d 5 S D615	須恵器 台付杯			高台径 (12.6)	ロクロナデ　底部糸切り　高台貼り付け後ナデ	やや密	並	灰白　N 8/0 灰白　2.5 Y 7/1	底部 3/8 残	
10	014 -04	k 2 S B612 P i t 2	土師器 小皿	(10.3)			口縁部ヨコナデ　外面オサエ 内面ナデ	やや密 ～1.5 mm	並	灰白　10Y R 8/2	1/6 残	
11	014 -05	k 2 S B612 P i t 2	黒色土器 椀	(15.4)			口縁部ヨコナデ　外面ミガキ 内面ミガキ	やや密 ～2 mm	並	にぶい橙　5 Y R 7/4 浅黄橙　7.5 Y R 8/3	口縁部 1/4 残	
12	014 -06	k 2 S B612 P i t 2	灰釉陶器 椀			7.6	ロクロナデ　底部糸切り　高台貼り付けの後ナデ	密	並	灰白　2.5 Y 7/1	底部 完存	
13	014 -03	k 2 S B612 P i t 2	磁器 白磁小皿	(13.1)			ロクロナデ　外面に輪花 内外面に釉薬	密	良	灰白　5 Y 8/2	1/12 残	
14	015 -04	o 7 S A631 P i t 3	土師器 小皿	10.4	2.7		口縁部ヨコナデ　外面オサエ・ナデ　内面ナデ	やや密 ～1 mm	並	灰白　10Y R 8/2	ほぼ 完形	
15	004 -07	j 3 S E611	土師器 杯	(12.4)			口縁部ヨコナデ　　外面ナデ 内面ナデ　暗文	やや粗 1 ～2 mm	並	浅黄橙　7.5 Y R 8/6	1/7 残	
16	004 -06	j 3 S E611	土師器 杯	(12.2)	3.0		口縁部ヨコナデ　外面オサエ・ナデ　内面ナデ	やや密	並	灰白　10Y R8/2	1/4 残	
17	004 -05	埋土 S E611	土師器 杯	13.4	3.0		口縁部ヨコナデ　外面オサエ ナデ　内面ナデ	やや粗 1 ～2 mm	並	褐灰　10Y R 5/1 浅黄橙　7.5 Y R 8/3	ほぼ 完形	
18	004 -02	j 3 S E611	土師器 杯	(13.0)	3.2		口縁部ヨコナデ　外面オサエ・ナデ　内面ナデ・暗文	やや密	並	橙　2.5 Y R 6/6 橙　2.5 Y R 7/8	口縁部片	「井」墨書
19	004 -04	第２層 S E611	土師器 甕	(24.0)			口縁部ヨコナデ　外面ナデ　内面ハケメ	やや密	並	灰白　7.5 Y R 8/2	口縁部片	外面に煤付着
20	004 -03	第２層 S E611	製塩土器 鉢				体部オサエ・ナデ	やや粗 1 ～2 mm	並	浅赤橙　2.5 Y R 7/4 にぶい橙　5 Y R 7/4	体部片	志摩式
21	004 -01	埋土 S E611	黒色土器 杯	(13.8)	3.6		口縁部ヨコナデ　外面オサエ・ミガキ　内面ミガキ	やや密	並	灰白　10Y R 8/2 暗灰　N 3/0	1/4 残	「饗」墨書
22	005 -02	j 3 S E611	灰釉陶器 椀			(7.6)	ロクロナデ　底部糸切り　高台貼り付け　内外面に灰釉	やや粗	並	にぶい黄橙　10Y R 7/2	口縁部 1/5 残	
23	003 -01	焼土直Ｓ E611	灰釉陶器 椀	(14.5)	4.3	7.0	ロクロナデ　底部糸切り　高台貼り付け	やや密 ～1.5 mm	並	にぶい黄橙　10Y R 7/2 灰白　10Y R 8/1	1/3 残	
24	005 -01	焼土直 S E611	灰釉陶器 長頸瓶			高台径 8.9	ロクロナデ　底部糸切り　高台貼り付け	やや密	並	灰白　5 Y8/1	底部 完存	
25	005 -08	j 3 S E611	土製品 土錘	残存長 (2.7)	径 1.2		ナデ　穴径 0.3 cm	やや密 1 mm	並	橙　5 Y R 6/6	1/2 残	残重量 2.9g

第４表　出土土器観察表(1)

報告番号	登録番号	出土位置遺構	器種	計測値（cm）			成形・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
				口径	器高	底径						
26	005 -07	ｊ３ ＳＥ611	土製品 土錘	残存長 (3.8)	径 1.2		ナデ　穴径0.25cm	やや密	並	橙　５ＹＲ 6/6	2/3 残	黒斑 残重量 4.0g
27	005 -05	第２層 ＳＥ611	土製品 土錘	長さ 5.3	径 1.6		ナデ　穴径0.3 cm	やや密	並	橙　５ＹＲ 6/6	完形	重量 10.8g
28	005 -06	ｊ３ ＳＥ611	土製品 土錘	長さ 4.4	径 1.6		ナデ　穴径0.5 cm	やや密	並	灰白　2.5 ＹＲ 7/1	ほぼ 完形	残重量 9.5g
29	005 -04	埋土 ＳＥ611	土製品 土錘	残存長 (4.5)	径 1.7		ナデ　穴径0.7 cm	やや密	並	灰　Ｎ 6/0	ほぼ 完形	残重量 12.5g
30	005 -03	ｊ３ ＳＥ611	土製品 土錘	残存長 (4.2)	径 2.3		ナデ　穴径0.8 cm	やや密	並	暗灰　Ｎ 3/0	1/2 残	残重量 10.5g
31	006 -03	埋土 ＳＥ611	石製品 砥石	残存長 (8.0)	幅 5.6	厚さ 1.6	擦り面が凹面状に窪む					粘板岩製 残重量　105g
32	001 -05	ｍ８ ＳＥ627	ﾛｸﾛ 土師器 台付皿	9.3	3.1	4.3	ロクロナデ 底部糸切り	やや密 ～1.5 mm	並	にぶい橙　7.5 ＹＲ 7/3 灰白　2.5 Ｙ 7/1	ほぼ 完形	外面に黒斑
33	015 -05	ｍ８ ＳＥ627	陶器 椀	(15.4)			ロクロナデ 外面にユビによる輪花	密	良	灰白　Ｎ 7/0	口縁部 1/8 残	
34	015 -06	ｍ８ ＳＥ627	陶器 椀	(14.6)	5.7	(8.2)	ロクロナデ 底部糸切り　高台貼り付け	やや密 ～2 mm	良	灰白　５Ｙ 8/1	1/4 残	
35	001 -03	ｍ８ ＳＥ627	陶器 椀	(15.9)			ロクロナデ	やや密	並	灰白　５Ｙ 7/1	口縁部 1/5 残	
36	001 -01	ｍ９ ＳＥ627	陶器 椀			(6.7)	ロクロナデ 底部糸切り　高台貼り付け	密	良	灰白　５Ｙ 7/1 灰白　Ｎ 8/	4/5 残	
37	001 -02	ｍ８ ＳＥ627	陶器 椀			(6.9)	ロクロナデ　底部糸切り 高台貼り付け　籾殻圧痕	やや密	並	灰白　Ｎ 8/	1/3 残	
38	001 -04	ｍ８ ＳＥ627	土師器 手捏ね土器	長さ 5.8	高さ 2.4	最大幅 3.7	左内径2.3 cm　深さ1.8 cm 右内径2.6 cm　深さ1.5 cm	やや密	並	灰白　５Ｙ 7/1 灰　５Ｙ 5/1	完形	
39	008 -04	ｐ５ ＳＫ632	土師器 小皿	(9.5)	1.8		口縁部ヨコナデ　外面オサエ 内面ナデ	やや密	並	浅黄橙　10ＹＲ 8/3 灰白　10ＹＲ 8/2	1/4 残	外面に黒斑
40	008 -01	ｑ５ ＳＫ632	土師器 小皿	(10.3)	1.7		口縁部ヨコナデ　外面オサエ 内面ナデ	やや密	並	浅黄橙　10ＹＲ 8/3	1/3 残	
41	008 -05	ｑ５ ＳＫ632	土師器 小皿	(11.0)	1.7		口縁部ヨコナデ　外面オサエ 内面ナデ	やや密	並	灰白　10ＹＲ 8/2 浅黄橙　10ＹＲ 8/3	1/8 残	
42	008 -03	ｑ５ ＳＫ632	土師器 小皿	(10.4)	1.8		口縁部ヨコナデ　外面オサエ・ ナデ　内面ナデ	やや粗	並	にぶい黄橙　10ＹＲ 7/2 灰白　10ＹＲ 8/2	1/5 残	
43	010 -02	ｑ５ ＳＫ632	土師器 小皿	(10.8)	1.6		口縁部ヨコナデ　外面オサエ・ ナデ　内面ナデ	やや密	並	灰　Ｎ 5/0 灰白　10ＹＲ 8/2	1/12 残	外面に黒斑
44	008 -02	ｑ５ ＳＫ632	土師器 小皿	(10.9)			口縁部ヨコナデ　外面オサエ・ ナデ　内面ナデ	やや密	並	浅黄橙　7.5 ＹＲ 8/3	1/4 残	
45	007 -04	ｑ５ ＳＫ632	黒色土器 椀	14.9	6.3	8.5	口縁部ヨコナデ　内外面ミガキ 高台貼り付け　内面に沈線	やや密	並	にぶい黄橙　10ＹＲ 7/3 暗灰　Ｎ 3/	ほぼ 完形	
46	007 -02	ｑ５ ＳＫ632	灰釉陶器 椀	(14.9)	5.7	7.9	ロクロナデ　高台貼り付け 底部糸切り　漬け掛け	やや密	並	灰白　５Ｙ 7/1	3/4 残	019-01と接合
47	007 -01	ｑ５ ＳＫ632	灰釉陶器 椀	15.3	5.1	7.3	ロクロナデ　高台貼り付け 底部糸切り　漬け掛け	やや密 ～1 mm	並	黄灰　2.5 Ｙ 6/1 灰黄　2.5 Ｙ 6/2	7/8 残	
48	002 -01	ｑ５ ＳＫ632	須恵器 転用硯	長さ 22.0	幅 15.0	厚1.1 ～1.3	甕体部内面を硯に使用	やや密	並	灰　Ｎ 4/ 暗灰　Ｎ 3/	22×15cm	内面全体に墨痕
49	007 -03	ｈ５ ＳＫ617	陶器 椀			(8.4)	ロクロナデ 底部糸切り　高台貼り付け	やや密	並	灰白　５Ｙ 7/1	底部 1/3 残	
50	012 -05	ｅ２ ＳＤ603	陶器 壺	(12.7)			ロクロナデ 外面に自然釉	密	並	灰白　2.5 Ｙ 8/1	口縁部 1/6 残	
51	012 -07	ｊ１ ＳＤ606	施釉陶器 丸碗			(4.8)	ロクロナデ　高台削り出し 内外面に錆釉	やや密	並	灰白　５Ｙ 8/1	底部 1/4 残	
52	029 -02	ｐ７ Ｐｉｔ４	弥生土器 壺			9	内外面ハケメ	粗 ～4 mm	並	橙　５ＹＲ 6/6 にぶい橙　５ＹＲ 6/4	体部片	外面に黒斑 磨滅が顕著

第５表　出土土器観察表(2)

報告番号	登録番号	出土位置遺構	器種	計測値（cm）			成形・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
				口径	器高	底径						
53	028 -04	ｐ６ Ｐit5	弥生土器 甕				口縁端部に刻目　口縁部内外面にハケメ　外面に櫛描直線文	やや粗 ～3 mm	並	灰褐　7.5 ＹＲ 4/2	口縁部片	
54	014 -02	ｈ６ Ｐit6	弥生土器 甕			(3.9)	外面ハケメ 内面ナデ	粗 ～2.5 mm	並	褐灰　５ＹＲ 4/1 灰白　10ＹＲ 8/1	底部 完存	
55	014 -01	ｅ２ Ｐit7	土師器 高杯				外面オサエ・ナデ 内面ナデ	やや密 ～1 mm	並	にぶい褐　7.5 ＹＲ 6/3 灰白　10ＹＲ 8/2	受部～ 脚部片	
56	015 -01	ｋ５ Ｐit８	土師器 高杯				外面板ナデ 内面シボリメ	やや密 ～2 mm	並	にぶい橙　５ＹＲ 6/4	脚部一部 欠	
57	014 -07	ｋ２ Ｐit９	土師器 甕	(20.4)			口縁部ヨコナデ　体部外面ハケメ	やや密 ～2 mm	並	にぶい黄橙　10ＹＲ 7/3	口縁部片 1/10 残	
58	015 -02	ｑ５ Ｐit10	陶器 椀	(15.6)			ロクロナデ	やや密 ～1 mm	良	灰白　Ｎ 8/0	底部 1/7 残	
59	013 -01	ｅ２ ＳＤ603	縄文土器 深鉢				外面沈線より上ナデ　下ケズリ 内面ナデ　ニ枚貝による条痕	粗 1 ～2 mm	並	褐灰　10ＹＲ 4/1	体部片	
60	013 -02	ｇ６ ＳＤ615	縄文土器 深鉢				外面ナデ　素文突帯 内面ナデ	粗 1 ～2 mm	並	灰白　2.5 Ｙ 8/2 灰白　2.5 Ｙ 7/1	口縁部片	
61	022 -03	ｊ５ 包含層	弥生土器 壺				外面に板状工具による段 内面ナデ	粗 ～3 mm	並	にぶい黄橙　10ＹＲ 7/3 黄灰　2.5 Ｙ 5/1	口縁部片	
62	021- 04	ｉ５ 包含層	弥生土器 壺				外面に削り出し突帯 内面ナデ	やや粗 ～3.5 mm	並	橙　５ＹＲ 6/6 にぶい黄橙　10ＹＲ 7/2	体部片	
63	016 -03	ｇ３ 包含層	弥生土器 壺				外面に沈線２条 内面ナデ	やや粗 ～1.5 mm	並	にぶい黄橙　10ＹＲ 7/3 灰黄　2.5 ＹＲ 7/2	体部片	
64	006 -01	ｊ３ ＳＥ611	弥生土器 壺				外面櫛描直線文を沈線で区画 内面オサエ・ナデ	やや粗 ～1 mm	並	褐灰　7.5ＹＲ 4/1 褐灰　10 ＹＲ 5/1	体部片	
65	006 -02	第２層 ＳＥ611	弥生土器 壺				外面櫛状具による刺突文 内面ナデ	粗 ～1.5 mm	並	灰白　2.5 Ｙ 8/1	体部片	
66	001 -06	ｍ８ ＳＥ629	弥生土器 甕	(20.8)			外面ナデ　櫛描直線文　内面ナデ、ハケメ　焼成前の円孔２個	やや粗 ～2 mm	並	灰黄　2.5 Ｙ 6/2	口縁部 1/10 残	
67	025 -03	ｏ７ 包含層	弥生土器 甕				口縁端部に刻目　外面にハケメ 口縁部内面にナデ　ハケメ	粗 ～4 mm	並	灰褐　7.5 ＹＲ 5/2 にぶい橙　５ＹＲ 6/4	口縁部片	
68	024 -06	ｍ６ 包含層	弥生土器 甕				口縁端部に刻目　口縁部内外面にハケメ　外面に櫛描直線文	粗 ～1.2 mm	並	褐　7.5 ＹＲ 4/3 にぶい橙　7.5 ＹＲ 6/4	口縁部片	
69	025 -05	ｏ７ 包含層	弥生土器 甕				口縁端部及び下端部に刻目　外面に櫛描直線文	粗 ～2 mm	並	灰褐　7.5 ＹＲ 6/2 浅黄橙　7.5 ＹＲ 8/3	口縁部片	外面に黒斑
70	024 -03	ｌ２ 包含層	弥生土器 甕			(6.4)	底部外面ハケメ　内面オサエ・ナデ	粗	並	橙　５ＹＲ 6/6 にぶい橙　7.5 ＹＲ 6/4	底部 2/3 残	
71	011 -06	ｇ６ ＳＤ615	土師器 高杯				外面ミガキ　内面ナデ 透孔は３方	やや密 1 ～2 mm	並	橙　５ＹＲ 7/6 にぶい橙　５ＹＲ 7/4	脚部片	
72	023 -04	ｋ６ 包含層	土師器 高杯				透孔は３方	やや粗 1 ～1.5 mm	並	橙　7.5 ＹＲ 7/6	脚部片	磨滅が著しい
73	018 -06	ｈ７ 包含層	土師器 台付甕				口縁部ヨコナデ　内面ナデ	やや粗 ～2.5 mm	並	浅黄橙　7.5 ＹＲ 8/3	口縁部片	黒斑 磨滅が著しい
74	025 -01	ｎ７ ＳＫ634	須恵器 杯蓋	(14.2)	3.4		ロクロナデ　天井部ロクロケズリ	やや密 ～1.5 mm	良	灰　Ｎ 6/0	1/7 残	
75	020 -02	ｉ７ 包含層	須恵器 杯身	(12.7)			ロクロナデ　底部ロクロケズリ	やや粗 ～3 mm	並	灰　7.5 Ｙ 5/1	口縁部～ 体部片	
76	018 -05	ｈ６ 包含層	土師器 杯	(8.0)	2.8		口縁部ヨコナデ　外面ナデ　内面ミガキ	やや粗 ～3 mm	並	にぶい黄橙　10ＹＲ 7/4 橙　５ＹＲ 7/6	1/3 残	
77	011 -01	ｅ２ ＳＤ603	土師器 皿	(20.2)			口縁部ヨコナデ	やや密	並	浅黄橙　10ＹＲ 8/3	口縁部 1/6 残	磨滅が著しい
78	022 -01	ｊ７ 包含層	土師器 甕	(10.8)			口縁部ヨコナデ　体部外面ハケメ　内面ケズリ	やや粗 ～２mm	並	にぶい褐　7.5 ＹＲ 5/3 灰褐　7.5 ＹＲ 4/2	1/4 残	
79	020 -03	ｉ６ 包含層	須恵器 杯	10.0	3.2		ロクロナデ　底部ヘラ切り未調整	やや粗 ～3 mm	並	灰　10Ｙ 6/1	2/3 残	

第６表　出土土器観察表(3)

報告番号	登録番号	出土位置遺構	器種	計測値（cm）			成形・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
				口径	器高	底径						
80	009 -03	f 4 (SK7)	須恵器 高杯	10.0	7.7	7.7	ロクロナデ　脚端部外面に沈線 脚部貼り付け	やや密	良	灰　N 6/ 灰　N 4/	杯部 1/2 欠	取り上げ時 ＳＫ７
81	018 -04	h 6 包含層	須恵器 杯蓋				天井部ロクロケズリ　宝珠つまみ貼り付け後ナデ	やや密 ～1 mm	並	灰白　５Ｙ 7/1 黄白　2.5 Ｙ 6/1	天井部 完存	
82	020 -01	i 6 包含層	土師器 鉢	残存長 7.0		7.5	ロクロナデ　底部外面工具によるナデ　棒状工具による刺突	やや密	並	灰白　５Ｙ 7/1 浅黄橙　10ＹＲ 8/3	底部 1/3 残	
83	020 -05	i 8 包含層	ﾛｸﾛ 土師器 台付小皿			(4.9)	ロクロナデ 底部糸切り	やや密 ～1 mm	並	浅黄橙　7.5 ＹＲ 8/4	底部 1/2 残	
84	025 -02	o 6 包含層	ﾛｸﾛ 土師器 小皿	(10.8)			ロクロナデ 底部糸切り	やや密 ～1 mm	並	橙　５ＹＲ 6/6 にぶい橙　５ＹＲ 7/4	1/2 残	黒斑
85	017 -01	g 6 包含層	土師器 杯	(12.8)	3.0		口縁部ヨコナデ　内外面ミガキ	やや密	並	橙　５Ｙ 6/6 橙　５Ｙ 7/6	1/3 残	
86	022 -05	j 7 包含層	土師器 杯	(13.5)	3.0		口縁部ヨコナデ　外面オサエ・ナデ　内面ナデ	粗 ～2.2 mm	並	淡黄橙　7.5 ＹＲ 8/4	3/4 残	022-4・022-6 と接合
87	016 -06	g 6 包含層	土師器 杯	(13.9)			口縁部ヨコナデ　外面オサエ・ナデ　内面ナデ	やや粗	並	にぶい黄橙　10ＹＲ 7/3	1/5 残	
88	018 -02	h 6 包含層	土師器 皿	(15.8)			口縁部ヨコナデ　外面オサエ・ナデ　内面ナデ	やや密	並	橙　５ＹＲ 6/6 にぶい褐　7.5 ＹＲ 5/3	1/6 残	
89	018 -01	h 6 包含層	土師器 皿	(15.8)			口縁部ヨコナデ　外面オサエ・ナデ　内面ナデ	やや密	並	灰　５Ｙ 5/1 橙　５ＹＲ 6/6	1/5 残	
90	018 -03	h 6 包含層	土師器 皿	(17.9)	(2.2)		口縁部ヨコナデ　外面オサエ・ナデ　内面ナデ	やや密	並	橙　５ＹＲ 6/6 橙　５ＹＲ 7/6	1/4 残	
91	028 -01	h 7 包含層	土師器 甕	(21.6)			口縁部ヨコナデ　口縁部内面ハケメ　体部外面ハケメ	やや粗 ～2 mm	並	にぶい橙　7.5 ＹＲ 7/4	口縁部 1/3 残	
92	017 -02	g 6 包含層	土師器 甕	(21.6)			口縁部ヨコナデ　体部外面ハケメ　内面ナデ	やや密 ～1.5 mm	並	橙　５ＹＲ 7/6 浅黄橙　10ＹＲ 8/3	口縁部 1/6 残	
93	022 -02	j 7 包含層	土師器 甕	(24.2)			口縁部ヨコナデ　内外面ナデ	やや粗 ～3 mm	並	浅黄橙　7.5 ＹＲ 8/3 橙　５ＹＲ 6/6	口縁部 1/10 残	
94	017 -06	h 6 包含層	土師器 甕	(19.2)			口縁部ヨコナデ　体部内外面ハケメ	やや粗 ～1.5 mm	並	にぶい橙　7.5 ＹＲ 7/4	口縁部 1/8 残	
95	017 -04	g 6 包含層	製塩土器 鉢	(14.8)	6.2	(14.6)	ヨコナデ　体部内面ナデ 体部外面オサエ・ナデ	粗 ～5 mm	並	明赤褐　2.5 ＹＲ 5/6 橙　2.5 Ｙ 6/6	1/9 残	志摩式
96	017 -03	g 6 包含層	黒色土器 杯	(14.8)			口縁部ヨコナデ　体部内外面ミガキ	やや密	並	褐灰　7.5 ＹＲ 4/1 褐灰　10 ＹＲ 4/1	口縁部 ～体部	
97	021 -01	i 7 包含層	黒色土器 椀			(5.9)	ロクロナデ 高台貼り付け	やや密	並	浅黄橙　10ＹＲ 8/3 灰　５Ｙ 4/1	底部 1/3 残	
98	020 -06	i 7 包含層	黒色土器 椀			(6.3)	ロクロナデ 高台貼り付け	やや密 ～1 mm	並	灰白　10ＹＲ 8/2	底部 1/5 残	
99	019 -02	i 8 包含層	灰釉陶器 椀			6.8	ロクロナデ 底部糸切り　高台貼り付け	やや密 ～1.5 mm	並	灰白　2.5 Ｙ 7/1	底部 1/3 残	
100	019 -03	i 7 包含層	灰釉陶器 椀			6.6	ロクロナデ 底部糸切り　高台貼り付け	やや密 ～3 mm	並	灰白　５Ｙ 7/1	底部 1/4 残	
101	019 -07	i 8 包含層	灰釉陶器 段皿				ロクロナデ　高台貼り付け	やや密 ～1.5 mm	並	灰白　５Ｙ 8/1	体部片	
102	022 -07	j 7 包含層	灰釉陶器 長頸瓶			(9.4)	ロクロナデ 高台貼り付け	密 ～1.2 mm	並	灰白　N 8/ 灰白　N 7/	底部 1/2 残	
103	023 -02	i 8 包含層	灰釉陶器 八花硯			厚さ 2.4	陸部と海部の境に断面台形状の内堤	密	並	褐灰　10ＹＲ 5/1 灰白　7.5 ＹＲ 8/1	8.9 × 9.4 cm	
104	020 -04	i 7 包含層	緑釉陶器 椀			(6.6)	ロクロナデ　体部外面削り 底部内面・体部外面に緑釉	やや密 ～1 mm	並	浅黄橙　10ＹＲ 8/3	底部 1/4 残	
105	019 -04	i 8 包含層	陶器 椀			7.0	ロクロナデ 底部糸切り　高台貼り付け	やや密 ～1.5 mm	並	灰黄　2.5 Ｙ 7/2	底部 1/3 残	
106	019 -05	i 8 包含層	陶器 椀			(6.1)	ロクロナデ 底部糸切り　高台貼り付け	やや粗 ～3 mm	並	灰白　2.5 Ｙ 8/1	底部 1/5 残	

第７表　出土土器観察表(4)

報告番号	登録番号	出土位置遺構	器種	計測値（cm）			成形・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
				口径	器高	底径						
107	023 -07	ｋ８ 包含層	陶器 椀			7.6	ロクロナデ 底部糸切り　高台貼り付け	やや粗 ～1 mm	良	灰白　N 8/	底部 1/4 残	024-02と接合
108	024 -04	ｌ８ 包含層	陶器 椀			7.0	ロクロナデ 底部糸切り　高台貼り付け	やや粗 ～3 mm	並	灰白　N 8/	底部 完存	
109	021 -05	ｉ８ 包含層	土製品 土製支脚？			径3.9 ～4.2	ナデ	やや密 ～8 mm	並	灰黄褐　10ＹＲ 5/2		
110	010 -03	ｑ５ ＳＫ632	石製品 砥石			厚さ 3.2	溝状の使用痕				7.6 × 6.6 cm	砂岩製 重量 170ｇ
111	016 -04	ｇ５ 包含層	陶器 加工円盤			厚さ 0.9	天目茶碗を円形加工円盤として利用	やや密	並	黒　10ＹＲ 2/1 灰黄　2.5 Ｙ 7/2	2.9 × 3.0 cm	
112	016 -05	ｇ５ 包含層	磁器 染付碗			3.8	ロクロナデ 外面にコバルト釉	やや密	不良	灰白　2.5 Ｙ 8/1	高台部 完存	染付の発色不良　瀬戸産？
113	017 -05	ｈ５ 包含層	磁器 染付碗	(10.2)			ロクロナデ 外面に呉須による筆描き	密	良	明緑灰　7.5 ＧＹ 8/1 灰白　2.5 ＧＹ 8/1	口縁部 1/4 残	肥前波佐見焼 くらわんか手
114	024 -05	ｋ７ 包含層	磁器 染付碗	8.3	5.6	2.8	ロクロナデ 外面にコバルト釉で型紙刷り	密	良	灰白　N 8/	1/2 残	瀬戸・美濃産
115	023 -05	ｋ７ 包含層	磁器 端反碗	5.2	2.7	2.2	ロクロナデ 外面にコバルト釉で型紙刷り	密	並	灰白　N 8/	1/4 残	瀬戸・美濃産
116	023 -06	ｋ７ 包含層	磁器 仏飯具			3.2	ロクロナデ 外面に錆釉	密	並	灰白　N 8/	脚部 完存	瀬戸・美濃産
117	016 -02	ｊ１ 包含層	土製品 土錘	残存長 (2.7)	径 0.8		ナデ　穴径0.3 cm	やや密	並	にぶい橙　7.5 ＹＲ 6/4	1/2 残	残重量 1.4ｇ
118	016 -01	ｊ１ 包含層	土製品 土錘	残存長 (3.7)	径 0.9		ナデ　穴径0.3 cm	やや密	並	浅黄橙　7.5 ＹＲ 8/4 にぶい橙　7.5 ＹＲ 7/4	ほぼ 完形	残重量 2.2ｇ
119	017 -07	ｈ６ 包含層	土製品 土錘	長さ 6.2	径 1.1		ナデ　穴径0.3 cm	やや密	並	灰黄褐　10ＹＲ 4/2	完形	重量 5.5ｇ
120	012 -06	ｇ１ ＳＤ603	土製品 土錘	長さ 5.7	径 1.1		ナデ　穴径0.4 cm	やや密	並	淡黄　2.5 Ｙ 8/3	完形	黒斑 重量　5.0g
121	021 -07	ｉ７ 包含層	土製品 土錘	残存長 (3.8)	径 1.5		ナデ　穴径0.3 cm	やや粗 ～3 mm	並	にぶい褐　7.5 ＹＲ 5/4	1/2 残	残重量 8.2ｇ
122	021 -06	ｊ７ 包含層	土製品 土錘	長さ 4.3	径 1.4		ナデ　穴径0.35cm	やや密 ～1 mm	並	にぶい黄橙　10ＹＲ 7/2	完形	重量 7.8ｇ

第８表　出土土器観察表(5)

報告番号	登録番号	出土位置遺構	名称	最大計測値（cm）			調整技法	木取り	備考
				長さ	幅	厚さ			
123	047 -01	ｍ８ ＳＥ611	縦板 西１　No. 7	(74.7)	35.7	5.5	木口を手斧によるハツリにより尖らせる。 表に手斧痕。上部は腐食。	板目	
124	050 -01	ｍ８ ＳＥ611	縦板 西２　No. 8	(72.0)	32.4	4.3	木口を手斧によるハツリにより尖らせる。 裏に中央から木口に向かい手斧痕。上部は腐食。	板目	
125	043 -01	ｍ８ ＳＥ611	縦板 西３　No. 9	(66.5)	33.0	4.0	木口を手斧によるハツリにより尖らせる。 表裏に手斧痕。上部は腐食。	板目	
126	048 -01	ｍ８ ＳＥ611	縦板 西４　No. 6	(50.2)	67.4	4.0	表裏に中央から木口に向かい手斧痕。 木口を切断。上部は腐食。	板目	
127	067 -01	ｍ８ ＳＥ611	縦板 南１　No. 13	(81.7)	15.9	2.1	木口を切断。切断の工具は不明。上部は腐食。	板目	
128	044 -01	ｍ８ ＳＥ611	縦板 南２　No. 14	(64.5)	34.4	4.4	木口を手斧によるハツリにより尖らせる。 表裏に手斧痕。上部は腐食。	板目	
129	046 -01	ｍ８ ＳＥ611	縦板 南３　No. 11	(61.3)	34.0	3.5	木口を手斧によるハツリにより尖らせる。 表裏に手斧痕。上部は腐食。	板目	
130	069 -01	ｍ８ ＳＥ611	縦板 南４　No. 12	(65.3)	40.9	4.7	木口を手斧によるハツリにより尖らせる。 表裏に手斧痕。表に工具痕か。上部は腐食。	板目	

第９表　出土木製品観察表(1)

報告番号	登録番号	出土位置遺構	名称	計測値（cm）			調整技法	木取り	備考
				長さ	幅	厚さ			
131	049 -01	m８ ＳＥ611	縦板 東１　No.16	(73.0)	37.2	4.5	木口を斜方に切断の後、両面を手斧によるハツリにより尖らせる。 表裏および側面に手斧のハツリ痕。上部は腐食。	板目	
132	072 -01	m８ ＳＥ611	縦板 東２　No.18	(77.8)	21.3	2.6	一方の木口を切断。裏に工具痕。上部は腐食。	板目	
133	055 -01	m８ ＳＥ611	縦板 東３　No.17	(69.9)	22.9	5.3	木口に手斧のハツリ痕。上部は腐食。	板目	
134	071 -01	m８ ＳＥ611	縦板 東４　No.19	(69.1)	16.6	5.4	中央やや木口よりに切り込み。 表裏に手斧痕。上部は腐食。	板目	転用材か。
135	051 -01	m８ ＳＥ611	縦板 東５　No.21	(76.1)	20.2	5.0	木口を手斧によるハツリにより尖らせる。 表裏に手斧痕。上部は腐食。	追柾目	
136	057 -01	m８ ＳＥ611	縦板 東６　No.20	(44.4)	20.9	3.9	木口を手斧によるハツリにより尖らせる。 表裏に手斧痕。上部は腐食。	板目	
137	066 -01	m８ ＳＥ611	縦板 北２　No.３	(76.8)	23.3	6.7	片面に中央部から木口にむかい手斧によるハツリ痕。上部腐食欠損。	板目	約８cm×約４cmの孔
138	064 -01	m８ ＳＥ611	縦板 北１　No.４	(94.0)	16.2	4.5	木口を手斧によるハツリにより尖らせる。 先端部は欠損。上部腐食欠損。	板目	
139	060 -01	m８ ＳＥ611	縦板 北６　No.33	(38.4)	12.5	5.8	木口を手斧によるハツリにより尖らせる。 上部は腐食。	追柾目	
140	056 -01	m８ ＳＥ611	縦板 北４　No.１	(66.8)	21.1	4.8	表裏に手斧によるハツリ痕。両側面中央に切り込み。上部は腐食。	板目	転用材か。
141	074 -01	m８ ＳＥ611	縦板 北３　No.２	(115.5)	20.5	8.7	木口を手斧によって尖らせる。片面に手斧によるハツリ痕。上部は腐食。	板目	
142	062 -01	m８ ＳＥ611	縦板 北５　No.24	(82.0)	40.5	3.5	上部は腐食。	追柾目	
143	058- 01	m８ ＳＥ611	隅板 北西１No.５	(34.8)	39.5	4.7	木口を手斧によるハツリにより尖らせる。 表に手斧痕。上部は腐食。	追柾目	
144	045 -01	m８ ＳＥ611	隅板 南西４No.10	(50.5)	37.6	4.3	木口の手斧により断面斜めにハツリ痕。 片面は手斧による調整痕。上部は腐食。	板目	
145	053 -01	m８ ＳＥ611	隅板 南東３No.15	(43.7)	23.7	4.5	両面に手斧痕。上部と下部は腐食。	追柾目	
146	054 -01	m８ ＳＥ611	隅板 北東２No.23	(43.1)	24.9	4.2	木口を切断。腐食が著しい。	板目	
147	073 -01	m８ ＳＥ611	横板 西２　No.26	130.0	11.9	5.7	両木口に角枘。	板目	
148	077 -01	m８ ＳＥ611	横板 南３　No.28	(151.2)	19.3	5.9	片木口を切断。枘穴と側面上下２か所に切り込み。	板目	
149	075 -01	m８ ＳＥ611	横板 東４　No.31	(144.6)	17.7	6.2	木口近くに同じ側面に切り込み。 表裏に手斧痕。	追柾目	
150	076 -01	m８ ＳＥ611	横板 北１　No.25	(158.5)	19.2	6.0	下端部の両面を手斧によるハツリにより尖らす。 枘穴と２か所に切り込み。	板目	
151	061 -01	m８ ＳＥ611	横板 西６　No.27	(115.3)	17.5	2.2	片木口はオレ。	板目	
152	068 -01	m８ ＳＥ611	横板 南７　No.29	(115.1)	16.2	1.9	両木口はオレ。	板目	
153	065 -01	m８ ＳＥ611	横板 北５　No.32	(112.3)	14.7	1.6	剥離痕をそのまま残すか。？ 片木口はオレ。	板目	
154	070 -01	m８ ＳＥ611	横板 南西８No.30	(112.2)	15.8	1.9	片木口はオレ。	板目	木口近くに約1.5 cm四方の孔。

第10表　出土木製品観察表(2)

報告番号	登録番号	出土位置遺構	名称	計測値（cm）			調整技法	木取り	備考
				径	器高	厚さ			
155	039 -01	ｊ３ Ｓ611	曲物底板			0.8		追柾目	
156	040 -01	ｊ３ Ｓ6111	曲物 No.34	16.1	6.1	側 0.3 底 0.6	側板を樺紐で１か所結合する。 底板を側板に木釘３か所で固定する。		
157	039 -02	ｊ３ ＳＥ611	曲物	20.2	7.2	側0.3 ～0.4 底0.7	箍が１段めぐる。 側板に木釘７か所。	底板は柾目 ～追柾目	完形。 箍幅1.5 ～1.7 cm、厚さ0.2 cm。 １/３ 欠損
158	033 -01	ｍ８ ＳＥ627	曲物側板	52.5～ 55.0	44.0	0.6 ～ 0.7	本体は樺紐による結合。本体に箍が４段めぐる。 本体と箍との間にヘギ板を四方に４枚挟む。		上段から箍幅7.5～8.0 cm、厚さ0.4 cm。箍幅7.8 cm、厚さ0.4 cm。箍幅7.8～8.0 cm、厚さ0.4 cm。箍幅4.9～5.2 cm、厚さ0.3 cm。
159	042 -01	ｍ８ ＳＥ627	曲物側板	41～ 53?	35.3	0.6	上段の箍は本体と４か所で結合する。 下段の箍は本体と１か所および木釘１か所で結合する。		上段の箍幅5.8～6.2 cm、厚さ0.4 cm。下段の箍幅4.0～4.5 cm、厚さ0.4 cm。下段の箍には本体と共に径0.9～1.2 cm の孔が22か所認められる。
160	036 -02	ｍ８ ＳＥ627	曲物底板	11.5～ 12.9		0.65～ 10.1	木釘の痕跡が５か所に見られる。	追柾目	
161	036 -01	ｍ８ ＳＥ627	曲物底板	13.9		0.7	木釘が３か所に、痕跡が１か所に見られる。	柾目	
162	040 -02	ｐ５ ＳＫ632	曲物底板	15.3		0.6	木釘の痕跡が３か所に見られる。	柾目	

第11表　出土木製品観察表(3)

報告番号	登録番号	出土位置	名称	最大計測値（cm）			調整技法	木取り	備考
				長さ	幅	厚さ			
163	041 -01	ｊ４ ＳＢ612 Ｐit11	柱根	(9.0)	(6.7)		調整技法は不明。	柾目	腐食が著しい。サワラ材 ＳＢ12の柱材
164	041 -02	ｊ４ Ｐit12	柱根	(16.5)	(6.8)		調整技法は不明。	芯材	腐食が著しい。カヤ材

第12表　出土木製品観察表(4)

［遺物観察表および木製品観察表の凡例］
○　報告番号は、遺物番号および図版番号と同一である。
○　登録番号は、遺物実測図番号を示す。
○　出土位置は、上段に出土した調査区、下段に出土した遺構等を表す。
○　器種の上段は種別、下段は形態である。なお、形態は見た目である。また木製品は、名称に取り上げ時の番号も記した。
○　計測値で、（　）は反転復元による推定値である。欠損部があるものは、現存部の長さを残存長として記した。なお、木製品は最大計測値を記した。
○　調整技法は、主な事柄を記した。
○　胎土は、密、やや密、やや粗、粗の四段階で記した。下段の数値は、砂粒の大きさを表す。
○　焼成は、良、並、不良の三段階で記した。
○　色調は、『新版標準土色帖』に準拠した。上段は外面、下段は内面を表す。
○　残存度は、表せるものは分数で記した。分数で表せないものは言葉で記した。
○　備考は、その他の特徴を記した。柱根の樹種鑑定については（財）元興寺文化財研究所　保存科学センターの分析による。

Ⅳ　替田遺跡（Ｇ地区）の成果

１　層序

基本的な層序は、第１層：耕作土・盛土、第２層：褐灰色砂質土、第３層：灰色砂質土および灰白色シルトである。遺構検出は、第３層の灰色及び灰白色土の上面である。遺物包含層は第２層の褐灰色土層である。以下に主な遺構について述べる。

２　遺構

(1)　古墳時代の遺構（第33図）

溝

ＳＤ708　　ｕ11からｗ13グリッドで検出した東西溝である。幅約6.8～9.0mで、検出面からの深さ４～23cmである。埋土は灰褐色粘質土である。出土遺物には土師器高杯、須恵器杯蓋などの細片がある。古墳時代後期である。

ＳＫ709　　ｘ13・ｘ14グリッドで検出した土坑で、長さ約1.8m、幅約0.7～1.5m、検出面からの深さ22～29cmの土坑である。出土遺物には土師器高杯や赤褐色を帯びた須恵器杯身などの細片がある。時期は古墳時代後期である。

ＳＤ711　　ｙ15からｙ18グリッドで検出した南北溝である。残念ながら南半部分のみである。幅約0.2～0.4mで、検出面からの深さ５～９cmである。出土遺物は土師器細片のみであるが、層位から古墳時代後期頃である。

ＳＤ713　　ｙ19・ｚ19グリッドで、古墳時代後期のＳＤ714の下から検出した東西溝である。幅約2.4～3.6m、検出面からの深さは11～26cmである。埋土は灰白色粗砂で、僅かな自然木を除き出土した遺物はない。層位から古墳時代より古い時代の溝と考えられ、弥生時代の溝の可能性もある。

ＳＤ714　　ｚ17からｙ22グリッドで検出した東西溝である。幅約15～16mの大きな溝で、検出面からの深さは45～55cmである。溝底は平坦である。埋土は褐灰色粘土である。出土遺物には、須恵器杯蓋・杯身片などのほか、台付甕片などがある。時期は古墳時代後期である。

ＳＫ715　　z21・z22グリッドで検出した土坑で、長さ約2.0m、幅約1.2mの不定形な土坑で、検出面からの深さ約８cmである。出土遺物には須恵器杯身片などの細片がある。古墳時代後期であろう。

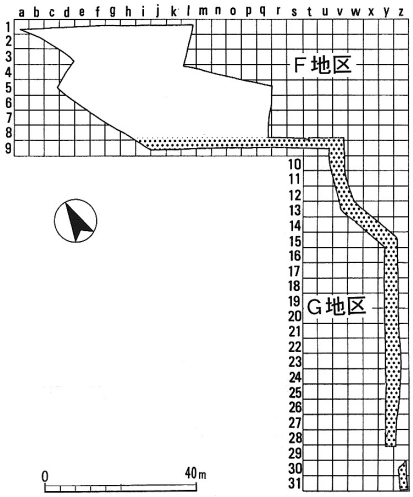
(2)　飛鳥から平安時代の遺構（第33・36図）

Ａ　土坑

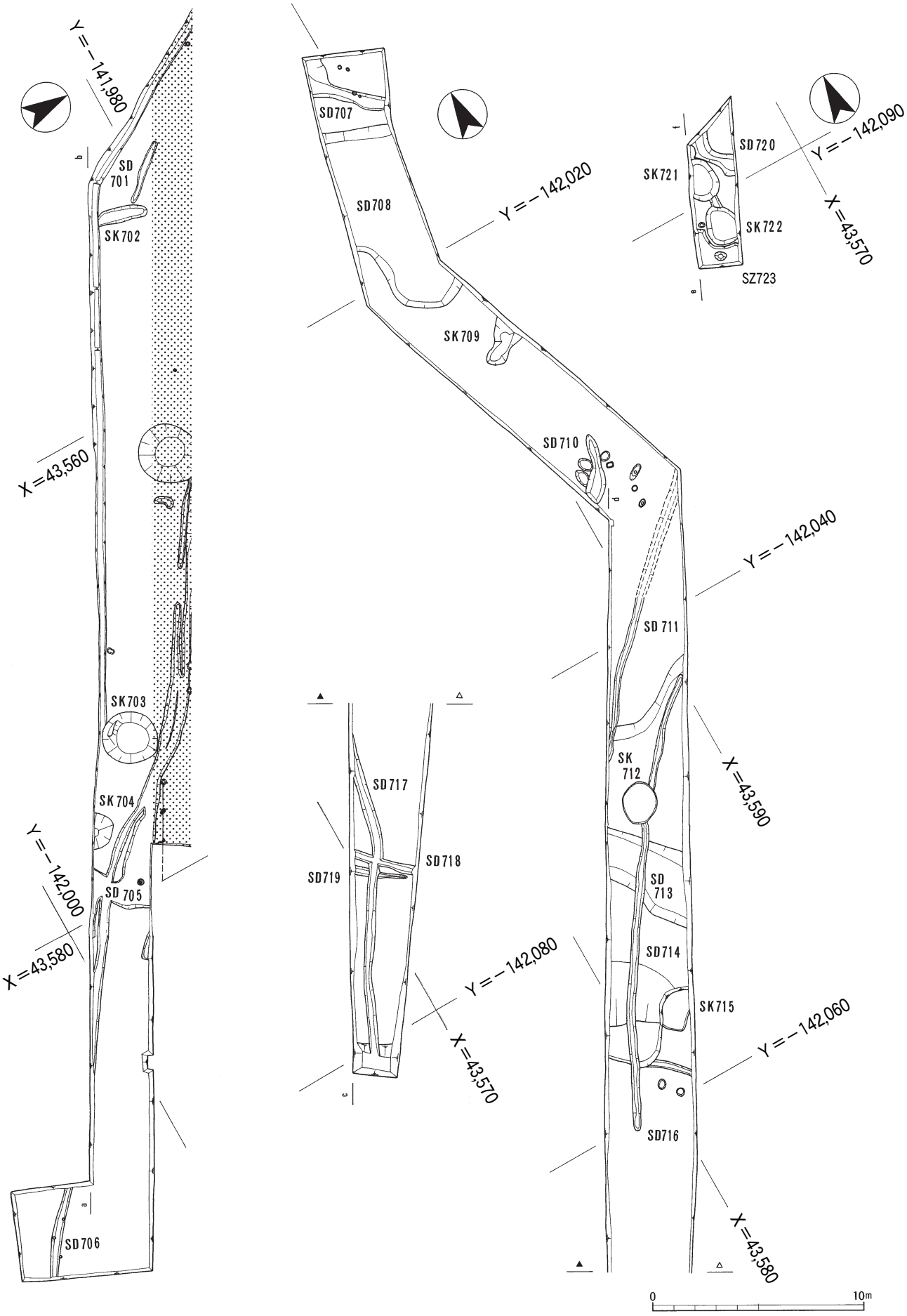
ＳＫ703　　ｐ７・ｐ８グリッドで検出した径約2.4～2.6mの南北に少し長い円形を呈する土坑である。検出面からの深さ約0.8mである。深さが浅いことから土坑としたが、水汲み場かもしれない。埋土は、灰褐色系および灰色系の砂質シルトと暗青灰褐色系粘質土に分けられる。出土遺物は、土坑の中央部底から、約18cmほど浮いた状態で小型の曲物（22)と土師器杯(3)が出土した。また曲物の下からは、ロクロ土師器小皿(2)が完形で出土した。土坑の西壁際でも曲物(23・24)が出土している。この他にも黒色土器(4)、土錘(5)などが出土している。出土遺物から平安時代後期である。

Ｂ　溝

ＳＤ705　　ｑ８からｒ９で検出した、西から南にまがり、東に方向を変える溝である。Ｆ地区のＳＤ616から続く溝と考えられる。溝幅は最も狭いところで0.9m、調査区の南壁際で3.2mと広がる。検出面からの深さは５～13ｃｍと浅い。出土遺物には須

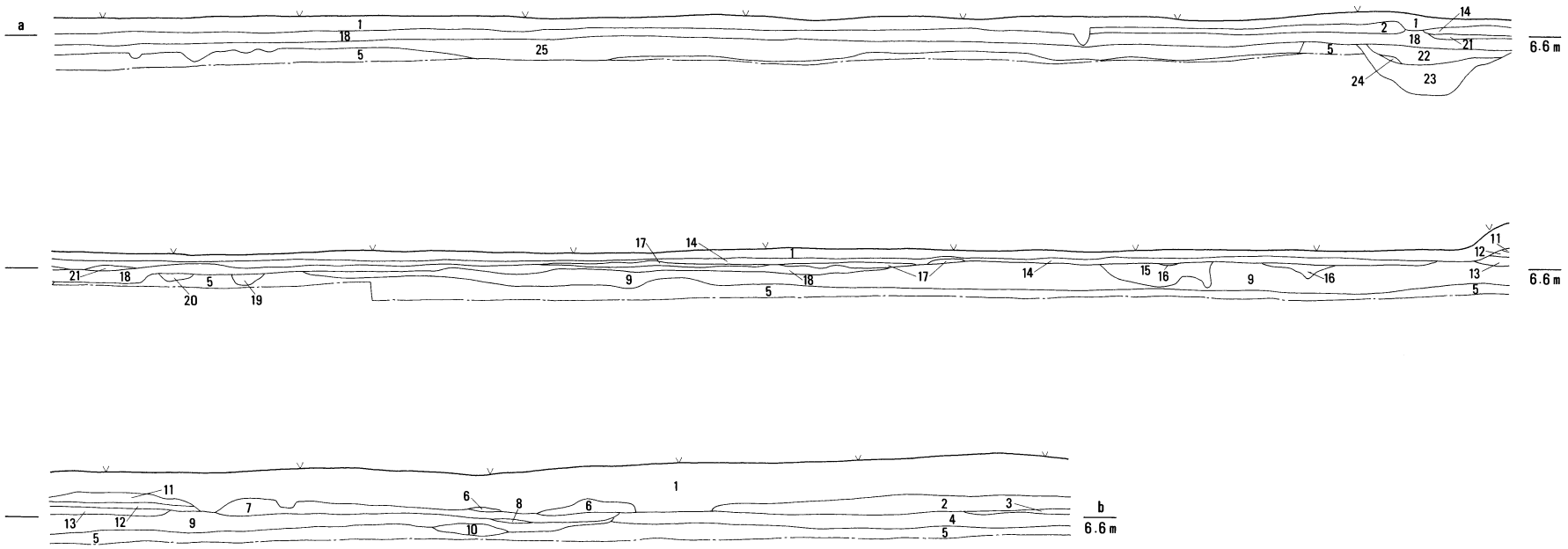


第32図　調査区地区割図（1：2,000）



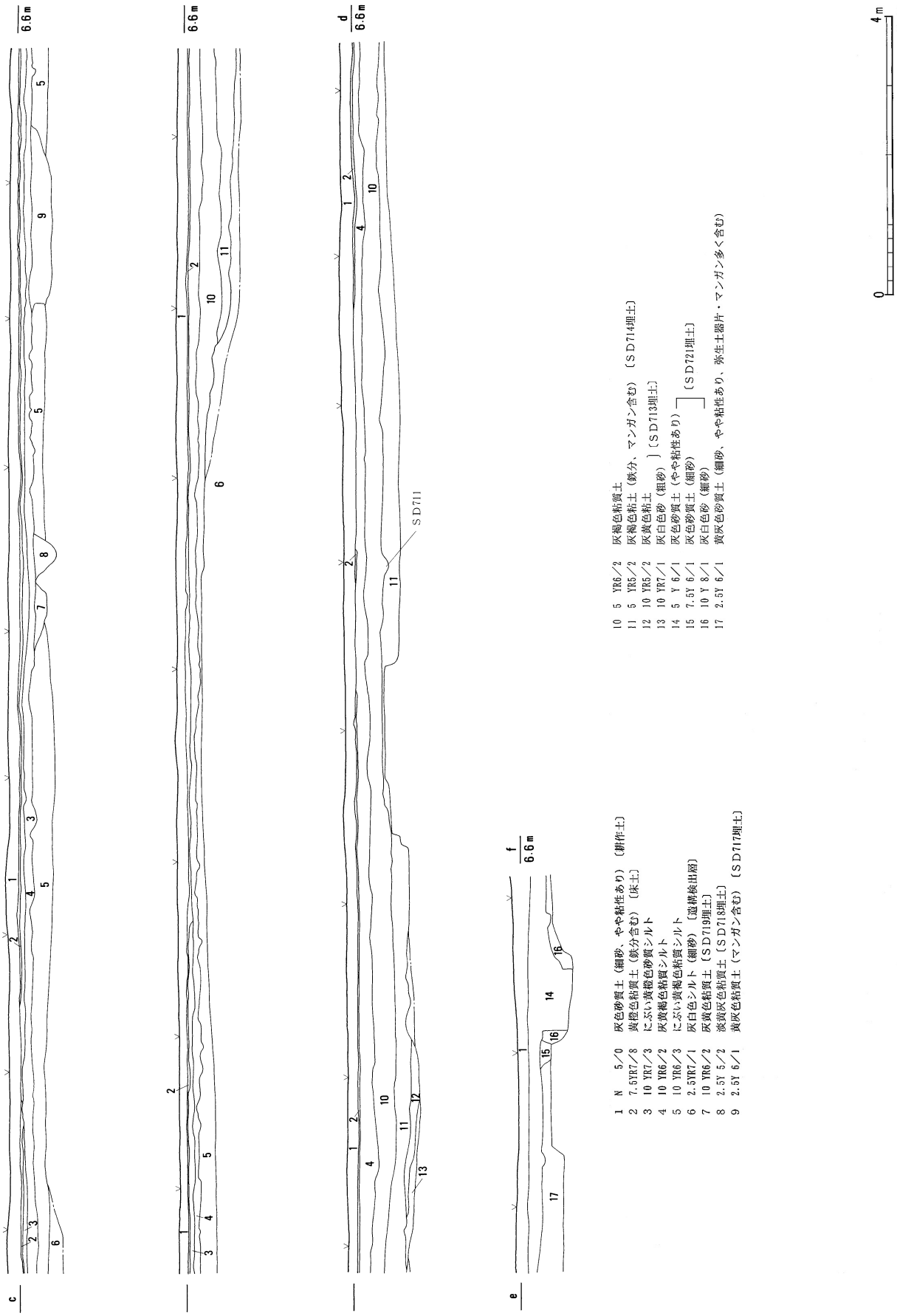
第33図　遺構平面図（1：250）

第34図　調査区南壁土層図（1：80）



1　10 YR5／2　オリーブ灰色砂質土（やや粘性あり、細砂）〔耕作土・盛土〕
2　5　GY7／1　明オリーブ灰色シルト（堅くしまる、マンガン多く含む）
3　N　6／0　灰色シルト（堅くしまる、マンガン多く含む）
4　5　Y 7／1　灰白色砂質シルト（僅かに土師器片含む）
5　N　5／0　灰色砂質土（細砂）〔遺構検出層〕
6　10 YR5／2　オリーブ灰色砂質シルト（炭少し含む）
7　10 Y 5／1　灰色砂質シルト（土師器片含む）
8　7.5Y 7／2　灰白色砂質シルト（土師器片含む）
9　7.5Y 6／3　オリーブ黄色シルト（炭僅か含む）
10　2.5Y 7／1　灰白色砂質土（粘性あり、極細砂）
11　2.5Y 7／2　灰黄色砂質土（粘性あり、極細砂）
12　2.5Y 6／1　黄灰色シルト（堅くしまる、土師器片含む）
13　5　Y 6／1　灰色シルト（マンガン・土師器片含む）
14　7.5GY6／1　緑灰色シルト
15　2.5Y 8／4　淡黄色シルト
16　2.5Y 5／1　黄灰色シルト（マンガン含む）
17　2.5Y 7／4　淡黄色砂質土（細砂）
18　10 YR5／1　褐灰色砂質土（粘性あり、細砂）
19　2.5Y 5／1　黄灰色砂質土（極細砂）
20　2.5Y 5／1　黄灰色砂質土（土師器片含む）
21　5　Y 5／2　灰オリーブ色砂質シルト
22　7.5Y 5／1　灰色粘土
23　N　4／0　灰色粘土　〔ＳＤ704埋土〕
24　5　Y 7／1　灰白色砂（極細砂）
25　5　Y 5／1　灰白色砂質土（鉄分を多く含む、炭を含む、土師器片を含む）〔ＳＤ705・706埋土〕

0　4m



第35図　調査区西壁土層図（1：80）

恵器杯身・高杯などのほか、混入遺物と考えられる弥生土器甕(10)がある。F地区のＳＤ716との遺構の切り会い関係から、飛鳥時代から平安時代と考えられる。

ＳＤ706　　ｐ８からｖ９で検出した東西溝である。溝幅約30～40ｃｍでほぼ均一である。道路部分調査区のＳＤ15から続く溝で、東に向う溝である。検出面からの深さは３～11ｃｍである。出土遺物には須恵器高杯などがある。またＦ地区ＳＤ615から高台付杯などが出土しており、飛鳥時代である。

(3)　鎌倉時代以降の遺構（第33図）

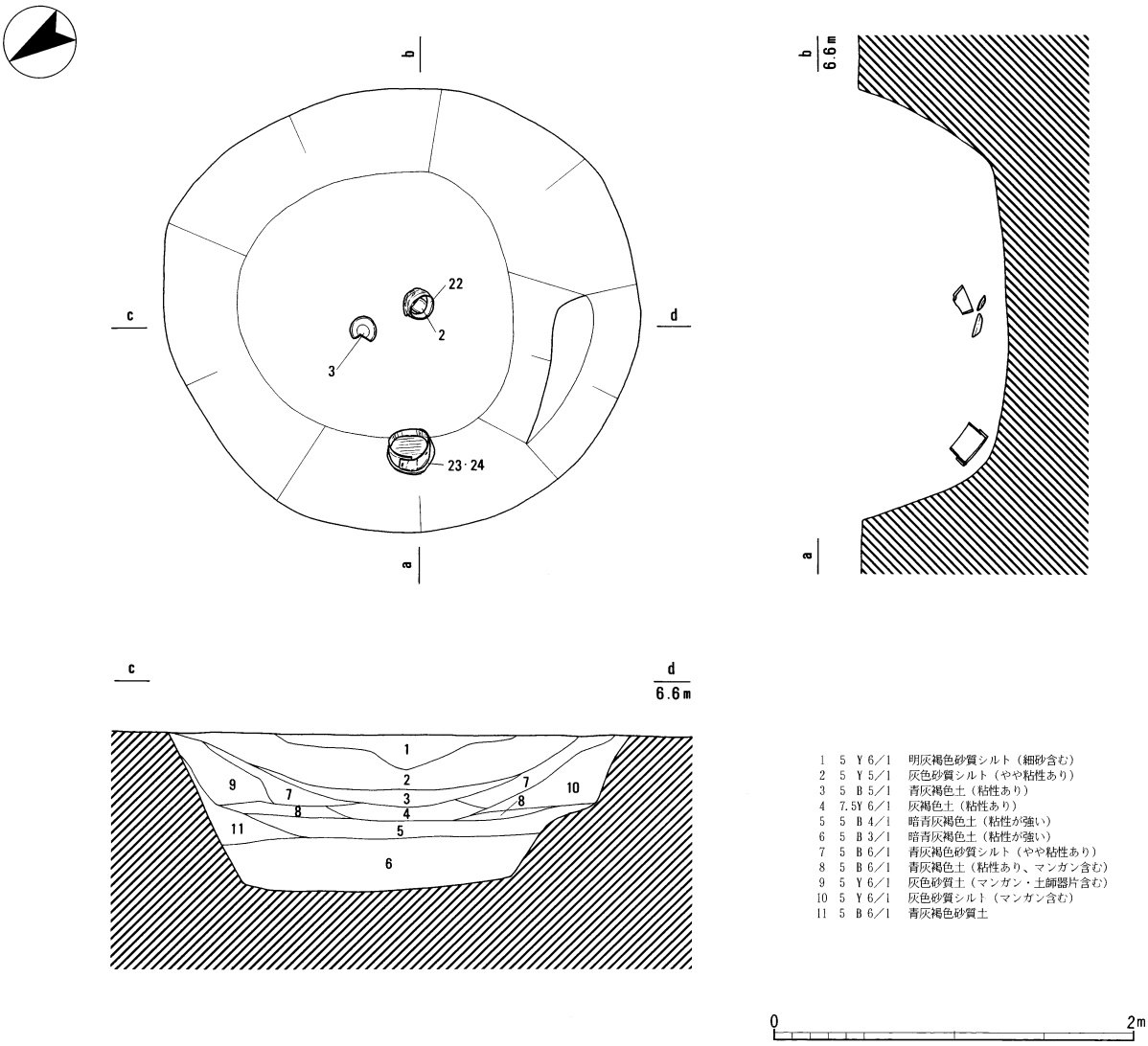
Ａ　土坑

ＳＫ712　　ｚ20グリッドで検出した径約1.6～1.8ｍの楕円形を呈する土坑である。検出面からの深さは、未完掘のため推定ではあるが、約55cm程度と思われる。出土遺物は見られなかったが、ＳＫ712の中央を横切り、同じ時期と考えられるＳＤ716から鎌倉時代の陶器椀などが出土していることから、時期は鎌倉時代と考える。

ＳＫ721　　ｚ30グリッドで検出した径約2.0mの円形を呈する土坑である。埋土は灰色砂質土で、検出面からの深さは約26cmである。出土遺物には小片ではあるが南伊勢系土師器皿や陶器椀などがある。時期は室町時代である。

ＳＫ722　　ｚ31グリッドで検出した径約1.9mの円形を呈する土坑で、埋土はＳＫ721と同じ灰色砂質土である。検出面からの深さは約33cmである。出土遺物には土師器小皿、陶器椀や中世陶器がある。時期は室町時代である。

形態や埋土などから北に隣り合うＳＫ721と同じ



第36図　ＳＫ703平面図・遺物出土状況図・土層図（1：40）

性格の遺構と考えられる。また、ＳＫ721とＳＫ722の間には幅約30cmの溝が見られるが、これらの土坑と関係するのかは不明である。

Ｂ　溝

ＳＤ716　　ｚ17からｙ22グリッドにかけて検出した南北溝である。幅約0.3～0.4mで、検出面からの深さ４～９cmである。出土遺物には土師器小皿、陶器椀などがある。時期は鎌倉時代である。

ＳＤ717　　ｙ25からｙ28グリッドにかけて検出した南北溝である。溝の両側面は縦に切り込んでおり、遺構の残りは良い。溝断面はU字形を呈する。幅約0.3～0.5mで、検出面からの深さ８～17cmである。出土遺物には土師器小皿などの細片がある。

ＳＤ718　　ｙ26・ｙ27グリッドで検出した東西溝である。溝幅約0.3～0.4mで、検出面からの深さ12～19cmである。埋土は淡灰黄色粘質土である。出土遺物はないが、切り合うＳＤ716や埋土から、ＳＤ716と同時期と考える。

ＳＤ719　　ｚ30グリッドで検出した北から東にまがる溝である。幅約0.6～1.05mで、検出面からの深さ約22・である。埋土は灰白色砂である。ＳＤ717から続く溝であろう。出土遺物には土師器皿、陶器椀などの細片がある。

(4)　時期不明・その他の遺構（第33図）

Ａ　土坑

ＳＫ702　　ｊ８・ｊ９グリッドで検出した土坑である。長さ約2.3m、幅約72cmで、検出面からの深さ３～６cmでかなり浅い。埋土は灰色砂質土である。出土遺物は土師器片などで時期は不明である。

ＳＫ704　　ｑ９グリッドで検出した土坑で、南側半分は調査区外になるが、円形を呈すると考えられる。南壁際で検出長約1.7m、南北長約0.9mで、検出面からの深さ約50cmである。埋土は灰色粘土および灰白色砂で、出土遺物には器台と思われる弥生土器（13）があるが、混入遺物と考えられる。

Ｃ　溝

ＳＤ701　　ｉ８・ｊ８グリッドで検出した東西溝で、幅約0.2～0.3m、検出面からの深さ１～５cmである。埋土は灰色粘質土である。出土遺物には土師器甕片などがあるが、時期は不明である。

ＳＤ707　ｕ10からv11グリッドで検出した東西溝である。幅約0.5～1.3m、検出面からの深さ11～12cmである。出土遺物にはなく時期不明であるが、おそらくＳＤ705から続く溝であろう。

ＳＤ710　　ｘ15・ｙ15グリッドで検出した東西溝である。幅約0.3～0.85mで、検出面からの深さ12～28cmである。埋土は灰褐色粘質土で、出土遺物には土師器甕の細片などがある。

ＳＤ719　　ｙ26・ｚ26グリッドで検出した東西溝である。幅約30～40cmで、検出面からの深さ３～９cmである。南北溝ＳＤ717に切られる。出土遺物には須恵器細片などしかなく、時期は不明である。

ＳＺ723　　ｚ30・ｚ31グリッドの黄灰色砂質土（マンガンを含む）から壺(8)や甕(９・11・12)などの中期前半の弥生土器が多数出土した。調査区の幅が狭いためその性格を確認できなかったが、竪穴住居または土坑などの遺構の可能性がある。

３　遺物

(1)　弥生時代の遺物（第38図）

ａ　包含層・その他の遺物（６～21）

壺(6～8)には、頸部が緩やかに外反して口縁端部を丸くおさめる広口壺(6)がある。口縁端部外面に櫛歯による刺突文を、口縁部から頸部外面と体部外面上半に櫛描直線文を施している。また内面には指頭圧痕が見られる。(7)は受口状細頸壺で、口縁部端部外面に櫛歯による刺突文を施している。また体部外面には縦位にハケで調整した後に縄文を施文し、沈線で区画した文様帯を施している。広口壺の口縁部片(8)は、口縁端部の下端に刻み目を施している。(6・7)は調査区ｚ22で遺構検出をしている時に出土したものであるが、土器の周囲には掘形は見られなかった。下層の可能性もある。

甕(9～12)には、口縁部を外反させる甕(9・11・12)がある。(9・12)は口縁端部に櫛状具による刻み目を施している。(10)は受口状口縁の甕で、口縁端部の下端に刻み目を施している。外面は口縁端部を横位に、頸部には縦位のハケ調整の後に櫛描直線文を施文している。ＳＤ705から出土したもので混入したものである。(11)は、口径約21ｃｍの小型甕である。(12)は口縁部内面を横位に体部外面を斜位にハケ調整する。時期は中期後半である。

(13)は、口縁部の端部を折り返すもので、器台と考えたが器形は確かでない。口縁部外面には右上がりの、頸部外面には左上がりのハケメを施している。ＳＫ704からの出土で混入であろう。

土製品(18)は、土師質の土錘である。高さ3.8cm、幅4.0cmでやや偏平である。残存重量48ｇ。

石製品(21)は、サヌカイト製の石鏃である。頂部を一部欠損するが、ほぼ完形である。

(2)　古墳時代の遺物（第38図）

包含層・その他の遺物（19）

土製品(19)は、断面は台形状を呈する紡錘車である。Ｉｄ①類に属しよう。高さ3.2cm。幅3.3cm。

(3)　飛鳥から平安時代の遺物（第37・38図）

ａ　ＳＫ703出土の遺物(１～5)

土師器(1～3)には、口径10cm前後、底径約２cmの小皿(1)がある。口縁部はヨコナデ、体部内外面ナデである。(2)は、ロクロ成形の小皿である。内面の中央部がやや膨み、底部外面に回転糸切り痕が見られる。(3)は口径14cm前後、口縁端部が外反する杯である。内面はナデで、外面には指頭圧痕が明瞭に見られる。11世紀代後半である。

黒色土器(4)は、底径７cm前後、腰高の貼り付け高台をもつ椀で、内面には平行暗文を施している。内面のみを黒化する黒色土器Ａ類である。

土製品(5)は、土師質の土錘である。断面は方形に近い。残存長5.3cm。径1.6cm。

ｂ　包含層・その他の遺物(14・15)

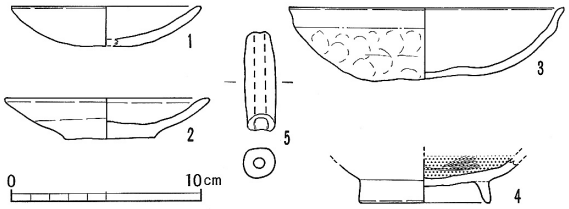
土師器には、平らな底部から腰部が丸みをもつ杯(14)がある。体部は垂直気味に立ち上がり、口縁端部が短く外反する。

灰釉陶器には、平らな底部に短く端部が丸い高台が付く椀(15)がある。

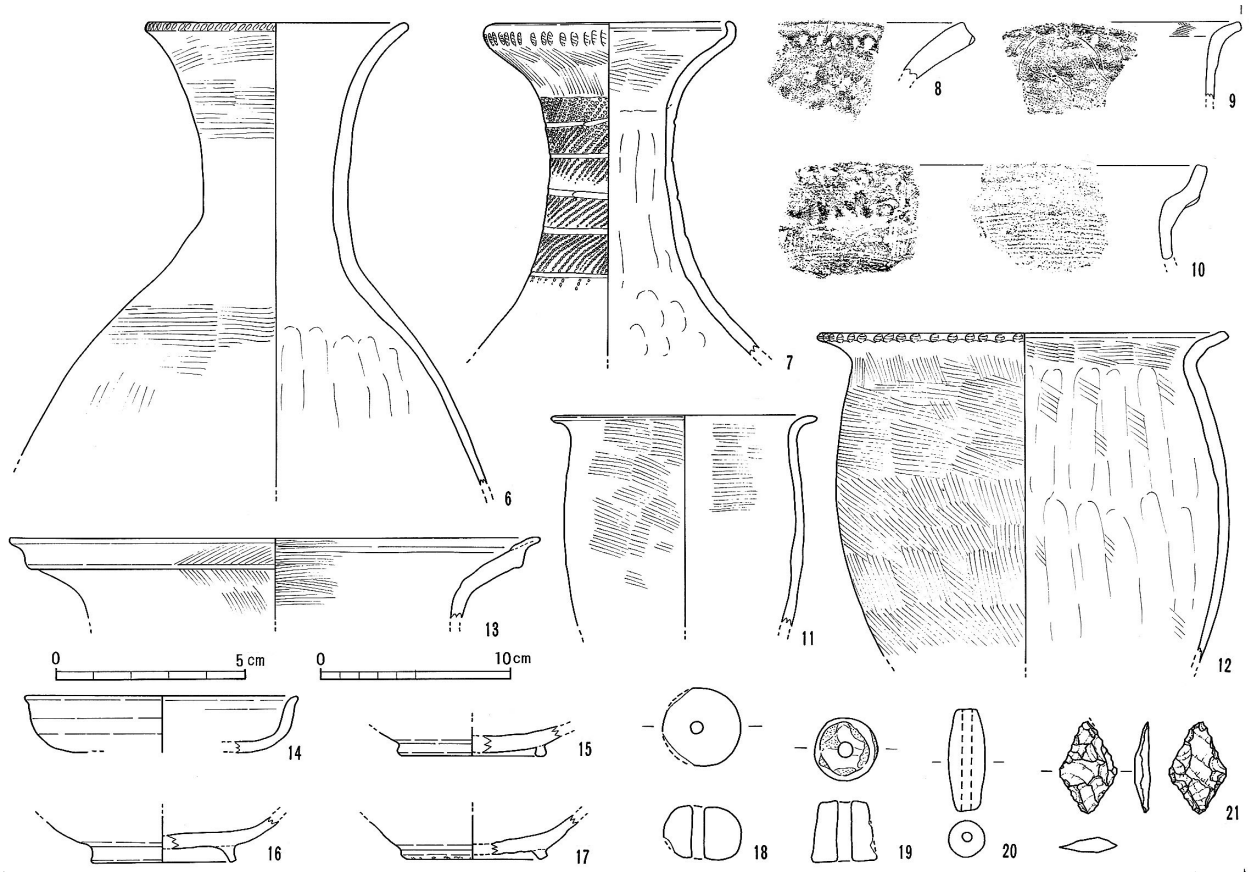
(3)　鎌倉時代以降・その他の土器（第38図）

包含層・その他の遺物(16・17・20)

陶器(16・17)は、椀である。丸い体部に断面三角形の高い高台がつく(16)と直線的な体部に断面逆台



第37図　出土土器実測図（１：４）［ＳＫ703］



第38図　出土土器・石器実測図（１：４、21は１：２）［包含層・その他］

形の低い高台をもつ(17)がある。前者が藤澤編年３・４型式、後者は５型式に相当しよう。[②]

(20)は土師質の土錘である。中央部が膨らんで両端部が窄んでいる。長さ5.4cm。径2.0cm。

(5) 木製品（第39図）

ＳＫ703出土の木製品(22～24)

すべて曲物である。(22)は径約17cmの側板で、樺紐で１か所で結合する。腐食が著しい。(23)は径約25cm、外面には幅約３cmの箍が１帯めぐる。また、(24)は(23)の底板で、側板と四か所で木釘により結合する。径約22～23cm。

４．小結

今回の調査で、東西部分では平安時代後期の土坑ＳＫ703を確認した。また道路部分で検出したＳＤ615・616が、ＳＤ705とＳＤ706に続くことが考えられ、ＳＤ705は、Ｆ地区で検出した直線的に延びるＳＤ615と合わせると延長は約61mになる。また、調査区の最も南では、遺構として確認できなかったが、弥生時代中期前半の土器が多量に出土し、中勢バイパスの弐ノ坪遺跡[③]で検出された同時期の遺構との関連性も考えられる。

［註］

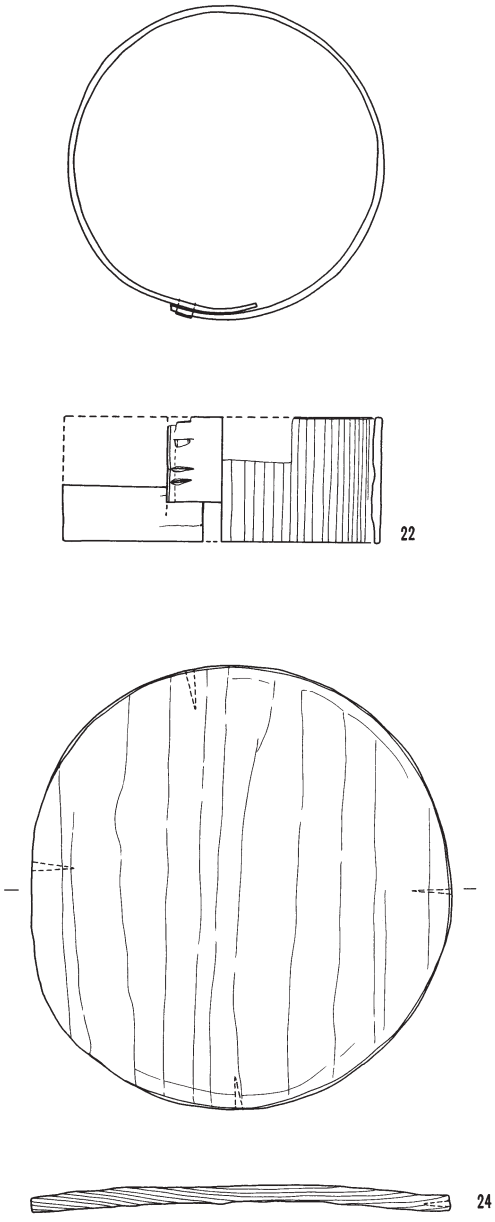
① 國下多美樹「京都府下の紡錘車について」『京都考古』50 京都考古刊行会 1988

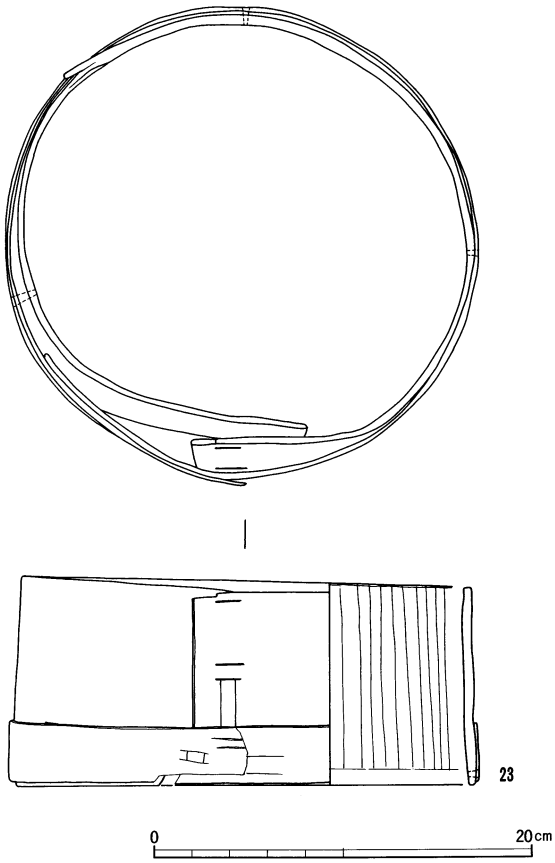
② 陶器椀については、以下の文献による。

・藤澤良裕「瀬戸古窯址群１」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要Ｉ』 瀬戸市歴史民俗資料館 1982

・藤澤良裕「山茶椀の現状と課題」『研究紀要』３ 1994

③ 池端清行ほか「弐ノ坪遺跡」『一般国道23号中勢道路埋蔵文化財報告概報Ｘ』三重県埋蔵文化財センター 1998





第39図　出土木製品実測図（１：４）［ＳＫ703］

報告番号	登録番号	出土位置遺構	器種	計測値 (cm) 口径	器高	底径	成形・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
1	002 -06	p 9 SK703	土師器 小皿	(9.9)	2.1		口縁部ヨコナデ　内外面ナデ	やや粗	並	灰白　10YR 8/2	1/5 残	
2	002 -03	p 9 SK703	ﾛｸﾛ 土師器 小皿	10.8	2.2	4,7	ロクロナデ 底部糸切り	やや密	並	灰白　2.5 Y 8/2	ほぼ 完形	
3	002 -02	p 9 SK703	土師器 杯	14.4	3.8		口縁部ヨコナデ　外面オサエ・ナデ　内面ナデ	やや粗 ～2mm	並	灰白　2.5 Y 8/1	ほぼ 完形	
4	002 -04	p 9 SK703	黒色土器 椀			(7.3)	ロクロナデ　高台貼り付け 底部糸切り　内面ミガキ	やや密	並	灰白　2.5 Y 8/2 暗灰　N 3/	底部 1/2 残	
5	002 -05	p 9 SK703	土製品 土錘	残存長 (5.3)	幅 1.6		ナデ　穴径0.5cm	やや密 ～1mm	並	灰黄　2.5 Y 7/2 黄灰　2.5 Y 4/1	一部欠	残重量10.9g
6	031 -01	z 22 黄灰色	弥生土器 壺	13.5			口縁端部に刺突文　外面櫛描直線文　内面オサエ・ナデ	粗 ～4.5mm	並	橙　7.5 YR 6/4	口縁～体部 1/2 残	磨滅が顕著
7	028 -03	z 22 黄灰色	弥生土器 壺	12.3			口縁端部に刺突文　外面ハケメ縄文のち沈線による区画	やや粗 ～2mm	並	にぶい黄橙　10YR 6/3	口縁～体部 1/2 残	
8	026 -03	z 31 SZ723	弥生土器 壺				口縁端部に櫛描刺突文	粗 ～3.5mm	並	褐灰　7.5 YR 6/1 明褐灰　7.5 YR 7/2	口縁部片	
9	026 -02	z 30 SZ723	弥生土器 甕				口縁部内面ハケメ　体部外面ハケメ	粗 ～2mm	並	にぶい橙　2.5 YR 6/4	口縁部片	
10	013 -04	r 9 SD705	弥生土器 甕				口縁部の下端部に刻目　外面ハケメ　櫛描直線文　内面ハケメ	やや粗 1～2mm	並	にぶい黄橙　10YR 7/2	口縁部片	
11	028 -02	z 31 SZ723	弥生土器 甕	(13.1)			体部内外面ハケメ	粗 ～3mm	並	橙　5YR 6/4	口縁～体部 1/6 残	風化大
12	030 -01	z 31 SZ723	弥生土器 甕	21.4			口縁端部に刻目　体部外面ハケメ内面オサエ・ナデ、ハケメ	やや粗 ～4mm	並	にぶい黄橙　10YR 6/3	口縁～体部 3/4 残	
13	009 -02	q 5 SK704	弥生土器 器台	(27.9)			口縁部折り返しの後ヨコナデ 内外面ハケメ	やや粗 ～2mm	並	浅黄橙　10YR 8/3 灰白　10YR 8/2	口縁部片	
14	026 -01	y 18 包含層	土師器 杯	(14.2)	(3.0)		口縁部ヨコナデ　外面オサエ・ナデ　内面ナデ	やや粗 ～2mm	並	淡黄橙　7.5 YR 8/4	1/4 残	
15	025 -06	r 9 包含層	灰釉陶器 椀			(7.5)	ロクロナデ 底部糸切り　高台貼り付け	やや密 ～1mm	良	灰白　N 8/0	底部 1/3 残	
16	023 -01	j 9 包含層	無釉陶器 椀			7.4	ロクロナデ 底部糸切り　高台貼り付け	密	並	灰白　5Y 8/1	高台部一部欠	
17	025 -08	y 21 包含層	無釉陶器 椀			(6.9)	ロクロナデ　底部糸切り 高台貼り付け　籾殻圧痕	やや粗 ～1.5mm	良	灰白　N 7/0	底部 1/4 残	
18	025 -07	w13 包含層	土製品 土錘		径 4.1	厚さ 3.8	ナデ　穴径0.7cm	粗 ～4mm	並	にぶい橙　7.5 YR 6/4	一部欠	残存重量 48g
19	026 -05	z 18 包含層	土師質 紡錘車	長さ 3.2	幅 3.3		ナデ　穴径0.8cm	やや密 ～1mm	並	灰白　2.5 Y 7/1	ほぼ 完形	重量　36.6g
20	026 -04	z 17 包含層	土製品 土錘	長さ 5.4	径 2.0		ナデ　穴径0.4cm	やや密 ～1mm	並	にぶい黄橙　10YR 7/3	完形	重量 18.2 g
21	027 -04	y 28 包含層	石製品 石鏃	長さ (2.40)	幅 1.49	厚さ 0.40					頂部一部欠損	サヌカイト製 重量(1.1)g

第13表　出土土器・石器観察表

報告番号	登録番号	出土位置遺構	名称	計測値（cm）			調整技法	木取り	備考
				径	器高	厚さ			
22	037 -01	p8・p9 ＳＫ703	曲物側板 No.3	16.7	6.6	0.4	樺紐で１か所結合する。		
23	034 -01	p8・p9 ＳＫ703	曲物側板	24.9	11.0	0.2 ～ 0.4	樺紐による結合がのこる。箍が１段めぐる。		箍幅 2.8～3.1cm、厚さ 0.3cm
24	035 -01	p8・p9 ＳＫ703	曲物底板	22.0～ 23.4		0.9	四方に木釘の痕跡が見られる。	板目	23 の底板

第14表　出土木製品観察表

［遺物観察表および木製品観察表の凡例］

○　報告番号は、遺物番号および図版番号と同一である。
○　登録番号は、遺物収蔵番号および遺物実測図番号を示す。
○　出土位置は、上段に出土した調査区、下段に出土した遺構番号を表す。
○　器種の上段は種別、下段は形態である。なお、形態は見た目である。また木製品は、名称に取り上げ時の番号も記した。
○　計測値で、（　）は反転復元による推定値である。欠損部があるものは、現存部の長さを残存長として記した。なお、木製品は最大計測値を記した。
○　調整技法は、主な事柄を記した。
○　胎土は、密、やや密、やや粗、粗の四段階で記した。下段の数値は、砂粒の大きさを表す。
○　焼成は、良、並、不良の三段階で記した。
○　色調は、『新版標準土色帖』に準拠した。段は外面、下段は内面を表す。
○　残存度は、表せるものは分数で記した。分数で表せないものは言葉で記した。
○　備考は、その他の特徴を記した。

写　真　図　版

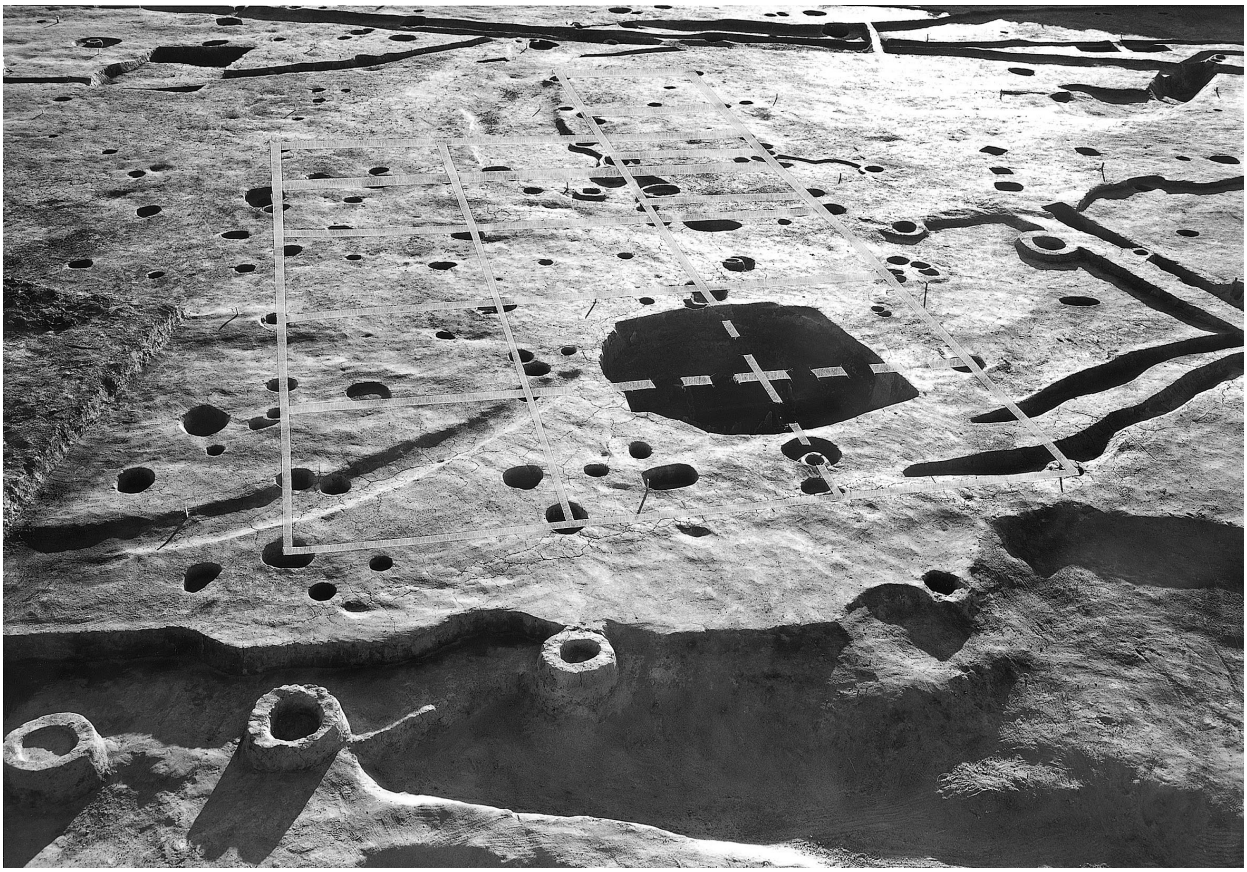
調査風景（北西から）

図版 1

調査前風景（東から）

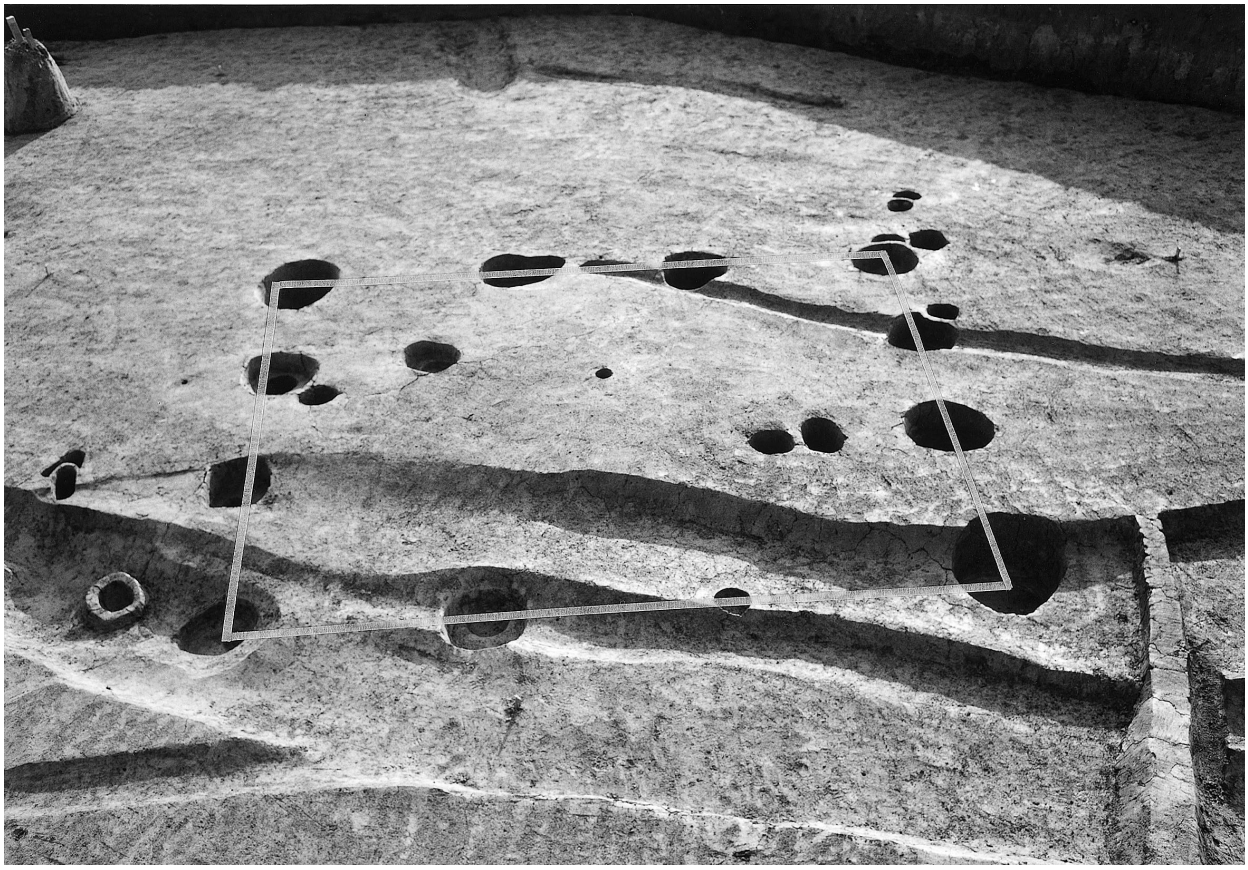
調査後全景（東から）

ＳＲ630（東から）

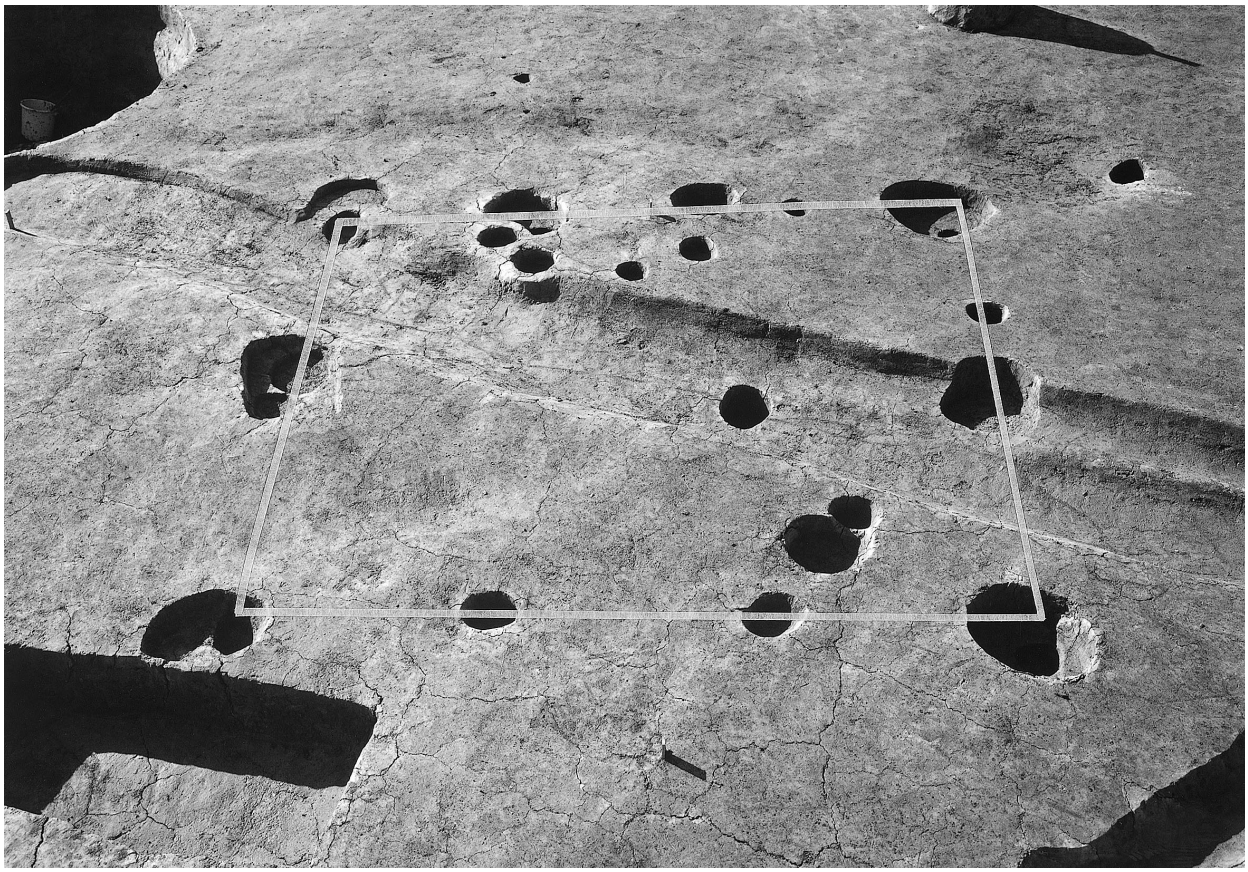


ＳＢ612・613（北から）

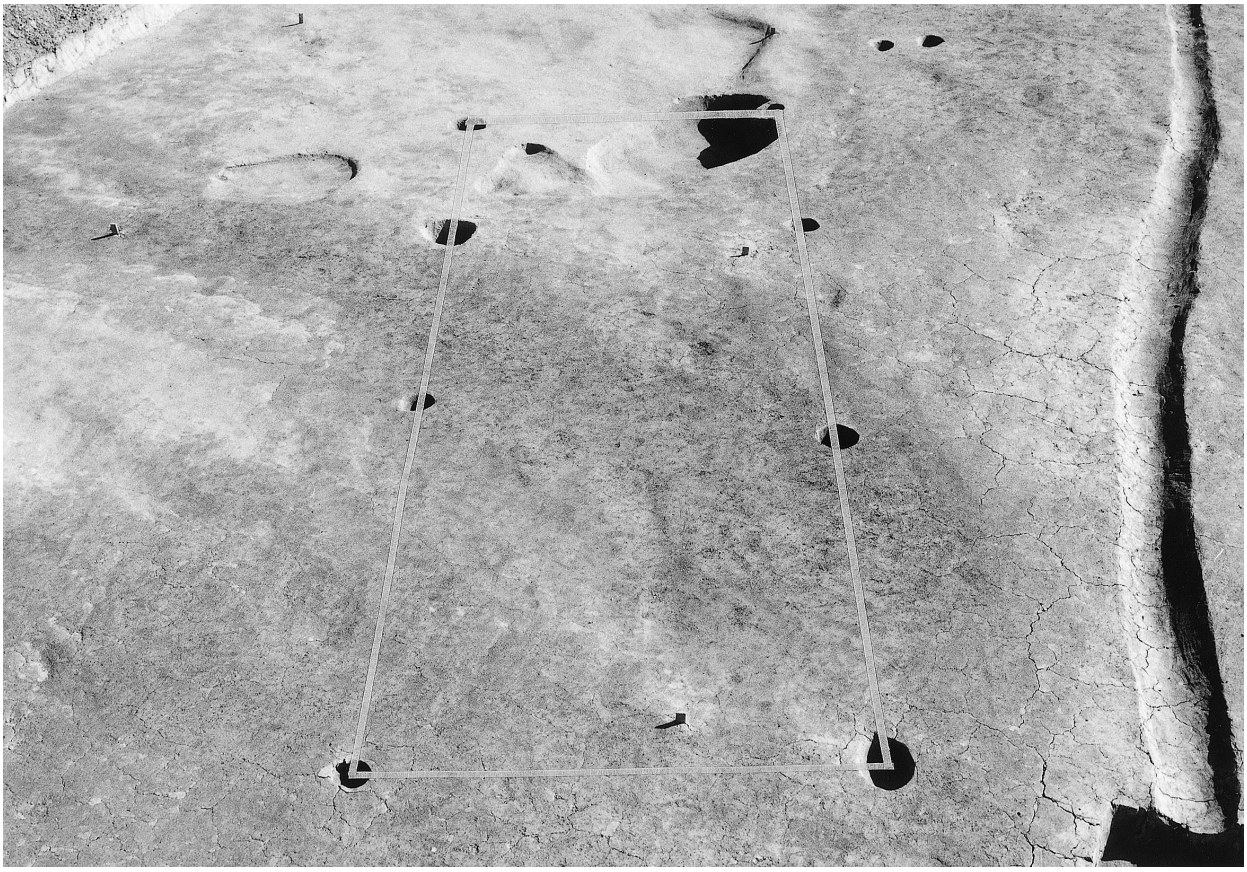
図版３



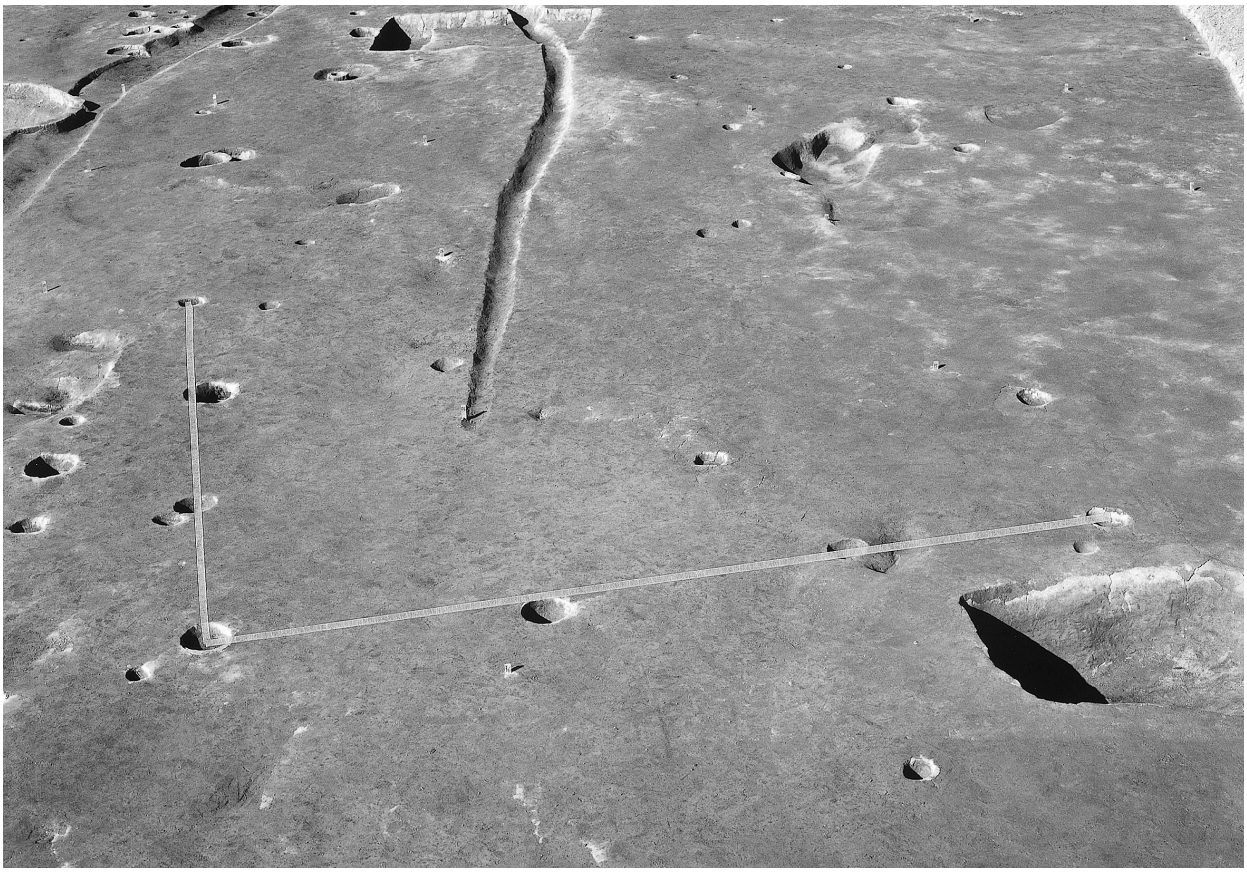
ＳＢ621（北から）



ＳＢ622（北から）



ＳＢ624（西から）



ＳＡ631（西から）

図版５

ＳＥ611（西から）

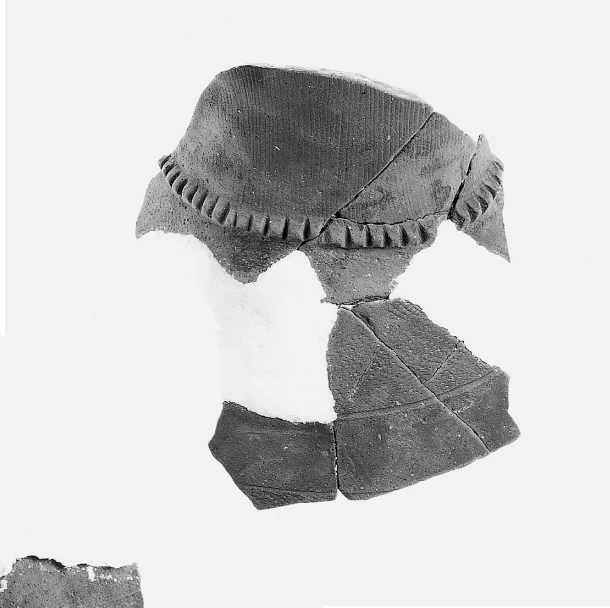
ＳＥ627出土曲物底板（西から）

ＳＫ632出土黒色土器椀・灰釉陶器碗（西から）

ＳＲ630出土弥生土器壺（東から）

ＳＲ630出土弥生土器大型壺（東から）

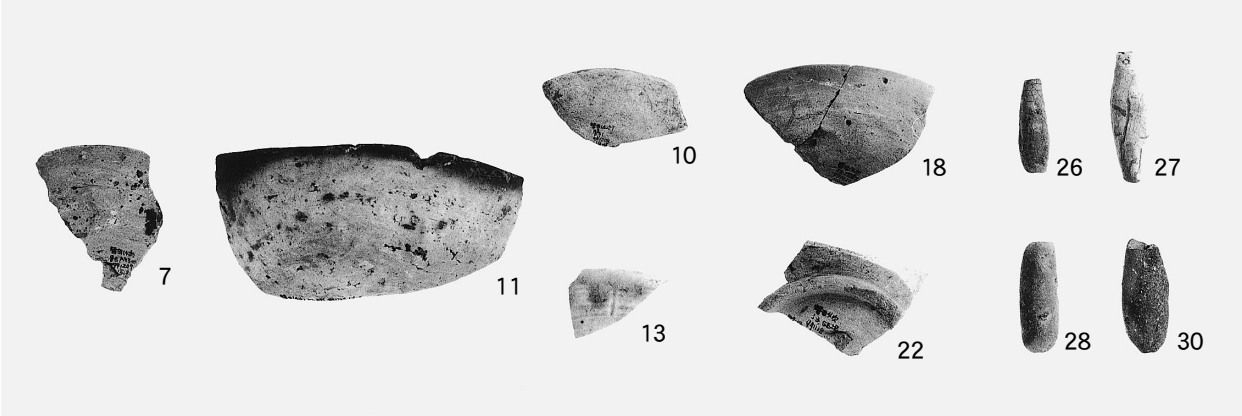
1

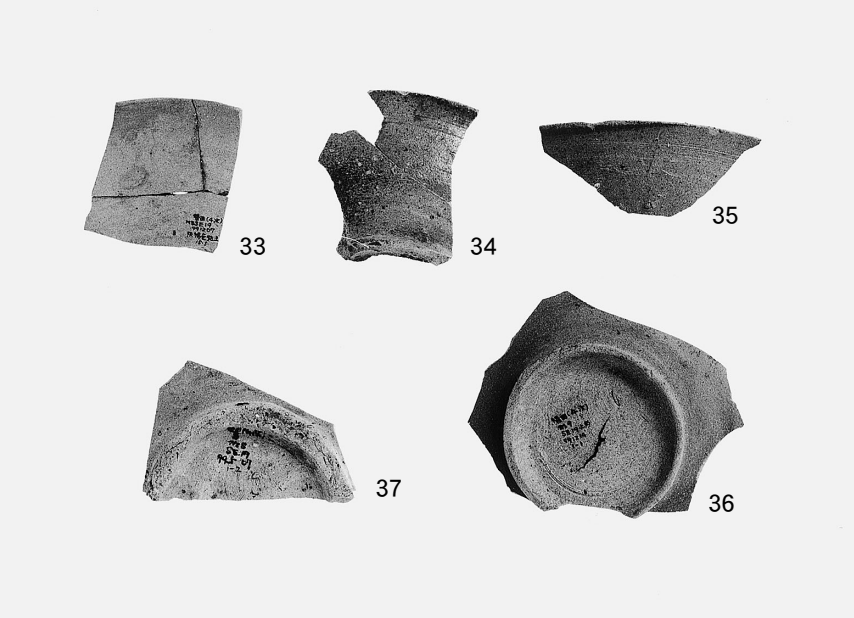


2

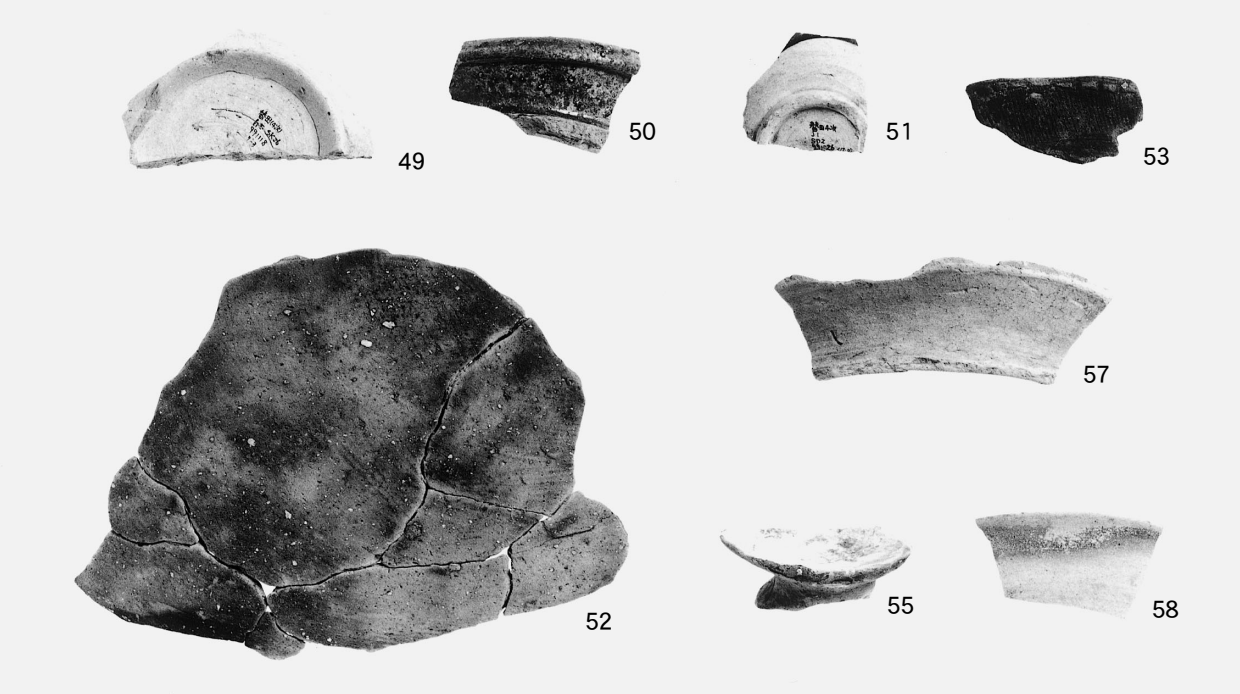
出土土器(1)［ＳＲ630出土弥生土器］

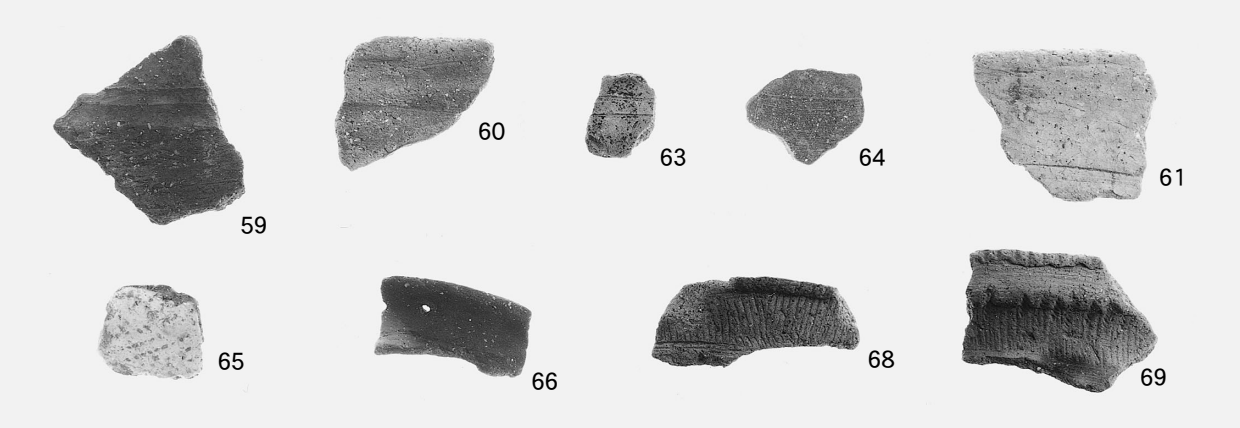
図版７





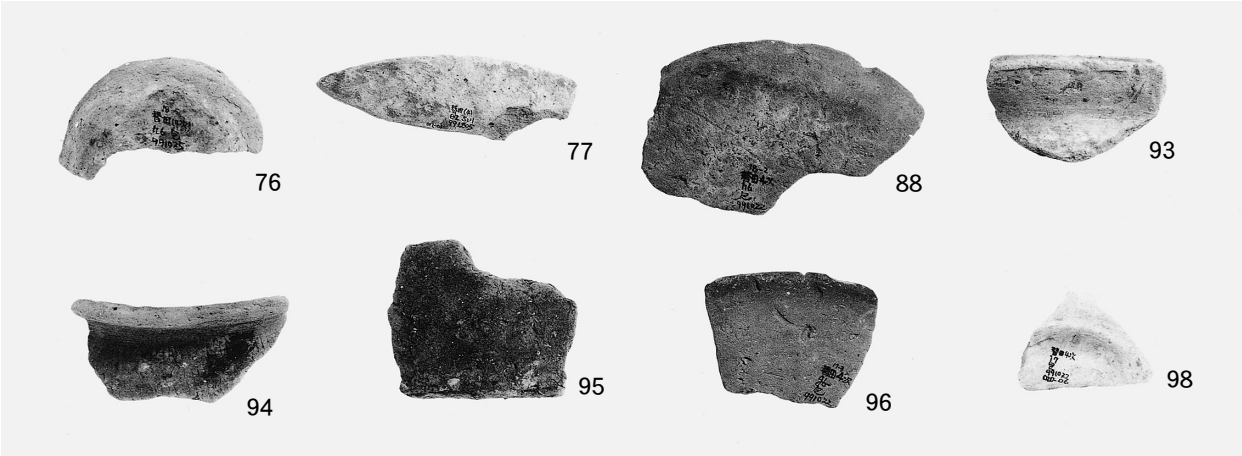
出土土器(2)［ＳＢ612、ＳＡ631・634、ＳＥ611・627出土遺物］

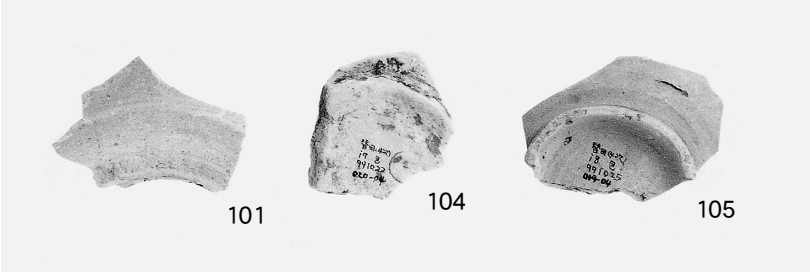


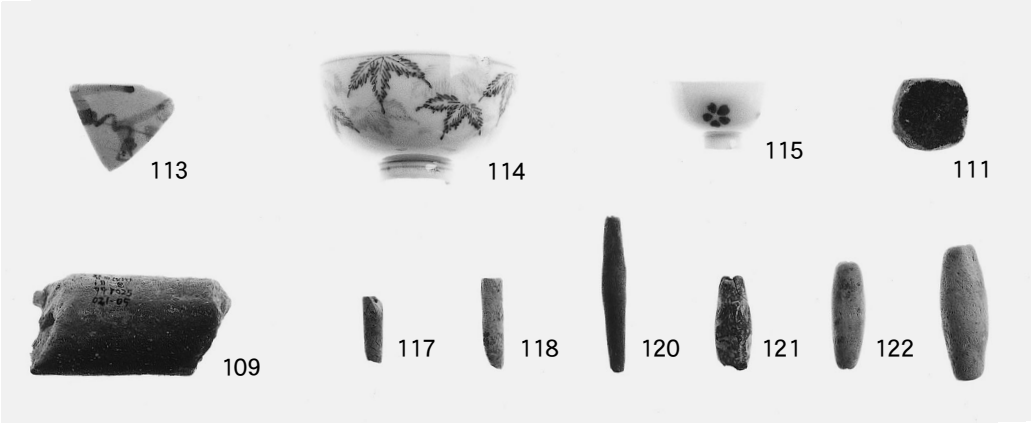


出土土器(3)［ＳＫ617・632、ＳＤ603・606、小穴、包含層・その他出土遺物］

図版 9





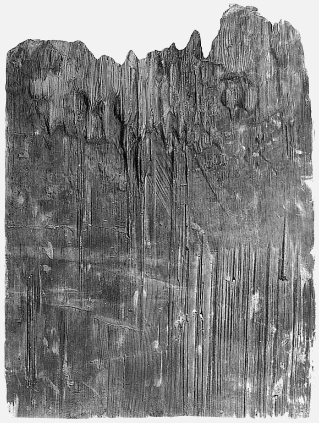


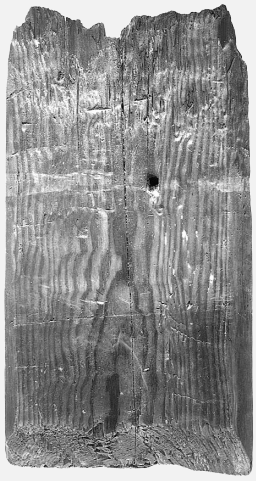
出土土器(4)［包含層・その他出土遺物］

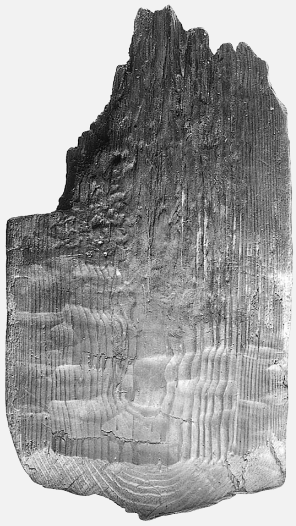
123

124

125


126


128


129

130

131

132

出土木製品(1)［ＳＥ611出土井戸枠縦板（西側から東側）］

図版11

133

134

135

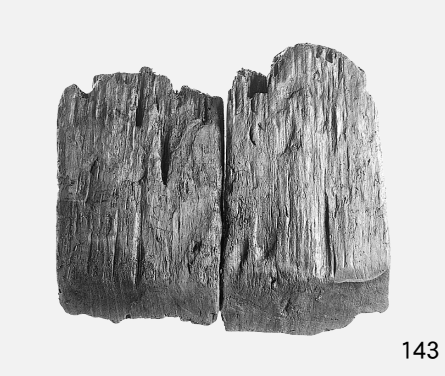
136

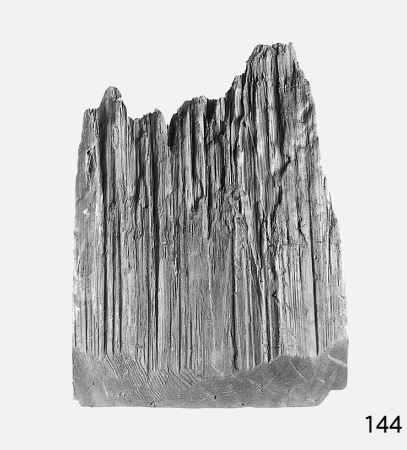
137

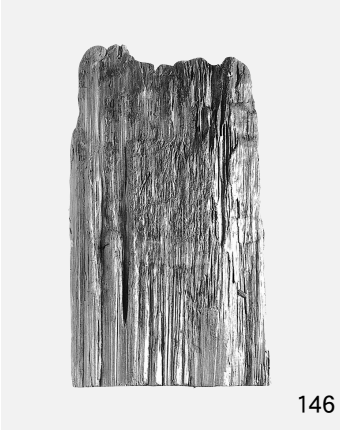
138

140

141


143


144


146

出土木製品(2)［ＳＥ611出土井戸枠縦板（東側から北側）］

147

148

149

150

151

152

153

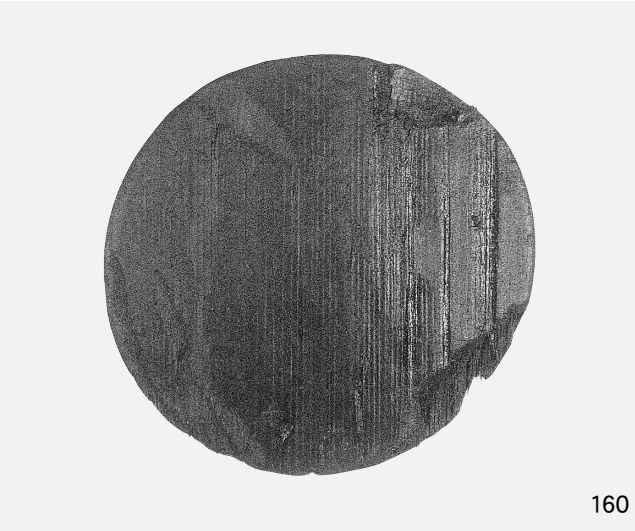
154

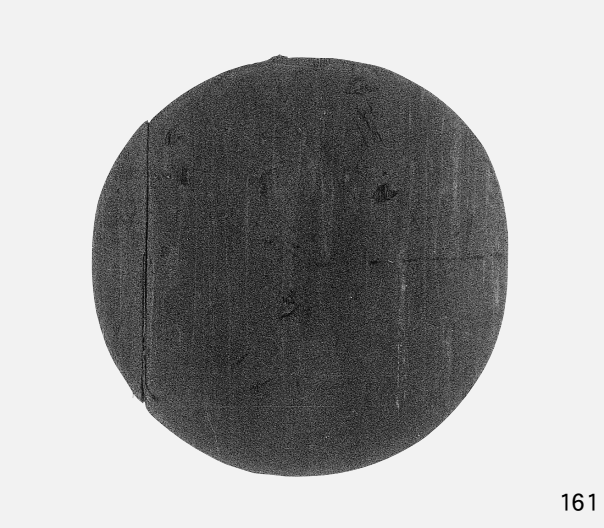
出土木製品(3)［ＳＥ611出土井戸枠横板］

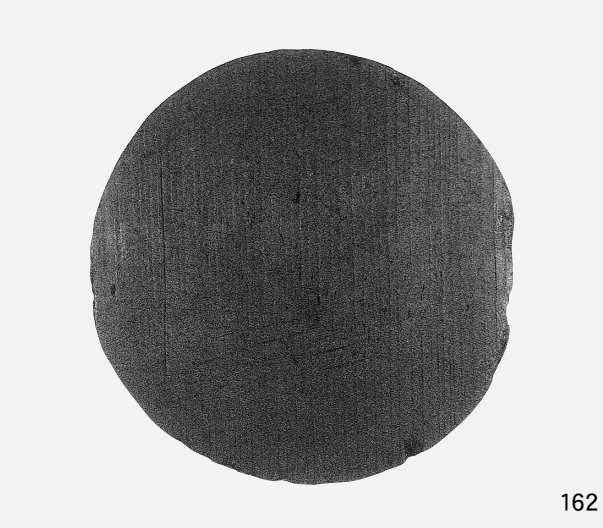
図版13

158

159


160


161


162

出土木製品(4)［ＳＥ627、ＳＫ632出土曲物］

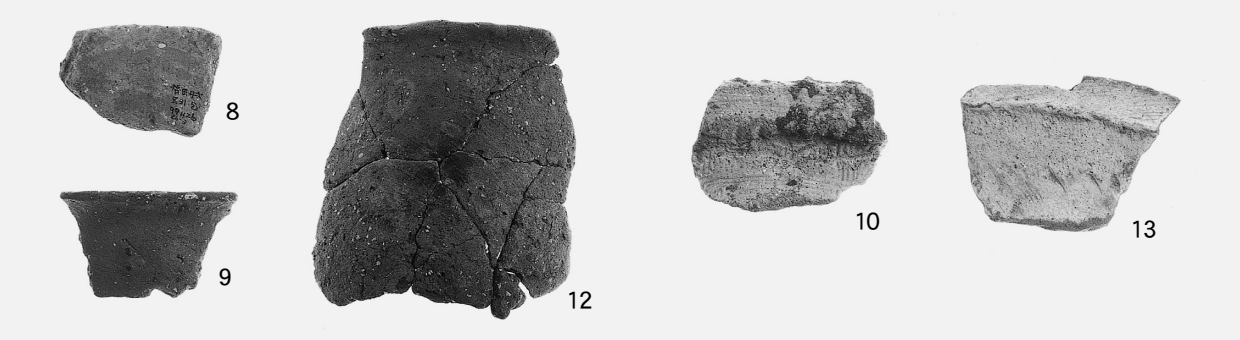
調査前風景（南から）

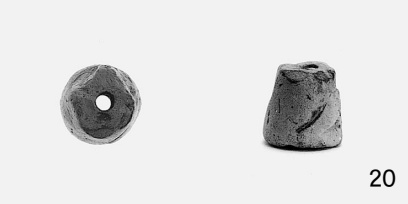
調査後全景（東から）

図版15

調査後（東から）

調査後（北から）





出土土器・出土木製品［ＳＫ603・包含層・その他出土遺物］

報　告　書　抄　録

ふりがな	かえだいせき（だい４じ）はっくつちょうさほうこく
書　　名	替田遺跡（第４次）発掘調査報告
副書名	
巻　　次	
ｼﾘｰｽﾞ　名	三重県埋蔵文化財調査報告
ｼﾘｰｽﾞ番号	２５２
編著者名	宮田勝功
編集機関	三重県埋蔵文化財センター
所在地	〒５１５－０３２５　　三重県多気郡明和町竹川５０３　　ＴＥＬ　０５９６（５２）１７３２
	西暦２００４年３月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 （㎡）	調査原因
かえだいせき 替田遺跡	つしみなみこうじ 津市南河路	24201	759	34度 43分 16秒	136度 28分 57秒	19990913～ 20000113	Ｆ地区 1400	平成11年度一般国道163号国補道路特殊改良（第１種）事業
		24201	759	34度 43分 10秒	136度 28分 56秒	19991111～ 19991222	Ｇ地区 280	平成11年度県営ほ場整備事業(津中部地区)

	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
替田遺跡	Ｆ地区 集落跡	弥生時代 古墳時代 飛鳥～平安時代 鎌倉時代以降	自然流路、土坑、溝、小穴 土坑、溝 掘立柱建物、柱列、井戸、 土坑、溝 土坑、溝	縄文土器 弥生土器 土師器、須恵器 製塩土器、黒色土器 灰釉陶器、八花硯 陶器椀、曲物	平安時代後期の集落跡。
	Ｇ地区 集落跡	古墳時代 飛鳥～平安時代 鎌倉時代以降	土坑、溝 土坑、溝 土坑、溝	弥生土器、石鏃 土師器、陶器椀、曲物	

三重県埋蔵文化財調査報告252

替田遺跡（第４次）発掘調査報告

２００４（平成１６）・３

編集・発行　　三重県埋蔵文化財センター
印　　刷　　㈲　山　文　印　刷